

エジプト学研究第 21 号 2015 年

The Journal of Egyptian Studies Vol.21, 2015

目次

〈序文〉	吉村作治	3
〈調査報告〉		
2014 年 太陽の船プロジェクト 活動報告	黒河内宏昌・吉村作治	5
第 7 次ルクソール西岸アル＝コーカ地区調査概報		
近藤二郎・吉村作治・河合 望・菊地敬夫・柏木裕之・竹野内恵太・福田莉紗		19
〈特別寄稿論文〉		
年輪年代学とエジプト学	ピアース ポール クリースマン・ジェフリー S ディーン	45
〈研究ノート〉		
中王国時代の装身具利用からみた埋葬習慣の地域性	山崎世理愛	59
〈修士・卒業論文概要〉		
エジプト先王朝時代における石製品研究		
—その生産と流通からみた地域統合過程の変遷を中心に—	竹野内恵太	79
「古代テーベとそのネクロポリス (The Ancient Thebes and its Necropolis)」における		
遺跡の保存と活用	福田莉紗	87
古代エジプト古王国時代から第一中間期における王権観	松永修平	96
〈活動報告〉		
2014 年度 早稲田大学エジプト学会活動報告		103
2014 年 エジプト調査概要		107
〈編集後記〉	近藤二郎	113

The Journal of Egyptian Studies Vol.21, 2015

CONTENTS

Preface	Sakuji YOSHIMURA.....	3
Field Reports		
Report of the Activity in 2014, Project of the Solar Boat	Hiromasa KUROKOCHI and Sakuji YOSHIMURA.....	5
Preliminary Report on the Seventh Season of the Work at al-Khokha Area in the Theban Necropolis by the Waseda University Egyptian Expedition	Jiro KONDO, Sakuji YOSHIMURA, Nozomu KAWAI, Takao KIKUCHI, Hiroyuki KASHIWAGI, Keita TAKENOUCI and Risa FUKUDA.....	19
Articles		
Dendrochronology and Egyptology	Pearce Paul CREASMAN and Jeffrey S. DEAN.....	45
Regional Variability of Personal Adornments and Burial Customs in the Middle Kingdom	Seria YAMAZAKI.....	59
Summary of the Recent Undergraduate Theses.....		79
Activities of the Society, 2014-15.....		103
Brief Reports of Fieldworks in Egypt, 2014.....		107
Editor's Postscript.....	Jiro KONDO.....	113

序文

早稲田大学エジプト学研究所の紀要「エジプト学研究第21号」が発行される運びとなりました。若干発行が遅れましたが、執筆者の皆さんの力作を読むことができとても嬉しいです。

それにしましても、論文が1点、しかも外国の方というのがとてつもなく悲しいですね。調査報告が少ないのは調査そのものがエジプト国内の政治の混乱の影響を受けますから仕方がないわけですが、論文がないのはいかがなものかと思えます。ただ研究ノート、修士、卒業論文概要が4点あるのが若干の救いです。しかし毎回書いていますが、これでいいのでしょうか。私たちは研究者のプライドを捨ててしまったのでしょうか。それとも研究者でなくなってしまったのでしょうか。きっと日々の生活が雑事で忙しくてとてもそこまで手が回らないというのが本当のところでしょうが、そこを何とかするのが研究者ではないかと思うのです。もし皆さんが研究者をやめるというのなら、この紀要を出すのをやめてもいいのではないかと思っています。編集をしてくれている人も嫌になってしまうのではないかと思いますから。若手に執筆のチャンス差し上げようとの思いでこの紀要を始めたのですが、そういう心遣いはいらぬという若手の要望でしたらやめます。私たちの紀要はなあなあのもではなく、査読してくださっている先輩方も一生懸命に見てくださっています。

エジプトの国内混乱は日本のマスコミの取り上げ方に偏重がありますので、ニュースの報道通りではありませんが、やはり気をつけた方がいいとは思いますが、それだからこそ紀要に論文や研究ノートを出す意味があるわけです。もし若手にその気がないのなら方法を考えなければなりません。是非若手研究者の皆さん真剣に考えて下さい。私は今すぐでもこの紀要をやめる決定をするのは容易いことですが、それではあまりにも悲しすぎるのでこの文章を書きました。ともかく研究者なら研究者としての覚悟がほしいです。

吉村 作治

早稲田大学名誉教授
東日本国際大学副学長

2014年 太陽の船プロジェクト 活動報告

黒河内 宏昌*¹・吉村 作治*²

Report of the Activity in 2014, Project of the Solar Boat

Hiromasa KUROKOCHI*¹ and Sakuji YOSHIMURA*²

Abstract

This is an report of the project of the Solar Boat (the Second Boat of King Khufu) in 2014. The activities were summarized in the following items.

1. Summary
2. Arrangement of facilities
3. Extraction of the wooden pieces
4. Conservation
5. Photographing, measuring and study on reassembling
6. Transportation of the wooden pieces to GEMCC
7. Public relation

In 2014, the work of extracting, conserving and measuring the wooden pieces of the Second Boat of King Khufu has been serious. The summary of each work is as follows.

The construction of the conservation laboratory, shelves in GEMCC for storing the wooden pieces and the shelter covering the cover stones were finished. (Item No.2)

We extracted the wooden pieces from No.69 to No.304 which belong to the first and the second layer of pieces in the pit. Before extracting them, 3D scanning, photographing, cleaning and tentative reinforcement of the wooden pieces were finished. We started making database in which all data would be recorded by each section of the work in the site. (Item No.3)

The conservation work is divided into two steps. The first one that we started in this year is for strengthening the wood, jointing and reshaping the broken and deformed parts. The second one, the conservation for reassembling, will be done in the future. We decided the procedure of the first step conservation work and finished with total 93 wooden pieces in 2014. (Item No.4)

We took photographs of 6 side of each wooden piece whose conservation work was finished. And also we started 3D scanning of each one for the study on reassembling the boat. (Item No.5)

After that, total 68 wooden pieces among ones whose recording work were finished, were transported to the special storage space we made in GEMCC. GEMCC has very good environment of temperature and humidity for storing the wooden articles. (Item No.6)

The TV specials program (supervised by Sakuji Yoshimura, produced by RKB) entitled "Mysterious Voyage to the Ancient Egypt" was broadcasted through TBS network on December 14th. And the symposium entitled "Message from Ancient Egyptian People through the Solar Boat" (July 28th, at Waseda University Ono Azusa Memorial Hall) was held. (Item No.7)

* 1 東日本国際大学エジプト考古学研究所客員教授

* 2 東日本国際大学副学長／早稲田大学名誉教授

* 1 Associate Professor, Higashi Nippon International University,
Institute of Egyptian Archaeology

* 2 Vice President, Higashi Nippon International University
Professor Emeritus, Waseda University

2014年の活動を、以下の項目に分けて報告する。

1. 概要
2. 現場施設の整備
3. 部材の取り上げ
4. 保存修復
5. 記録
6. GEMCC への移送
7. 広報および学術発表

1. 概要

2014年は、クフ王第2の船の発掘、保存、組み立て復原の作業を本格化した年となった。まず保存修復場や取り上げのための設備等、現場施設を整備し(2)、部材の取り上げをペースに乗せ(3)、10名ほどのコンサーバーターを招き保存修復作業を継続的に進めた(4)。そして写真撮影や三次元測量などの記録(5)を終えた部材を、GEMCC(大エジプト博物館保存修復センター)に運んで保管する(6)まで、劣化した船の部材を救い出して復原へとつなげるための一連の基礎作業をルーティーン化した。

一方でこのプロジェクトは、「大エジプト博物館(GEM)建設事業実施促進支援業務(第二の太陽の船復原に係る技術支援)」としてJICAより支援を受けている。JICAの目指すところに沿って、各作業はGEMCCの職員をはじめとするエジプト人と協同して行われ、彼らへの技術指導もまた本格化してきている(図1)。



図1 リチャード・ジャスキ氏がエジプト人と日本人のコンサーバーターを指導している光景
Fig.1 Mr. Richard Jaeschke giving instructions to Egyptian and Japanese conservators

以下、参加したメンバーを列記する（敬称略）。

A. 日本側メンバー

吉村作治	〔統括〕
黒河内宏昌	〔現場主任〕
高橋寿光	〔部材の取り上げ〕
伏屋智美	〔 〕
米山由夏	〔 〕
リチャード・ジャスキ	〔保存修復〕
青木繁夫	〔 〕
イザベラ・ウフマン	〔 〕
西坂朗子	〔 〕
吉村佳南	〔 〕
池内克史	〔三次元測量〕
影沢政隆	〔 〕
鎌倉真音	〔 〕
山田綾乃	〔記録測量〕
福田莉紗	〔 〕
吉村龍人	〔現地事務所所長〕
ユーセフ・カーリッド	〔現地事務所技師〕
岩出まゆみ	〔広報〕
佐々木愛	〔事務局〕

B. エジプト側主要スタッフ

アフフィィ・ローハイエム	〔エジプト側プロジェクトリーダー〕
アイーサ・ジダン	〔エジプト側チーフコンサバーター〕
ディア・エルディン	〔インスペクター〕
エザト・フセイン	〔チーフワーカー〕

2. 現場施設の整備

(1) 保存修復場

我々の現場はクフ王ピラミッド南面足元に位置する（図2）。その現場に建つ第2の船ピットを覆う大きなテント倉庫の中に、保存修復場の建物を建設し、その内部に部材収納棚、空調機器、作業机、照明設備などを設置した（図3）。

(2) GEMCC 内部材収納スペース

ピットから取り上げた部材は、上記保存修復場の中で保存修復を終えたのち、GEMCC内に設けた専用の収納スペースに移送される（図4）。収納棚の棚数は合計482段で。すべての部材を納めることはできないが、不足分は2015年に追加する予定である。



図2 現場遠景 (かまぼこ型の建物がピットと作業場を覆う大テント倉庫)

Fig.2 View of the site (round roofed building is the large tent warehouse which covers the pit and working area)



図3 保存修復場の内部

Fig.3 Interior of the conservation laboratory



図4 GEMCC 内に設けた第2の船部材のための収蔵スペース
Fig.4 Storing space for the Second Boat set in the GEMCC



図5 鉄骨製の蓋石覆い舎
Fig.5 Steel framed shelter for the cover stones

(3) 新しい蓋石用シェルター

春期の砂嵐で木造の蓋石用覆い舎が倒壊したため、鉄骨による新しい覆い舎に建て替えた(図5)。

以上の施工はSAMA CONSTRUCTION CO.に依頼した。

3. 部材の取り上げ

2014年1月～12月の間に、部材番号69番から304番までの部材をピットから取り上げ(部材番号202、215、231、290、297、298を除く)、保存修復場へと運んだ。これらの部材はピット内の層位で言うと、第1層(部材番号1～149)および第2層(部材番号150～304)に当たる。

取り上げの手順は、まず第1層、第2層それぞれの最初の部材を取り上げる前に、各層をレーザースキャナーにより三次元測量し、部材の正確な位置関係をとらえたイメージを作成する(図6)。またスチルカメラによる俯瞰連続写真を撮影し、部材の詳細な形状をとらえたイメージを作成する(図7)。両者により正確、精密な部材の出土図を描くことができるようになる(図8)。

次に、個々の部材をピットから取り出す前に、部材を詳細に観察し、トータルステーションによる位置測量、写真撮影、クリーニングを行う。そして部材のとくに脆弱な個所には、和紙をクルーセルGで貼りつけるフェーシングを行うか(図9)、あるいはパラロイドB72による補強を施したのちに、部材を取り上げる。

これら一連の作業で得られた資料をもとに、エクセルファイルにデータを紐付ける形のデータベースを作成する。このデータベースには、保存修復など別の作業で得られたデータも随時加えられていき、全作業過程を通じてのデータの集積場となる。



図6 ピット内での部材の三次元測量によるイメージ
Fig.6 A 3D scanning image of an wooden pieces layer in the pit



図7 同じ個所のスチルカメラによるイメージ

Fig.7 An image taken by the still camera of the same place as above

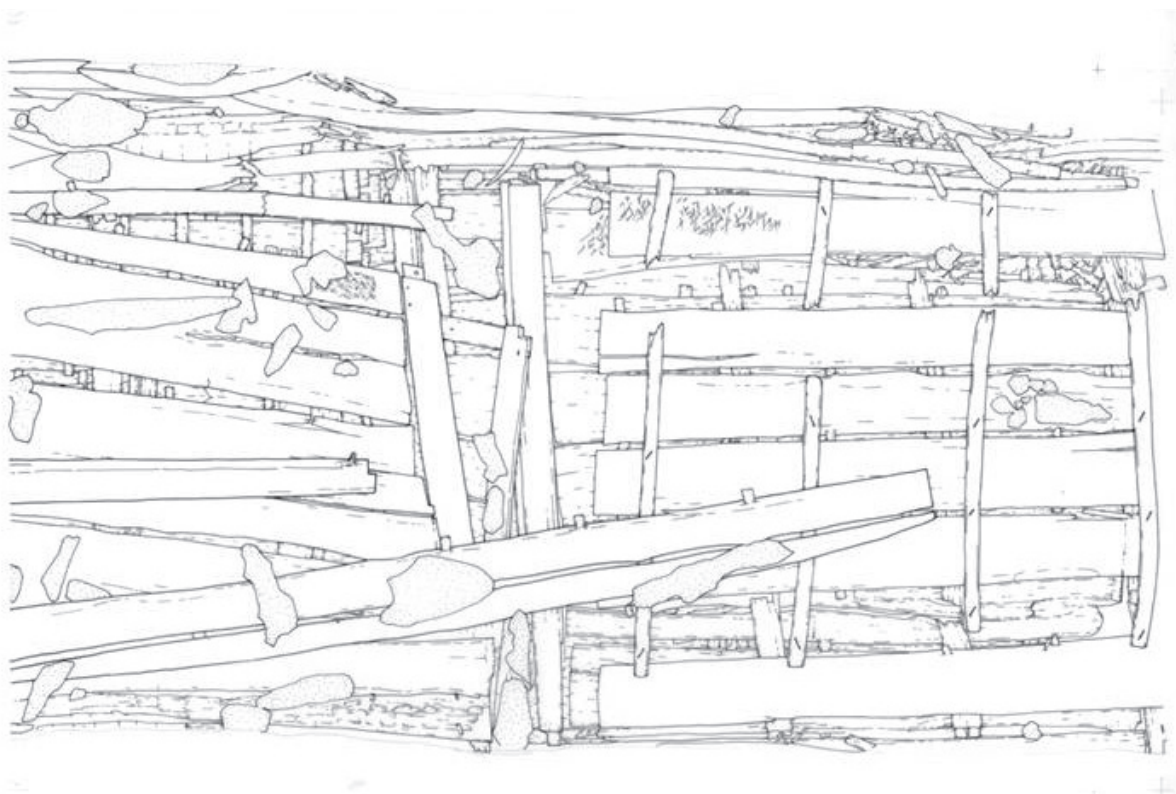


図8 二つのデータから描き起こした部材出土図

Fig.8 A drawing of the wooden pieces layer based on the above two data



図9 フェーシングによる補強をしている光景

Fig.9 View of the facing procedure of tentative reinforcement for the deteriorated wood

4. 保存修復

(1) 基本計画

部材の保存状態が大変に悪く、脆弱になっているため、私たちは組み立て復原に向けての部材の保存修復を、二つの段階に分けて行うこととした。第一段階は、部材が当初の形状をある程度取り戻し、ハンドリングできるだけの強度を持つようになるための処理である。そして第二段階は、記録作業を通した復原考察が終了し、部材の当初形状が確定したのちに、それに沿って最終的な矯正を行い、組み立てを視野に入れてさらに強度を持つようにするための処理である。現在行っているのは第一段階の保存修復であり、2014年末までに93点の部材の保存修復を終了した。

(2) 作業手順

①殺菌処理

保存修復の前に付着したカビなどの微生物を殺菌するため、エチルアルコール（70%水溶液）を塗布する。また保存修復場内の湿度を50～60%に保ち、微生物の活動を抑える。

②強化処理

部材の変形や接合を可能にするために、パラロイドB72（アセトン溶液）を強化剤として、滴下、塗布で用いる（図10）。比較的状態の良い部材は出来るだけ処理をせず、第2次保存修復に備える。



図 10 パラロイド B72 の滴下
Fig.10 Treating with Paraloid B72 (acetone solution)

③接合・矯正

破損した部材は、明確に確認できる場合は、これを接合する。変形した部材は、よりオリジナルに近い、安定した保存が出来る形状まで矯正する（図 11, 12）。

④補修

欠損している箇所が強度的に充填が必要な場合は、ガラスマイクロバルーンによって埋める。そして他のオリジナルの箇所と区別が出来るような色調の塗料で、ガラスマイクロバルーン部を着色する（図 13）。

(3) 強化剤のテスト

一方で、パラロイド B72 では強化しきれないきわめて脆弱な部材や、厚さの厚い大きな部材のために、以前より提案されていたナノ・セルロースがどれくらい安全で有効であるか、他に好適な物質はあるかどうかといったテストを、青木繁夫教授の指導のもと（地方独立行政法人）東京都立産業技術研究センターの協力を得て行った。



図 11 折れて変形してしまった部材（部材番号 90）
Fig.11 Broken and changing its original shape (Piece No.90)



図 12 同一部材をパラロイドにより接合し形状の矯正をした状態
Fig.12 Jointing and reshaping the Piece No.90 with Paraloid



図 13 ガラスマイクロバルーンによる充填と着色
Fig.13 Filling missing parts with glass micro balloon and painting

5. 記録

(1) 写真撮影

保存修復を終えた部材の6面（上下面および4側面）を写真撮影した（図 14）。

(2) 三次元測量

池内克史教授および東京大学生産技術研究所池内研究室のメンバーにより、レーザースキャナーを用いてピット内の部材配置、および取り上げた部材の三次元測量を開始した（図 15）。部材の三次元測量データは、コンピュータによる復原考察の資料となる。

6. GEMCC への移送

現場はスペースが限られており、すべての部材を収蔵し続けることはできない。保存修復を終えた部材は、空調の整った GEMCC の収蔵庫の一画に設けたクフ王第 2 の船専用の収納スペースに運び、組み立て復原までそこで保管することにした。2014 年は記録を終えた 68 点の部材を、3 回に分けて、GEMCC に移送した（図 16, 17）。



部材番号 75 上面



同 下面



同 東面



同 西面



同 南面



同 北面

図 14 部材番号 75 の 6 面写真
Fig.14 Photographs of six sides of Piece No.75



図 15 部材番号 56 の三次元測量イメージ
Fig.15 A 3D scanning image of Piece No.56



図 16 部材を移送用の木箱に詰めている光景
Fig.16 View of packing a wooden piece into a wooden box for transportation



図 17 GEMCC に到着したのちに部材を取り出している光景
Fig.17 View of unpacking after arriving at GEMCC

7. 広報および学術発表

2014年に行った主な広報活動と学術発表は以下の通りである。

(1) TV 放映

吉村作治監修、RKB 毎日放送制作、「古代エジプトミステリー紀行」、12月14日（日）15:30～17:00、TBS 系列全国ネット

(2) シンポジウム

第3回太陽の船シンポジウムー太陽の船にこめられた古代エジプト人からのメッセージ、2014年7月28日（月）、18:30～20:30、於早稲田大学小野記念講堂

(3) 学会発表

日本オリエント学会大会にてポスター発表（黒河内宏昌）および学術講演（柏木裕之、高橋寿光）

第7次ルクソール西岸 アル＝コーカ地区調査概報

近藤 二郎^{*1}・吉村 作治^{*2}・河合 望^{*3}・菊地 敬夫^{*4}
柏木 裕之^{*5}・竹野内 恵太^{*6}・福田莉紗^{*7}

Preliminary Report on the Seventh Season of the Work
at al-Khokha Area in the Theban Necropolis
by the Waseda University Egyptian Expedition

Jiro Kondo^{*1}, Sakuji Yoshimura^{*2}, Nozomu Kawai^{*3}, Takao Kikuchi^{*4},
Hiroyuki Kashiwagi^{*5}, Keita Takenouchi^{*6}, and Risa Fukuda^{*7}

Abstract

The team from the Institute of Egyptology at Waseda University has carried out clearance, conservation and documentation at the tomb of Userhat, Overseer of King's Private Apartment under Amenhotep III (TT 47), and other tombs in the vicinity at Al-Khokha Area in the Theban Necropolis since 2007. Although the tomb of Userhat is one of the most important private tombs from Amenhotep III's reign, no comprehensive scientific research has been undertaken because its exact location had become unknown even after Howard Carter wrote its short report in 1903.

In the previous seasons, we rediscovered the tomb of Userhat, consisting of the forecourt, doorway, columned transverse hall, and inner hall. Notably, we found the entrance of the tomb bearing decorated lintel and doorjambs on both sides with hieroglyph inscriptions, which was not reported by Howard Carter. We also found the relief decoration depicting Amenhotep III and Queen Tiye seated under a canopy, which was reported by Howard Carter. In fact, Queen Tiye's portrait in this scene is now in the collection of the Royal Museums of Art and History, Brussels. At the inner hall, we found a couple of statue, probably of Userhat and his wife, was carved in the south wall of the hall. In the last season, excavations were continued in the rear part of the transverse hall where Amenhotep III and Queen Tiye are represented. We also revealed a large portion of the southern part of the forecourt by removing a great amount of debris.

In this season, we continued clearance at the tomb of Userhat (TT47) and its vicinity in order to obtain more information related to the tomb. Clearance was mainly conducted in three areas. We began cleaning the southern part of the forecourt, which had been accumulated with limestone blocks, chippings, and debris from ancient

* 1 早稲田大学文学学術院教授 / 早稲田大学エジプト学研究所所長
* 2 早稲田大学名誉教授 / 東日本国際大学副学長・教授
* 3 早稲田大学高等研究所准教授 / カイロ・アメリカン大学客員教授
* 4 東日本国際大学エジプト考古学研究所客員教授
* 5 東日本国際大学エジプト考古学研究所客員教授
* 6 早稲田大学大学院文学研究科博士課程
* 7 早稲田大学大学院文学研究科修士課程

* 1 Professor, Faculty of Letters, Arts, and Sciences, Waseda University/ Director,
Institute of Egyptology, Waseda University

* 2 Professor Emeritus, Waseda University/ Vice President and Professor,
Higashinohon International University

* 3 Associate Professor, Waseda Institute for Advanced Study, Waseda University /
Visiting Professor, Department of Egyptology, The American University in Cairo

* 4 Visiting Professor, Institute of Egyptian Archaeology, Higashinohon International
University

* 5 Visiting Professor, Institute of Egyptian Archaeology, Higashinohon International
University

* 6 Doctoral student, Department of Archaeology, Waseda University

* 7 MA student, Department of Archaeology, Waseda University

to modern times. In the middle of the southern wall of the forecourt, we found a tomb entrance that leads to an unfinished tomb(KHT01). Also, it was found that this unfinished tomb is connected at its rear part with a Ramesside tomb belonging to Khonsuemheb, chief brewer of the temple of Mut(KHT02). The second area of the work was the northern part of the transverse hall of TT47 in order to map the plan and elevation of the tomb. The third area is the area to the east of the forecourt of TT47. In this area we removed the sand accumulation in order to find the access to the forecourt.

1. はじめに

早稲田大学古代エジプト調査隊は、1972年1月にエジプト・アラブ共和国、ルクソール西岸のマルカタ南遺跡で発掘調査を開始し、1974年1月にコム・アル＝サマク（魚の丘）において、新王国時代第18王朝アメンヘテプ3世時代の彩色階段を発見した¹⁾。この発見を受けて、アメンヘテプ3世時代の遺構をその後の主な研究対象とし、アメンヘテプ3世の王宮であるマルカタ王宮址、アメンヘテプ3世時代のルクソール西岸岩窟墓や王家の谷・西谷のアメンヘテプ3世王墓の調査などを実施してきた²⁾。

こうした一連のアメンヘテプ3世時代の研究の一環として、早稲田大学エジプト学研究所は、2007年度

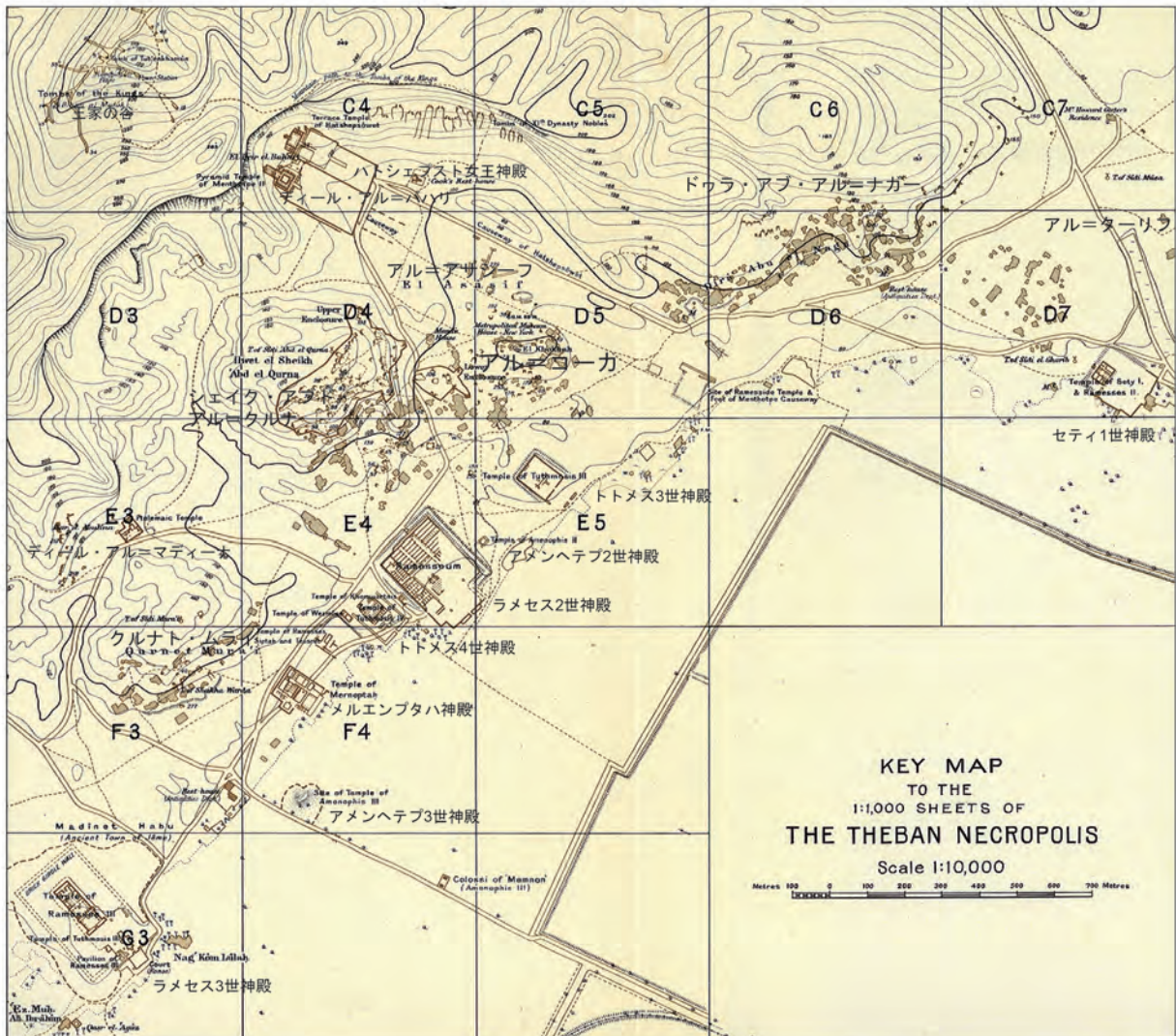


図1 ルクソール西岸地図 (Engelbach 1924: pl.II を一部改変、スケール 1:20,000)

Fig.1 Map of Theban Necropolis

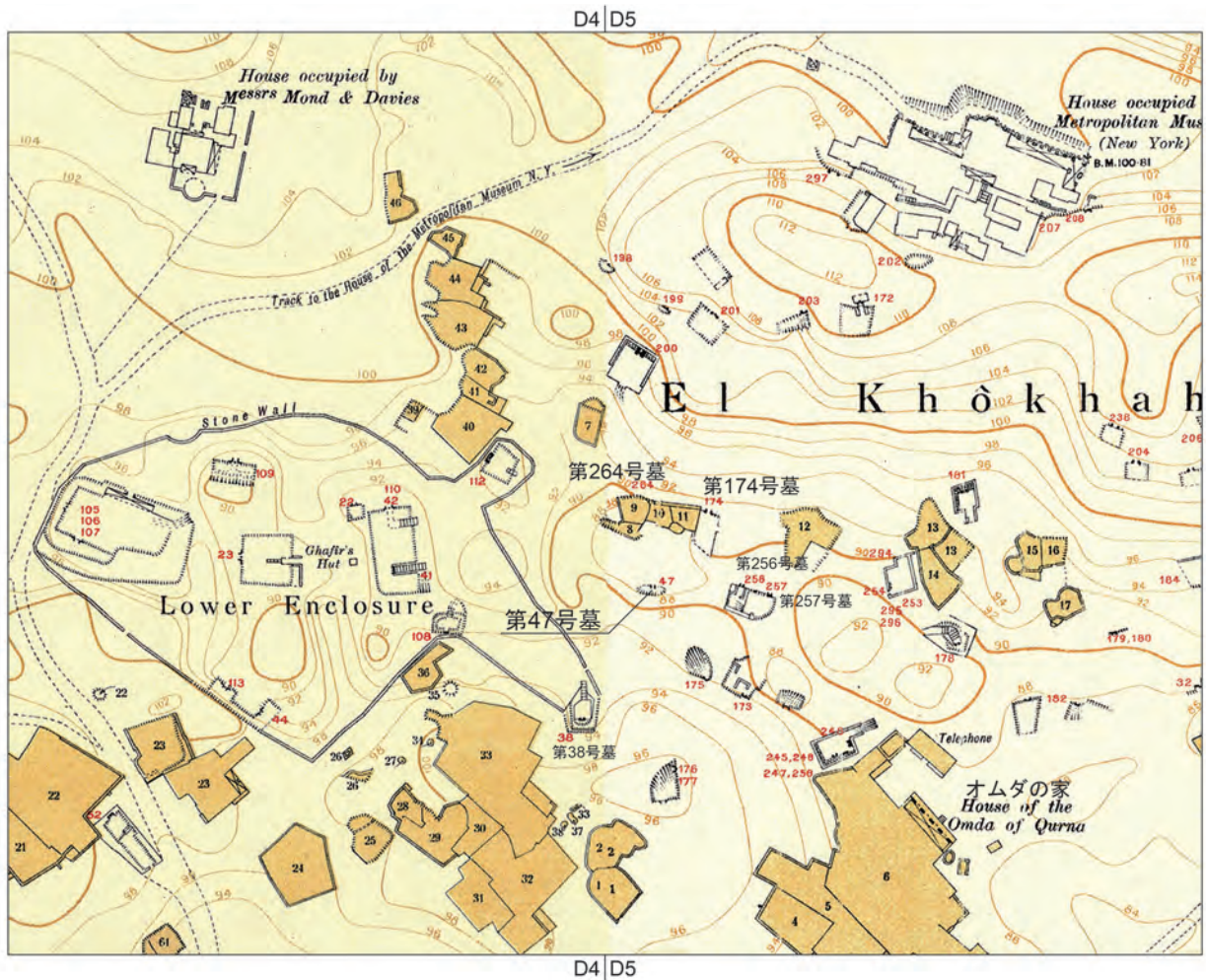


図2 アル=コーカ地区地図 (“Map of the Theban Necropolis” of Survey of Egypt from 1922 to 1924 を一部改変、スケール 1:2,000)
Fig.2 Map of al-Khokha area

から新たにルクソール西岸、アル=コーカ地区に位置するアメンヘテプ3世時代の岩窟墓、第47号墓を対象に調査を開始した(図1, 2)。調査の対象とした第47号墓は、アメンヘテプ3世の後宮(ハーレム)の長官などを務めたウセルハトという人物の墓で、アメンヘテプ3世時代の高官墓に特徴的な、良質なレリーフ装飾と列柱を備えた大型岩窟墓の1つとして極めて重要である。本調査では、墓の構造、装飾、被葬者の称号、家族関係などを明らかにするとともに、これらの資料をもとに研究を実施し、同時代の大型岩窟墓の特質と発展を解明することを目的としている³⁾。

第47号墓はH.A. ラインド(Rhind)やH. カーター(Carter)などの報告により19世紀からその存在が広く知られていたものの⁴⁾、総合的な調査は実施されておらず、墓は厚い堆積に覆われ、正確な位置すら不明となっていた。こうした状況を受けて早稲田大学エジプト学研究所は、2007年12月にアル=コーカ地区において第47号墓の再発見・再調査を目的とした発掘調査を開始し、その後、毎年冬に調査を継続している。第3次までの調査により、これまでカーターなどによって報告されていなかった、第47号墓の入口と入口両脇の脇柱を新たに発見し、墓の入口の詳細を明らかにすることができた。脇柱にはそれぞれ5行の碑文が刻まれており、ウセルハトの称号「王の後宮の長官(*imy-r ipt nswt*)」と「王宮の印綬官の監督官(*imy-r htmtyw nw pr-nswt*)」の称号が認められた。続く第4次調査では、前室天井崩落箇所掘り下げを行い、内部の状況を観察した。第5次調査では、前室奥壁(西壁)の南側で、墓主のウセルハト、アメンヘテプ3世

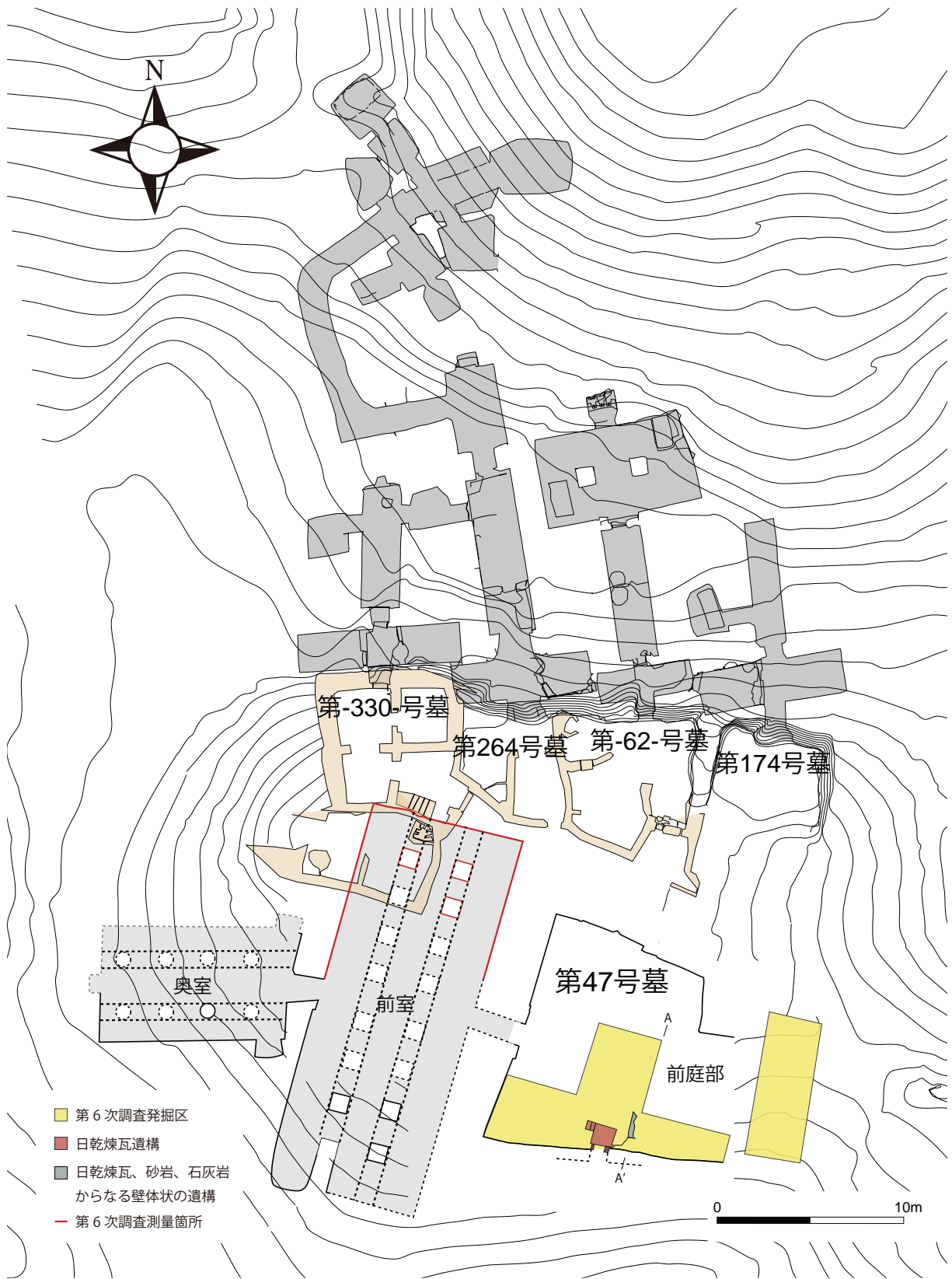


図3 第47号墓およびその周辺地図 (第7次調査終了時)

Fig.3 Map of TT47 and its vicinity

と王妃ティイが描かれた浅浮き彫りのレリーフ装飾と碑文を発見した。現在第47号墓由来の王妃ティイのレリーフがベルギーのブリュッセルの王立美術・歴史博物館に収蔵されているが(E. 2157)、本来装飾されていた場所が明らかとなった。また、併行して、第47号墓の北側に位置する第174号墓、第264号墓の記録調査および保存修復作業を実施した。第6次調査では、さらにこの浅浮き彫りのレリーフのある壁の周辺と前庭部の南側の発掘調査を継続した⁵⁾。

これらの成果を受け、第7次調査では主に第47号墓の前庭部の発掘調査を中心に調査を実施した。第47号墓の前庭部の調査では、前庭部内南側の様相が徐々に明らかとなり、新たに南壁に開口部が発見され、2基の岩窟墓(KHT01, KHT02(コンスウエムヘブ墓))が発見された⁶⁾。本稿では、主に第47号墓前庭部南側の発掘調査と新たに発見された2基の岩窟墓の概要について報告する⁷⁾。

2. 第47号墓の調査

(1) 前庭部内南側の発掘調査

第47号墓前庭部の南側には非常に厚い堆積土があり、前回の第6次調査において、崩落を防ぐための日乾煉瓦製の擁壁が築かれた。これにより前庭部内南側の発掘調査を行った。発掘調査は、前庭部の南西角から開始し、南壁に沿って東に向かって砂礫の除去を行った。南壁のほぼ中央部の砂礫を除去したところ、開口部が検出され、未登録の岩窟墓であることが確認された(写真1)。これを受け、調査日程の都合上、開口部の前にトレンチを設け、集中的に発掘調査を行った。その後、開口部から岩窟墓内部に進入すると東西方向に長軸をもつ柱をしつらえた比較的規模の大きい前室が確認され、岩窟墓をKHT01と命名した。さらに、前室の奥には別の岩窟墓の前室が貫通している状況が認められ、内部の壁面が極めて保存状態の良い壁画で



写真1 第47号墓の前庭部南壁に穿たれた未完成墓(KHT01)開口部

Photo.1 The entrance to the unfinished tomb (KHT01) hewn on the southern wall of the forecourt of TT47

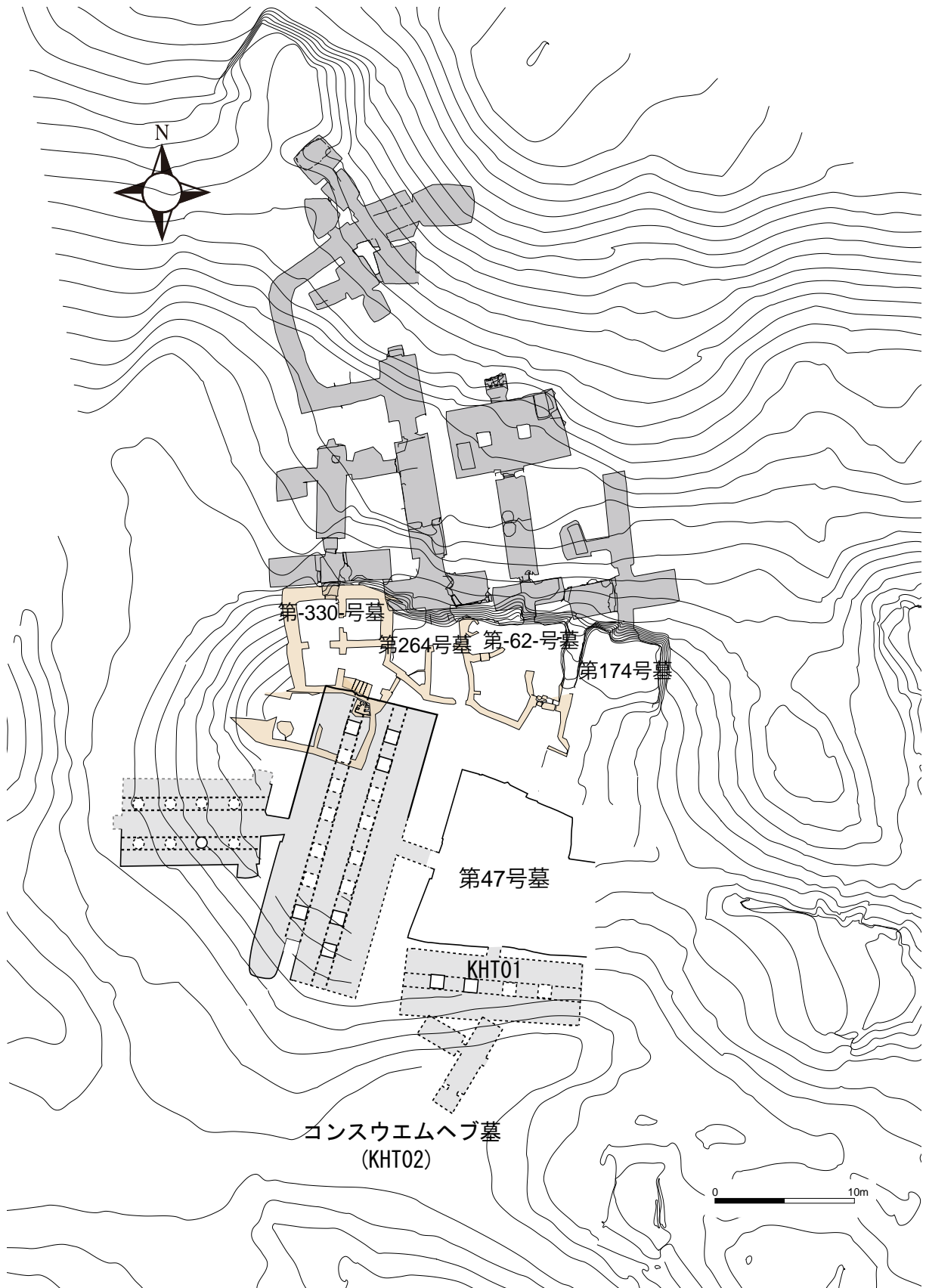


図4 第47号墓、KHT01、KHT02 およびその周辺地図
Fig4. Map of the Site, including the newly discovered tombs

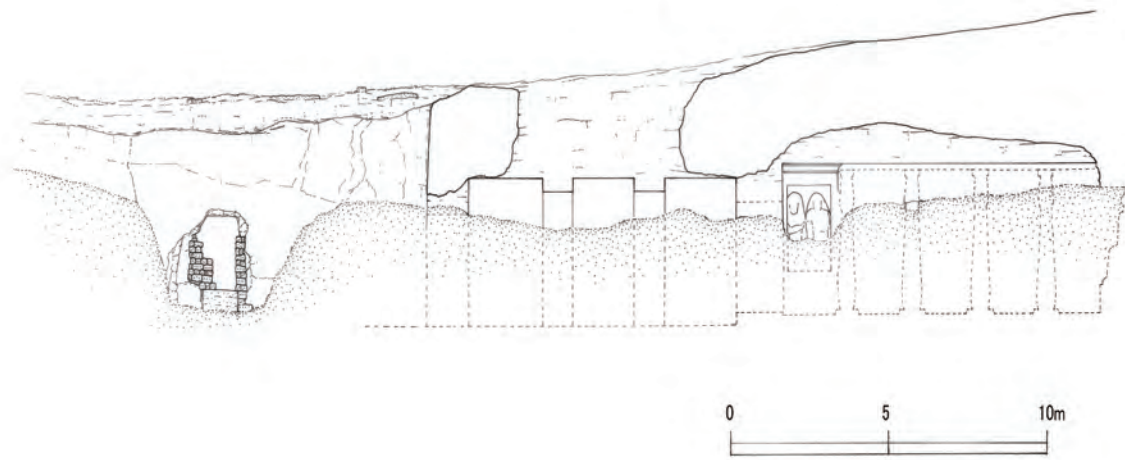
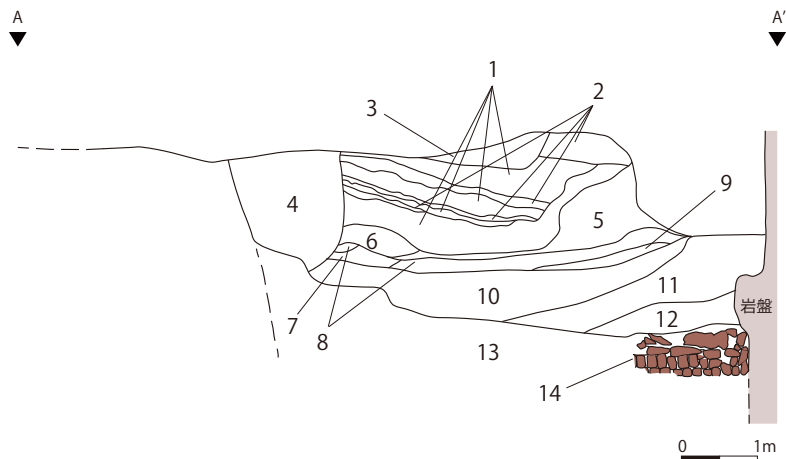


図5 第47号墓立面図（北より南を見る）
Fig.5 The Elevation of TT47, looking from north



- 1 灰色砂層①:近現代のゴミ。藁と糞を大量に含む。灰色砂層②と互層になり、北から南に傾斜している。
- 2 灰色砂層②:近現代のゴミ。小石を含む。灰色砂層①と互層になり、北から南に傾斜している。
- 3 石灰岩チップ層①:表層。小ぶりの石灰岩チップ。
- 4 灰色砂層③:攪乱。細かい藁と糞を大量に含む。
- 5 石灰岩チップ層②:20cm~30cmの幅を持つ石灰岩チップ。
- 6 石灰岩チップ層③:焼けた石灰岩チップ。村民のオープンの破片。
- 7 焼土:泥煉瓦を含む。
- 8 灰白色砂層①:石灰岩チップを少量含む。
- 9 灰白色砂層②:石灰岩チップを多量に含む。
- 10 灰白色細砂層:遺物をほとんど含まない。石灰岩チップと石灰岩の細片を少量含む。
- 11 灰白色砂層③:石灰岩チップを中量含む。
- 12 石灰岩チップ層④:10cm~20cmの幅を持つ石灰岩チップ。表面に白色スリッパを塗布した土器片を多く含む。
- 13 灰白色砂層④:ほとんど混じりけのない砂層。シャブティ、デモティックオストラカが出土。
- 14 壁体状遺構:日乾煉瓦、砂岩、石灰岩からなる壁体状の遺構。

図6 第47号墓前庭部東西セクション図
Fig.6 The East-West Section of the accumulation of the debris in the forecourt of TT47

装飾されていた(図4)。この墓はKHT02と命名され、壁面に記された碑文から被葬者は、コンスウエムヘブという人物であることが判明した。なお、コンスウエムヘブ墓の概要については後述する。

新たに2基の岩窟墓を発見したことで、開口部前において集中的に砂礫の除去を行った。開口部前の砂礫の堆積を除去すると、開口部の両側に脇柱のような日乾煉瓦の構造物が検出された。開口部の両端は本来垂直に整形されていたと思われるが、既に古代に崩落し、崩落欠損部に日乾煉瓦の脇柱をしつらえたようである。さらに、この日乾煉瓦製の脇柱の最下部に接して、日乾煉瓦製の階段付きのプラットフォーム状の構造物が検出された。開口部前の土砂の堆積が灰色砂層から灰白色砂層に変わると、シャブティ像、デモティック・オストラコン、素焼き製のローマン・ランプなどが出土した。この灰白色砂層は、遺物の内容や出土状況から、末期王朝時代からプトレマイオス朝時代の攪乱を受けていない層と判断された。日乾煉瓦製のプラットフォーム状構造物のすぐ東側から北の方向に真っ直ぐに伸びる壁体状の遺構が検出され、日乾煉瓦、砂岩、石灰岩などで構成された一種の壁として機能していたと見られる(図6)。開口部の北側の堆積の発掘では、シャブティ像、葬送用コーン、ジェセルカーラーセネブの名前が刻された砂岩製のレリーフ片、石灰岩製の方形彫像(ブロック・スタチュア)の破片が出土した。

(2) 第47号墓前室の測量調査

これまで第47号墓前室の北側は大量の土砂の堆積と天井部分の崩落により測量調査が行われなかったが、今次調査において測量調査が試みられ、3本の残存する角柱が確認された。この結果を受け、第47号墓の前室は、8本2列、つまり計16本の角柱から構成されていたことが明らかとなった(図3, 5)。

(3) 第47号墓前庭部東側堆積の発掘調査

第47号墓前庭部の東側には厚い堆積があり(図6)、この下に前庭部へ進入するアプローチの存在が想定されている。今次調査も砂礫の除去を継続した。この部分の堆積は灰黒色を呈しており、中には藁などの植物や動物の糞、ロープなどが多く混入されており、近傍住民の家畜小屋の廃棄物が多く堆積したものとみられる。

3. コンスウエムヘブ墓(KHT02)の概要

①はじめに

前述の通り、第47号墓の前庭部南壁のほぼ中央に開口部が検出され、未登録の岩窟墓2基が発見された。開口部は第47号墓前庭部の南に穿たれた墓KHT01の入口であることが確認され、同墓の前室の奥には内部が壁画で装飾されたコンスウエムヘブ墓(KHT02)が確認された。以下では、新たに発見されたコンスウエムヘブ墓の概要について報告する。

コンスウエムヘブ墓は黄色の背景の銘文帯を基調とし、壁画の様式からラメセス朝、特に第19王朝末に年代づけられる。

②被葬者とその家族

被葬者のコンスウエムヘブ(*Hnsw-m-ḥb*)は「ムウトの工房の長(*ḥry n šn^c n Mwt*)」、「ムウト神殿の醸造長(*ḥry ṯḥw n pr-Mwt*)」の称号を持つ人物である。妻はムウトエムヘブ(*Mwt-m-ḥb*)で、「ムウト女神の歌い手(*šm^cyt nt Mwt*)」の称号を持つ。娘の名前はアセトカー(*3st-ḥ3*)で、彼女も「ムウト女神の歌い手」の称号を持っている。ちなみにアセトカーは「彼女の娘」と記されており、コンスウエムヘブと血縁関係のある娘ではなく、連れ子であることがわかる。息子の名前はアシャケト(**š3-ḥt*)とペンアメン(*Pn-Imn*)で、アシャケトは、「ム



写真2 コンスウエムヘブとその家族
Photo.2 Khonsuemheb and his family



写真3 葬送場面

Photo.3 The Funerary Procession Scene



写真4 ラー・ホルアクティとオシリスを礼拝するコンスウエムヘブとその家族

Photo.4 Khonsuemheb and his family worshipping Rahorakhty and Osiris

ウトのウアブ神官」で父コンスウエムヘブと同じ「ムウト神殿の醸造長」の称号を持つ。ペンアメンも父と同じく「ムウト神殿の醸造長」の称号を持つ。

③墓の構造と装飾

コンスウエムヘブ墓は、テーベ西岸の岩窟墓に特徴的な逆T字形のプランをしており、入口は東の方角を向いていた。前室の北壁には被葬者コンスウエムヘブと妻のムウトエムヘブ、そして娘のアセトカーの彫像が彫られていた。前室の南壁は、隣のシャフトのある付属室に接続していた。前室西壁の中央は矩形の奥室に繋がっており、奥室の左奥から埋葬室に通じる階段が穿たれていた。なお、奥室は無装飾であった。

前室の壁面は、天井も含めほぼ全面にわたって装飾されていた（写真2）。北側の東壁には、コンスウエムヘブの葬送の図が描かれており、上段にはピラミッドを頂く墓の礼拝室の前でミイラとなったコンスウエムヘブの遺体に対する儀式の図があり、その背後に悲嘆する男女が描かれている（写真3）。下段にはコンスウエムヘブの遺体を乗せた葬送船が描かれている。同じ北側の西壁には、上段にコンスウエムヘブと妻のムウトエムヘブがオシリス神とアヌビス神に対し礼拝する様子が描かれ、下段にはコンスウエムヘブの息子たちがコンスウエムヘブとムウトエムヘブに供物を捧げる図が描かれている。南側の西壁には、上段にコンスウエムヘブとその家族がラー・ホルアクティ神とマアト女神を礼拝する様子が描かれ、下段にはトト神に導かれたコンスウエムヘブとその家族が背後にイシス女神とネフティス女神を伴ったオシリス神を礼拝する様子が描かれている（写真4）。反対側の東壁は未完成で赤い下絵の線で心臓の計量の図が描かれていた。天井はいくつかの異なる文様で装飾されていたが、特に中央には東側に太陽の船が描かれ、その下に「太陽神への讃歌」の銘文が記され、さらにその下には左右対称に礼拝の姿勢をとるコンスウエムヘブの姿が描かれていた。コンスウエムヘブの顔の部分は黒い顔料で塗られており、後世のものであるが、その時期に関しては明らかではない。

壁画は、保存状態が極めて良好であるが、各所で彩画されたプラスターが剥がれ落ちており、顔料も青系の色は退色が進んでいた。次期調査では、壁画と銘文の観察と同時に、今後の壁画の保存修復へ向けた調査を行う予定である。

4. 主要遺物

今次調査で出土した主要遺物の概要について報告する。

①砂岩製レリーフ片（図7-1）

寸法：高さ24cm、幅45cm

第47号墓前庭部よりジェセルカーラー・セネブ(*dsr-k3-r^c-snb*)とその妻ウアジュレンベト(*w3dt-rnpt*)の名前が記された砂岩製レリーフ片が出土した。これらの夫婦は左側に向かって礼拝の姿勢で表現されている。彼らは第47号墓の南に位置する第38号墓の被葬者で、第18王朝トトメス4世の治世の人物とされている⁸⁾。このレリーフ片は、おそらく第38号墓の入口上部のまぐさ石を構成していたものと推測される⁹⁾。アメン神の名前が刻まれた部分は削られており、アマルナ時代におけるアメン信仰への迫害の痕跡と思われる。以下に翻字と訳を示す。

第1行：[...] *sn-t3 n*

第2行：*wnn-nfr m3^c-hrw in sš ḥsbt*



図7 第47号墓およびその周辺出土遺物 (1)
Fig.7 Major finds from TT47 and its vicinity (1)

第3行：[(n) Imn jmy-r pr hm-ntr nw n Imn?]

第4行：*dsr-k3-r(-snb) m3^c-hrw*

第5行：*sn.t=f nbt pr*

第6行：*w3d-rnp.t m3^ct-hrw*

第1行：に対し大地に接吻すること

第2行：ウネンネフェル、声正しき者、会計書記

第3行：アメン (の)、家令、アメン神のヘムネチエル神官？

第4行：ジェセルカーラー (セネブ)、声正しき者

第5行：彼の妹、家の女主人

第6行：ウアジュレンバト、声正しき者

通して訳すと、「アメン (の) 会計書記、家令、アメン神のヘムネチエル神官、ジェセルカーラー (セネブ) 声正しき者、彼の妹、家の女主人、ウアジュレンバト、声正しき者によって、ウネンネフェル、声正しき者に対し大地に接吻すること」となる。

②イピとアメンエムオパトの方形彫像 (図7-2)

寸法：高さ30cm、幅16cm、奥行12cm

この方形彫像片は石灰岩製で、2つの破片からなり、第47号墓の前庭部のほぼ中央部の灰白色砂層から出土した。これらの破片は方形彫像の左側の部分で、右手でレタスを持っている様子がわかる。頭部と足部は欠損している。

彫像片の正面には2行の垂直の銘文があり、約23cmの長さを測る。これら2行の銘文帯の左には、痕跡

からもう1行の銘文帯があったと考えられ、全部で3行の銘文帯で構成されていたと考えられる。中央の銘文帯には、「二国の主の家畜の偉大なる監督官 (*imy-r ihw w[r n nb-t3wy]*)」の称号が記されていたとみられることから、この方形彫像は第47号墓の北に位置する第264号墓の被葬者イピ (*Ipy*) のものであると推測される。第264号墓の被葬者イピは第19王朝のラメセス2世の治世の後期からメルエンプタハ王の治世の人物と考えられていることから、この彫像片も同年代に年代付けられる(近藤他 2010: 66-71; Kamp 1996: 541-543; Porter and Moss 1960: 345)。また、銘文からはアメンエムオペトという名の人物が読み取れるが、彼はイピの親戚と考えられる。以下、銘文の翻字と訳を示す。

第1行: [*htp-dj-nswt n....*] *n k3 n sš nswt jmy-r ihw w[r n nb-t3wy Ipy m3^c-hrw]*

第2行: *n k3 n sš nswt nfrw n pr-Imn Imn-m-int [m3^c-hrw]*

第1行: [王が与える供物・・・] 王の書記、二国の主の家畜の偉大なる監督官、イピ、声正しき者、のカーのために

第2行: アメンの所領の王の徴兵書記、アメンエムオペト、[声正しき者、]のカーのために

③木製彫像 (写真5)

寸法: 高さ約36cm

この木製彫像は、第47号墓前庭部南壁の開口部、KHT01号墓の入口の東側付近から出土した。おそらくプタハ・ソカル・オシリスを表していると思われる¹⁰⁾。彫像は本来表面に彩色が施されていたが、現在



写真5 木製彫像

Photo.5 The Wooden Statue

ではほとんど失われている。頭部の天辺中央部には穴が空いており、おそらく通常のプタハ・ソカル・オシリス像のように、二枚羽根の装飾が付けられていたと考えられる。長さ12cm、幅6.3cmの木製の二枚羽根の飾りも出土しており、下部に臍が付いていることからこのプタハ・ソカル・オシリス像に付属していた可能性がある。また彫像の足の下には立方体の突起部があり、おそらく矩形の台座の臍穴に据えられていたと考えられる。

④ 葬送コーン (図8, 9)

(1) ウセルハト (*Wsr-h3t*) の葬送コーン

今次調査では、銘文の判読可能な葬送コーンが25個出土した。このうち8個が第47号墓の被葬者ウセルハトのものである (D&M#406; Davies and Macadam 1957: #406; Dibley and Lipkin 2009: 133, 252)。今回出土のものを含めると、これまで出土したウセルハトの葬送コーンは25点となる (近藤他 2014: 49)。本稿では6点を報告する (図8)。図8-1は、これまで出土したウセルハトの葬送コーンのなかでも最も保存状態の良いものである。スタンプ面の直径は8.5cm、長さは約17cmである。スタンプ面が欠損した同規格の葬送コーンも多数出土しており、中には四角錐の形態のものもある。特徴的な規格と形態からウセルハトの葬送コーンであると考えられる。

(2) ネンタウアルエフ (*nn-t3-w3-r=f*) の葬送コーン

ネンタウアルエフの葬送コーンが2点出土した (図9-1, 2) (D&M#13; Davies and Macadam 1957: #13; Dibley and Lipkin 2009: 35, 197)。ネンタウアルエフは「育児所の子供 (*hrd n K3p*)」「ウアブ神官の監督官 (*imy-r w'bw*)」の称号を持つ。これらの葬送コーンは、おそらくシェイク・アブド・アル=クルナの彼の墓 (第398号墓) 由来であると考えられる¹¹⁾。年代は第17王朝末から第18王朝のハトシェプスト女王時代以前に年代付けられている。

(3) アアケペルカーラー (*ʿ3-hpr-k3-rʿ*) の葬送コーン

アアケペルカーラーの葬送コーンが1点出土した (図9-3) (D&M#103; Davies and Macadam 1957: #103; Dibley and Lipkin 2009: 57, 210)。アアケペルカーラーは「トトメス1世 (即位名「アアケペルカーラー」) の武器の所持者 (*By-h'w n ʿ3-hpr-k3-r*)」であり、この葬送コーンはトトメス1世の治世に年代付けられる。彼の墓は確認されていない。

(4) ピイア (*Py-i3*) の葬送コーン

ピイアの葬送コーンが1点出土した (図9-4) (D&M#562; Davies and Macadam 1957: #562; Dibley and Lipkin 2009: 172, 273)。ピイアは「王の供物の書記 (*sš wdḥw n nswt*)」で、妻の名前はネジェムトである。彼の墓は未確認で、年代も新王国時代の具体的な時期は明らかではない。

(5) デイドウ (*dydw*) の葬送コーン

デイドウの葬送コーンが1点出土した (図9-5) (D&M#22; Davies and Macadam 1957: #22; Dibley and Lipkin 2009: 37, 273)。デイドウは、アル=コーカ地区の我々の発掘区北側の丘の斜面に位置する第200号墓の被葬者である (Porter and Moss 1960: 303; Kampp 1996: 485-487)。第200号墓にはアメンヘテプ2世が描かれていることから、同王の治世に年代付けられる。

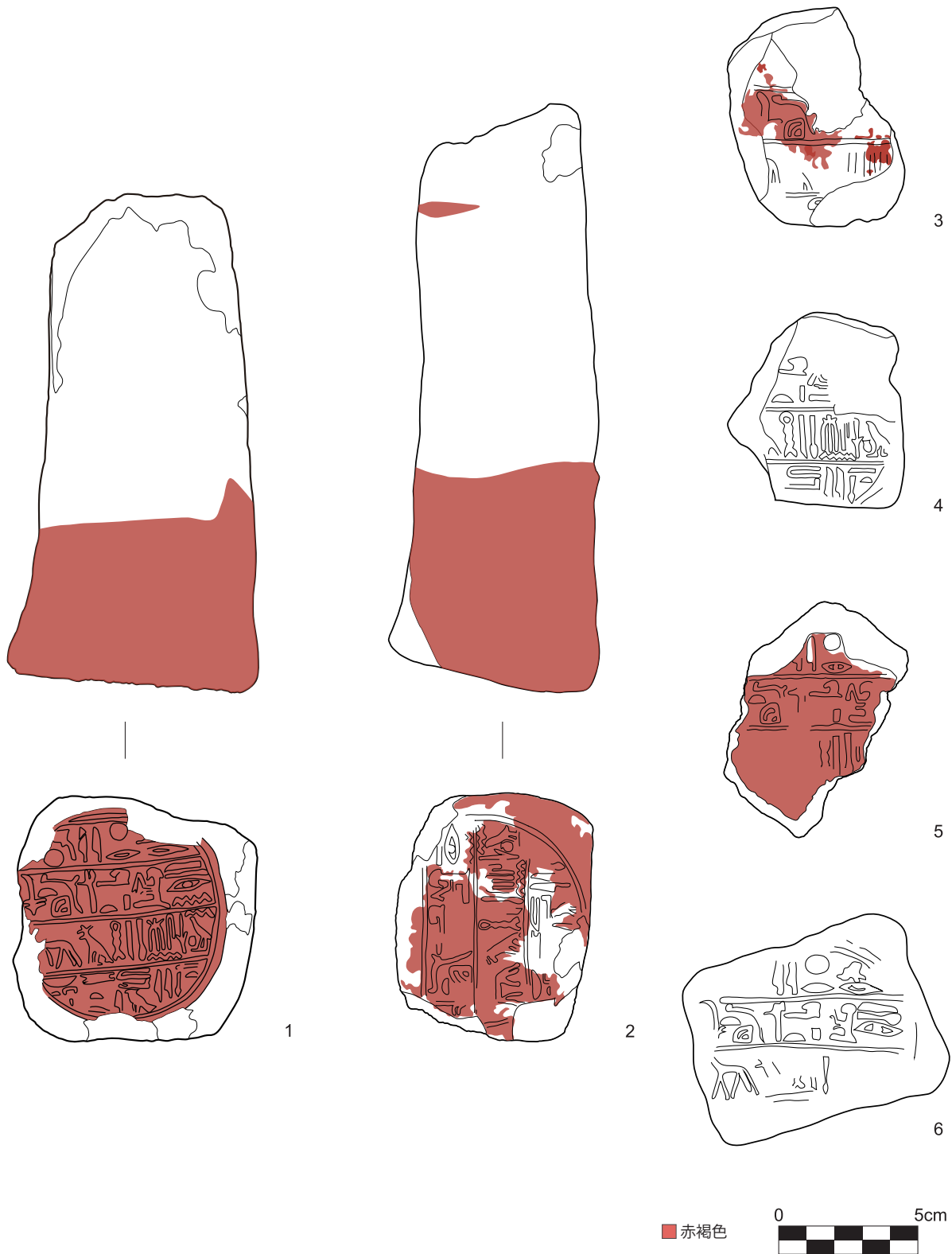


図8 第47号墓およびその周辺出土遺物 (2)
Fig.8 Major finds from TT47 and its vicinity (2)

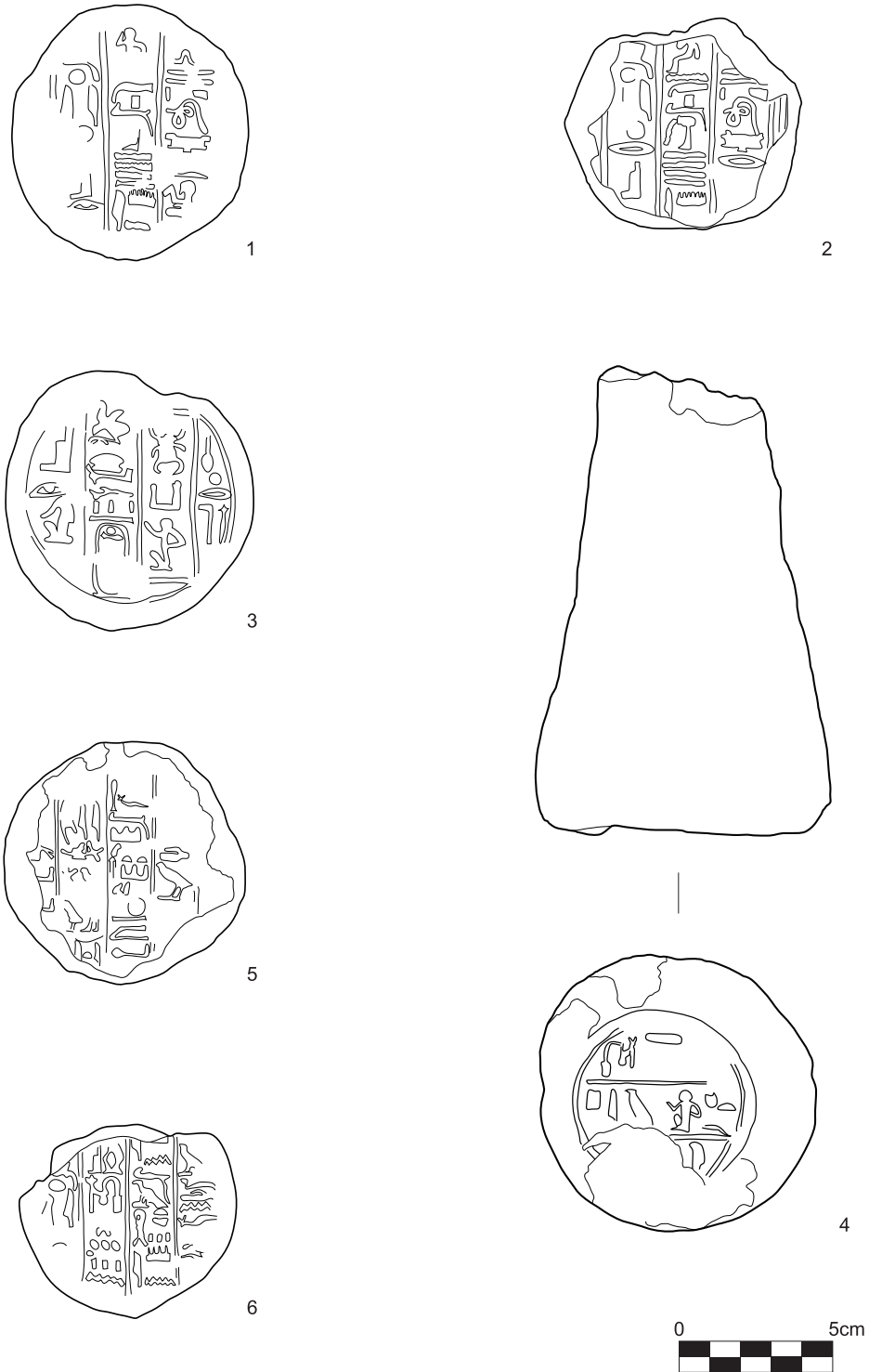


図9 第47号墓およびその周辺出土遺物 (3)
Fig.9 Major finds from TT47 and its vicinity (3)

(6) アメンエムオベト (*Imn-m-ipt*) の葬送コーン

アメンエムオベトの葬送コーンが1点出土した(図9-6)(D&M#73; Davies and Macadam 1957: #73; Dibley and Lipkin 2009: 50, 206)。この葬送コーンのスタンプ面は、かなり磨耗しているが、完形品には、彼の名前とニックネームであるチャネフェル(TA-nfr)が記されている。アメンエムオベトの墓は、メトロポリタン・ハウスの背後に位置するアル=コーカとアサシーフの間の丘陵の頂部に位置する第297号墓と考えられている(Kampp 1996: 567; Strudwick 2003: 5-7)。

⑤シャブティ像(図10)

第47号墓前庭部南壁の開口部、KHT01号墓の入口の東側より5体の青色ファイアンス製シャブティ像が出土し、内4体は同じ規格である(図10-1, 2, 写真6)。これらは長さ5.2~6.7cm、幅1.7~2.0cmで銘文は記されていないが、形態の特徴から末期王朝時代からプトレマイオス朝時代に年代付けられる。

その他のシャブティ像は、新王国時代から第3中間期に年代付けられるものが多い。以下では、そのうちの特徴的な4点の土製シャブティ像について報告する。

図10-3は、シャブティ像の上半身で、入念なヌビア鬘を被り、両腕を交差して鍬を持つ人物を表している。図10-4は、ヌビア鬘を被り右手で殻竿状の笏を持ち、長いキルトを身につけている。図10-5は、三裂鬘を被る女性を表し、両腕を交差して鍬を持っている。下部は欠損している。胴体には水平に銘文が記されており、「アメン神の歌い手(*šmꜣyt n(t) Imn*)」の称号を持つ女性であることがわかる。以上3点のシャブティ像は、形態と様式からラメセス朝(第19~20王朝)に年代付けられる。さらに、表面に青白色の顔料が塗られているシャブティ像は、頭に三裂鬘を被り、両腕を交差して鍬を持つ姿で表されているが、下部は欠損している(図10-6)。胴部に垂直の銘文が記されており、微かに*3sir*「オシリス」と読める。背中には黒インクで籠が描かれている。様式から、第3中間期に年代付けられる。

⑥アミュレット(図10-7)

胴体がミイラの姿で表現されたハヤブサを象った高さ5cmのアミュレットが出土した。おそらくホルスの4人の息子のケベフセヌウエフを表していると考えられる。このアミュレットは濃青色ガラス製で、2つの小さな穴が空いていることから、包帯に包まれたミイラを覆うビーズ・ネットに繋がっていたものと思われる。

⑦図像オストラコン(図11-1)

第47号墓前庭部の灰白色の層より図像が描かれたオストラコンが出土した。幅約34.5cm、高さ23.5cmの石灰岩の表面に赤冠を被り首飾りを付けた2人の王の姿が描かれている。2人の王は、赤色で描かれ、右側を向いている。首飾りは部分的に黄色で彩色されている。ディール・アル=マディーナの王墓造営職人の村出土の類例などから、これはおそらく絵師が墓に王の姿を描く際に練習として描かれたものと推測される(Cf. Andrews 2010)。類例は、同じアル=コーカで岩窟墓の調査を行っているハンガリー隊の発掘でも出土している(Bács, Fávián, Schreiber, and Török 2009: 158-166)。

⑧デモティック・オストラコン(図11-2)

第47号墓前庭部南壁の開口部、KHT01号墓の入口東側よりデモティック・オストラコンが出土した。高さ20cm、幅17cm、厚さ1.5cmの土器片に記されたものである。土器片の表面には5種類のデモティックの



写真6 ファイアンス製シャブティ
Photo.6 The Faience Shabties



図10 第47号墓およびその周辺出土遺物(4)
Fig.10 Major finds from TT47 and its vicinity (4)

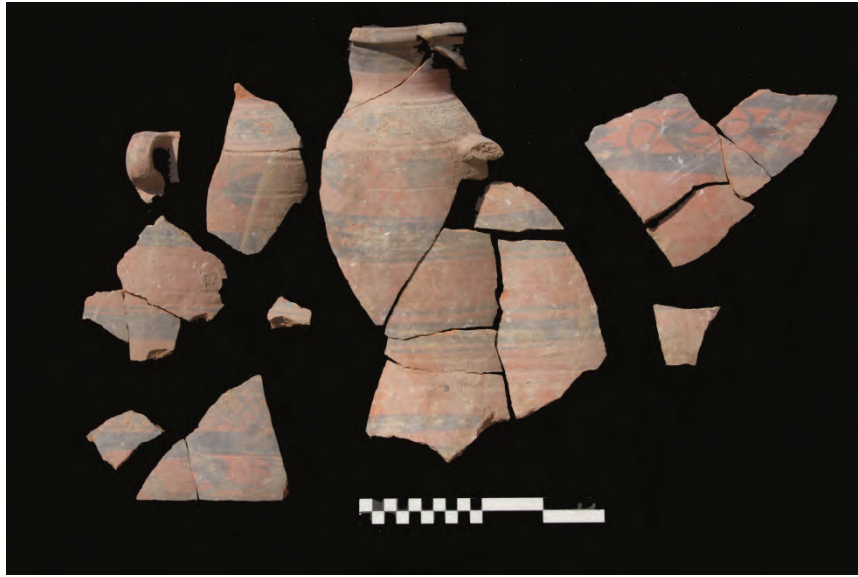


写真7 把手付き袋状土器
Photo.7 Two Handled Bag-shaped Jar

銘文が記されている。4種類の銘文は黒色インクで鮮明に記されているが、1種類は古代に消されたとみられる。年代は、プトレマイオス朝時代からローマ支配期の間と推定される。

⑨彩文土器(写真7、図11-3)

(1) 把手付き袋状土器

第47号墓前庭部の上層の灰色砂層から袋状あるいは「バラス」のような形態の土器の破片が出土した(写真7)。肩部に垂直状の把手が2つ付けられている。土器の表面は赤いスリップで覆われ、黒色インクで彩文が施されている。彩文は植物文様と帯状の装飾から構成される。同じアル=コーカで調査を行っているハンガリー隊により第32号墓から類例が出土しており、プトレマイオス朝時代の前3世紀後半から前2世紀に年代付けられている(Schreiber 2011: 130)。

(2) 高台付き壺形土器

第47号墓前庭部からは前述のようなプトレマイオス朝時代の土器が多数出土しているが、1点ほぼ完形の彩文土器が出土した(図11-3)。口縁部から肩部にかけて2つの把手を持つ高台付きの土器で、胴部が下にいくにつれてやや広がっている。外面には赤色スリップが下地として施されており、彩色は肩部から下に施されており、肩部の中央に2本の帯が濃い紫赤色のインクで描かれている。また、胴部と底部の軸が大きくずれている。類例はディール・アル=シャルウィートのイシス神殿の北側の神殿域から出土しており、ローマ支配期初期(1世紀～3世紀)に年代付けられている(早稲田大学エジプト学研究所編 2005: 265, pl. 5-6, fig. VI-2, 8)。ローマ支配期初期のクラウディアヌス遺跡からは、高台部分が欠損しているが、口縁部から胴部下部にかけて残存する類似した器形が報告されている(Wodzinska 2010: 87, no.17)。

⑩ローマン・ランプ(図11-4)

第47号墓前庭部南壁の開口部、KHT01号墓の入口前よりローマン・ランプが1点出土した。高さは約

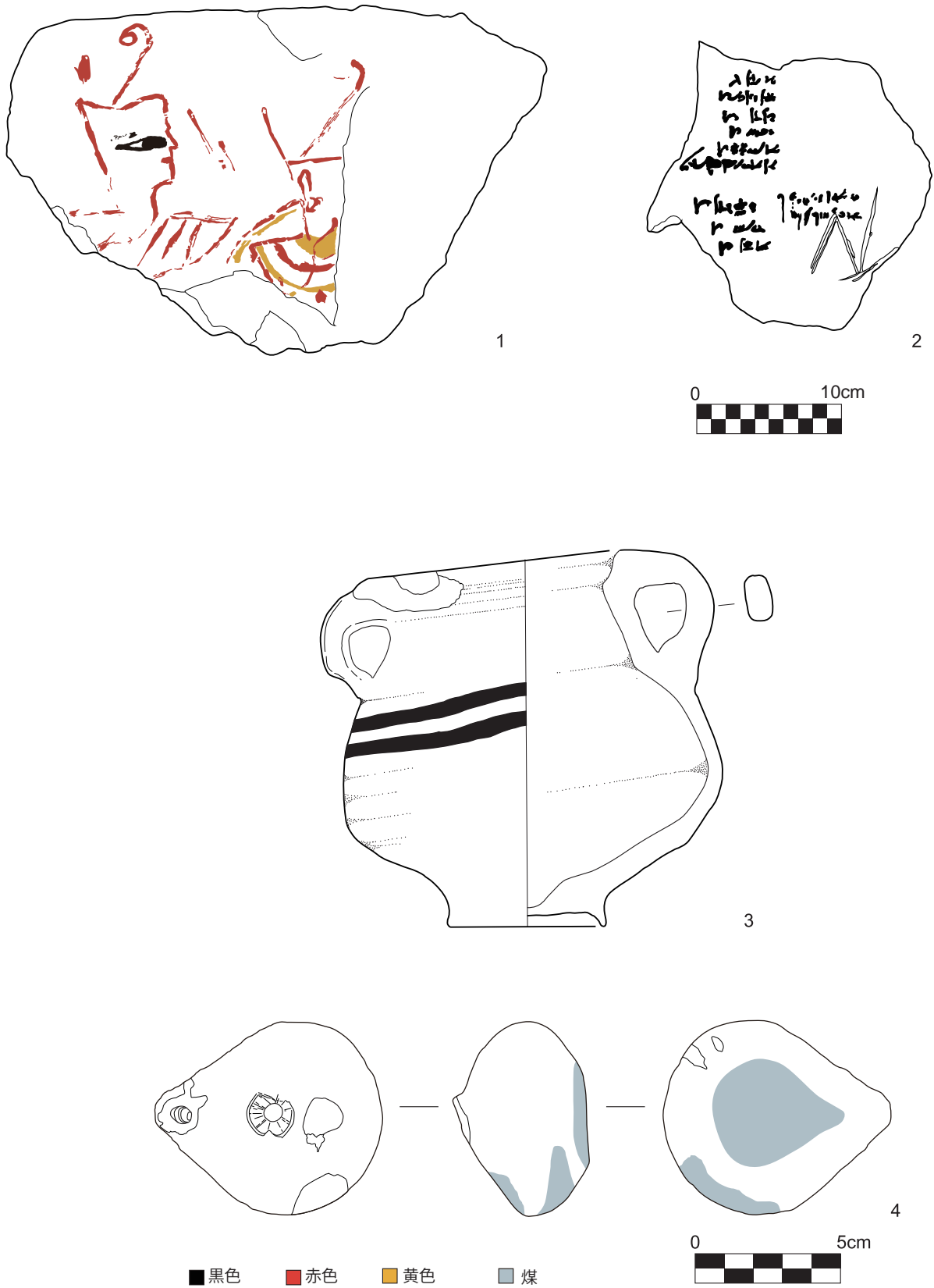


図11 第47号墓およびその周辺出土遺物 (5)
 Fig.11 Major finds from TT47 and its vicinity (5)



写真8 ナトロン袋
Photo.8 Natron Bag

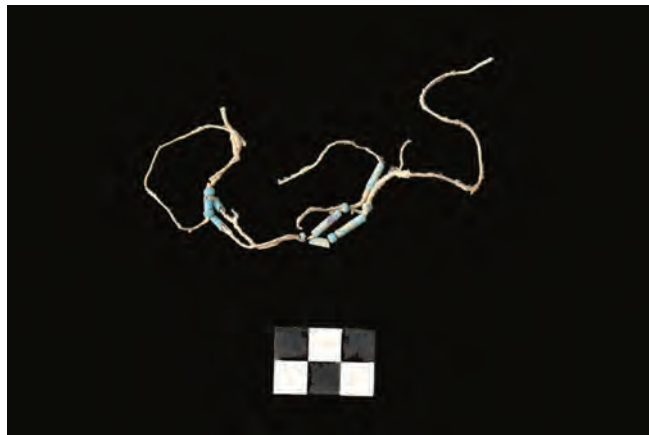


写真9 ビーズ
Photo.9 Beads

4cm、幅約8cmで、蛙型ランプと呼ばれる形態を呈している¹²⁾。表面が激しく磨耗しているため装飾は確認できない。白色スリップが施された表面には煤が付着した痕跡があるが、底部を取り囲むように煤痕があるため、使用時というよりも焼成時のものと思われる。年代は3世紀から4世紀である。

⑪ナトロン袋(写真8)

第47号墓前庭部よりナトロンの袋が2点出土した。両方とも高さ約10cm、幅8～10cmを測る。ナトロンは、亜麻布に巻かれ、口の部分が紐で結ばれている。1点は、保存状態が良好で表面に黒色の樹脂が付着している。

⑫木棺片(図12-1, 2)

彩色された木棺片2点が第47号墓前庭部の灰色砂層より出土した。1点は長さ約19.5cm、幅3cm、もう1点は長さ7cm、幅2cmである。黄色の背景に緑の銘文帯が垂直に描かれ、表面には崩字体のヒエログリフが記されている。

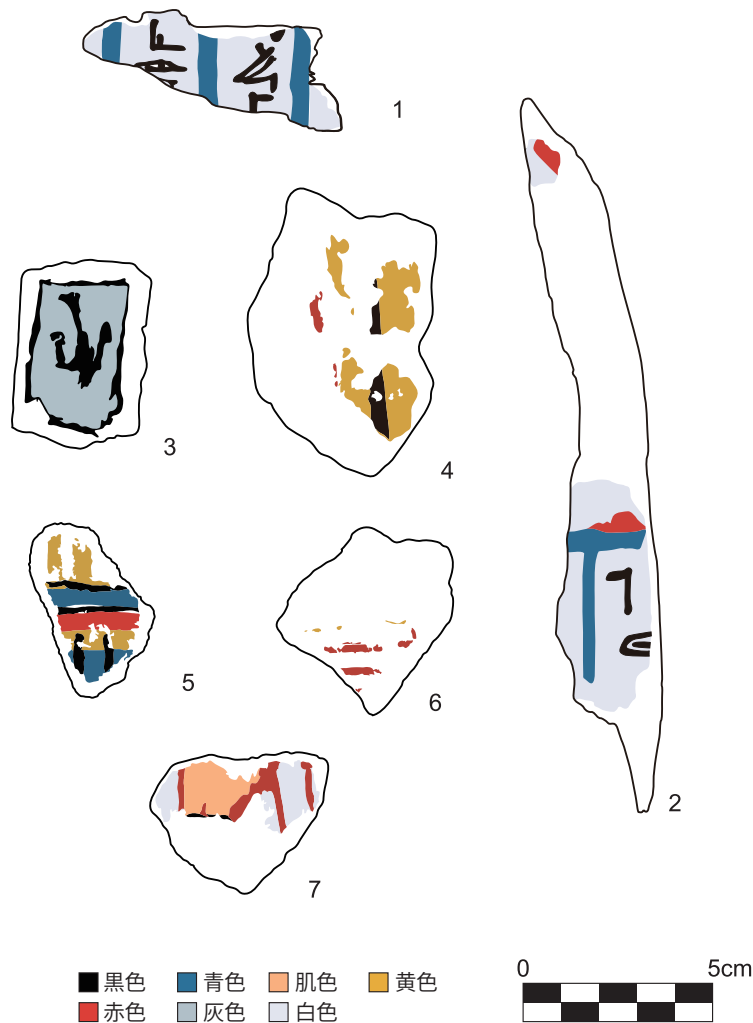


図12 第47号墓およびその周辺出土遺物 (6)

Fig.12 Major finds from TT47 and its vicinity (6)

⑬ 銘文入り装飾板 (図12-3)

第47号墓の灰色砂層より石灰岩製の銘文が記された装飾版が出土した。寸法は、長さ5cm、幅3.5cm、厚さ0.8cmである。灰色に塗られた背景に黒色の顔料で銘文が記されている。この遺物の機能は明らかではない。

⑭ ビーズ (写真9)

青色ファイアンス製のディスク状あるいはシリンダー状の形態のビーズ片が多数出土しており、中には紐が残存しているものもある。これらはおそらく包帯に巻かれたミイラに被せたビーズ・ネットの一部とみられる。

⑮ 彩画片 (図12-4~7)

第47号墓の様々な場所から周囲の岩窟墓の壁面を装飾していたと思われる彩画片が多数出土した。特徴的な4点の破片のうち、3点はラメセス朝に特徴的な黄色の背景を持つ破片で、1点は白色の背景に衣装の一部を表すと思われる、赤いストライプの装飾が施されたものである。

5. まとめ

2013年度の第7次調査では、第47号墓の前庭部の砂礫の除去作業から実施したが、その作業開始から間もなく前庭部南壁のほぼ中央部から開口部が検出され、その奥から KHT01 と KHT02 と名づけた2基の未登録の岩窟墓を新発見した。この発見は、ルクソール西岸クルナ査察局査察官立会いの下で12月29日の昼間におこなわれた。特にコンスウエムヘブ墓(KHT02)の発見は、極めて重要な発見として当初から認識され、セキュリティ上の理由から、上エジプト・ルクソール考古局長の判断で、我々には2日間しかコンスウエムヘブ墓内部の調査が許可されただけで、墓の測量調査などの許可が下りなかった。そのため、本概報の報告はこの2日間に撮影された写真資料を基にしている。コンスウエムヘブ墓の測量等は次期調査に持越しされた。考古省のムハンマド・イブラヒム大臣が、この発見を公式に発表したのが2015年1月4日のことであった。この発表を受け、コンスウエムヘブ墓の発見は世界中のマスコミで報道され、世界的に注目されることとなった。調査隊の帰国後の2014年1月20日に早稲田大学で記者会見を開催した。

コンスウエムヘブ墓などを発見したことで、第7次調査は、第47号墓前庭部の南側部分を中心に調査を実施した。保護用の鉄扉の設置を目指したが、開口部の周囲から階段付きのプラットフォームなどの日乾煉瓦の構造物が検出されたこともあり、第7次調査終了時には鉄扉の設置はおこなわず、開口部は切石・焼成煉瓦・日乾煉瓦などで塞ぎ、セメントで完全に封鎖した。次期の第8次調査では、鉄扉を設置する予定である。また、コンスウエムヘブ墓の調査も簡単な写真記録を中心に実施しただけであり、測量などの作業が、次期調査に残された。前庭部の砂礫除去作業中に、新王国時代からプトレマイオス朝時代、ローマ支配時代など多くの時期の遺物が出土しており、今後、第47号墓周辺の利用状況を考えていく上で貴重な資料である。

以上、第7次調査の成果の概要を述べた。次期調査以降も発掘調査、出土遺構・遺物、保存修復作業を継続し、第47号墓とその周辺の岩窟墓、そして、今回、新発見された KHT01 と KHT02 (コンスウエムヘブ墓) について更に明らかにしていきたい。

謝辞

エジプト現地調査では、エジプト・アラブ共和国考古省大臣ムハンマド・イブラヒム閣下、古代エジプト部部長ムハンマド・ベアリー、外国調査隊管轄事務局長ムハンマド・イスマイル博士、上エジプト総局長マンスール・ボライク氏、上エジプト・ルクソール考古局長ムハンマド・アセム・アブド・アル=サポール氏、カルナク神殿査察局長イブラヒム・ソリマン氏、ルクソール西岸クルナ査察局長ムハンマド・アブド・アル=アジーズ氏、副局長ヌール・アブドアル=ガファル・ムハンマド氏、ルクソール西岸中央部遺跡チーフ・インスペクターファタヒ・ヤセーン氏、チーフ・インスペクターエズ・アル=ディーン・カマル・ヌービー氏、そして調査隊査察官アマニ・ハッサン・ムハンマド氏をはじめとする方々に多大なご協力を頂いた(肩書きは調査当時のもの)。

また、図版の作成には文学部考古学コース4年山崎世理愛さんの協力を得た。ここに記して感謝する。

なお、本研究は早稲田大学特定課題研究(2013B-033)「古代エジプト、テーベ岩窟墓第47号(ウセルハト墓)の調査」(研究代表者:近藤二郎)、科学研究費基盤研究(B)(22404020)「古代エジプト、岩窟墓の掘削技術に関する調査研究」(研究代表者:柏木裕之)、早稲田大学特定課題研究(2013A-975)「古代エジプト新王国時代第18王朝史の再構築」(研究代表者:河合 望)などの助成によるものである。

註

- 1) マルカタ南遺跡のコム・アル=サマク(魚の丘)における調査に関しては主に以下を参照(古代エジプト調査委

- 員会編 1983)。
- 2) マルカタ王宮址の調査は主に以下を参照 (早稲田大学古代エジプト建築調査隊編 1993)。ルクソール西岸岩窟墓の一連の調査は主に以下を参照 (早稲田大学エジプト学研究所編 2002, 2003, 2007)。また王家の谷・アメンヘテプ3世王墓における調査は主に以下を参照 (Kondo 1992; 1995; Yoshimura and Kondo 1995; Yoshimura and Kondo (eds.) 2004; Yoshimura et al. 2005; 吉村 1993; 吉村、近藤 1994; 2000; 河合他 2001; 吉村他 2005)。
 - 3) 第47号墓の研究史、研究上の問題点、アメンヘテプ3世時代の大型岩窟墓の問題について詳しくは以下を参照 (近藤 1994)。その他、アメンヘテプ3世時代の大型岩窟墓については D. アイクナー (Eigner) の論考を参照 (Eigner 1983)。
 - 4) これまでの報告としては、ラインドによるウセルハトの葬送コーンの報告 (Rhind 1862: 137)、ハワード・カーターによる第47号墓の構造に関する記述やウセルハトの葬送コーン、王妃ティイのレリーフ写真などの報告 (Carter 1903: 177-178, pl.II)、A.E.P. ウェイゴール (Weigall) の記述 (Weigall 1908: 125) などが挙げられる。またベルギーのブリュッセル王立美術史博物館には第47号墓由来の王妃ティイのレリーフが収蔵されている (van de Walle et al. 1980: 18-20, figs.3, 4)。
 - 5) これまでの調査については以下を参照 (近藤他 2009; 2010; 2011; 2012; 2013; 2014)。
 - 6) KHT は Khoka Tomb の略で、便宜的にこの略称を使用した。
 - 7) 本調査は、2013年12月23日から2014年1月12日までに実施された。調査の参加者は以下の通りである。考古班: 吉村作治、近藤二郎、菊地敬夫、河合 望、福田莉紗、建築班: 柏木裕之、渉外: 吉村龍人、ムハンマド・アシュリー。
 - 8) 第38号墓については、Porter and Moss 1960, pp. 69-70; Kampp 1996, p. 228-229; Sakurai, Yoshimura, and Kondo 1988, pls. 4 and 30; Urk IV, 1637-1640 を参照。
 - 9) 類例として、チャヌニ墓のまぐさ石が挙げられる。Brack and Brack 1977, p. 53. Taf. 44a.
 - 10) プタハ・ソカル・オシリス像については、Aston 2009 を参照。
 - 11) 第398号墓については、Porter and Moss 1960: 443, Map IV, V; Kampp 1996: 608.
 - 12) 特徴的な類例は、大英博物館 Q2163 EA – Q2177 EA がある。Bailey 1988:262, pl. 49. を参照。

参考文献

- Andreu, G.
2002 *Les Artistes de Pharaon: Deir el-Médineh et la Vallée des Rois*. Paris, Réunion des Musées Nationaux.
- Aston, D.
2009 *Burial Assemblages of Dynasty 21–25: Chronology-Typology-Developments*, Vienna.
- Bács, T.A., Fábrián, Z. I., Schreiber, G., and Török, L. (eds.)
2009 *Hugarian Excavations in the Theban Necropolis. A Celebration of 102 Years of Fieldwork in Egypt*, Budapest.
- Bailey, D. M.
1988 *A Catalogue of the Lamps in the British Museum, III. Roman Provincial Lamps*, London.
- Brack, A and Brack, A.
1977 *Das Grab des Tjanuni: Theben Nr. 74. AV 19*. Mainz.
- Carter, H.
1903 “Report of work done in upper Egypt (1902-1903)”, *Annales du Service des Antiquités de l’Égypte*, pp.171-180.
- Collins, L.
1976 “The Private Tombs of Thebes: Excavation by Sir Robert Mond 1905 and 1906”, *The Journal of Egyptian Archaeology* 62, pp.18-40.
- Davies, N. de G. and Macadam, M.F.L.
1957 *A Corpus of Inscribed Egyptian Funerary Cones*, Oxford.
- Dibley, G. and Lipkin, B.
2009 *A Compendium of Egyptian Funerary Cones*, London.
- Eigner, D.
1983 “Das Thebanische Grab des Amenhotep, Wesir von Unterägypten: Die Arkitektur”, *Mitteilungen der Deutschen Archäologischen Instituts Abteilung Kairo* 39, pp39-50.
- Helck, W.
1958 *Urkunden der 18. Dynastie*, Heft 21, Berlin.
- Kampp, F.

- 1996 *Die thebanische Nekropole*, Mainz
- Kondo, J.
- 1992 “A Preliminary Report on the Re-clearance of the Tomb of Amenophis III”, in Reeves, C.N. (ed.), *After Tutankhamun: Research and Excavation in the Royal Necropolis at Thebes*, London and New York, pp.41-54.
- 1995 “The Re-clearance of Tombs WV 22 and WV A in the Western Valley of the Kings”, in Wilkinson, R.H. (ed.), *Valley of the Sun Kings: New Explorations in the tombs of Pharaohs*, Tucson, pp.25-33.
- Rhind, A.H.
- 1862 *Thebes: Its Tombs and Their Tenants, Ancient and Present: A Record of Excavations in the Necropolis*, London.
- Sakurai, K., Yoshimura, S., and Kondo, J.
- 1988 *Comparative Studies of Noble Tombs in Theban Necropolis*, Waseda University, Tokyo, Japan.
- Schreiber, G.
- 2011 “Early and Middle Ptolemaic Funerary Art at Thebes (ca. 306-88 BC),” in Z. Hawass, T.A. Bács, G. Schreiber (eds.), *Proceedings of the colloquium on Theban Archaeology at the Supreme Council of Antiquities*, Cairo.
- Strudwick, N.
- 2003 *The Tombs of Amenemopet called Tjanefer at Thebes (TT 297)*, AÄ 19, Berlin.
- van de Walle, B., Limme, L. and De Meulenaere, H.
- 1980 *La collection égyptienne, Les étapes marquantes de son développement*, Bruxelles.
- Weigall, A.E.P.
- 1908 “Report on the Tombs of Shékh abd' el Gürneh and el Assasif”, *Annales du Service des Antiquités de l'Égypte* 9, pp.118-136.
- Wodzinska, A.
- 2010 *A Manual of Egyptian Pottery Volume 4: Ptolemaic Period-Modern*, Boston
- Yoshimura, S., Capriotti, G., Kawai, N. and Nishisaka, A.
- 2005 “A Preliminary Report on the Conservation Project of the Wall Paintings in the Royal Tomb of Amenophis III (KV 22) in the Western Valley of the Kings: 2001-2004 Seasons”, *MEMNONIA XV*, pp.203-212.
- Yoshimura, S. and Kondo, J.
- 1995 “Excavation at the tomb of Amenophis III”, *Egyptian Archaeology* 7, pp.17-18.
- Yoshimura, S. and Kondo, J. (eds.)
- 2004 *Conservation of the Wall Paintings in the Royal Tomb of Amenophis III -First and Second Phases Report-*, Tokyo.
- 河合 望、吉村作治、近藤二郎、ジョルジョ・カプリオッティ
- 2001 「アメンヘテプ III 世王墓保存修復プロジェクト予備調査概報」、『エジプト学研究』第9号、早稲田大学エジプト学会、pp.39-45.
- 古代エジプト調査委員会編
- 1983 『マルカタ南〔I〕 一魚の丘<考古編・建築編>』、早稲田大学出版部。
- 近藤二郎
- 1994 「テーベ私人墓第47号」、『エジプト学研究』第2号、早稲田大学エジプト学会、pp.50-60.
- 近藤二郎、吉村作治、菊地敬夫、柏木裕之、河合 望、西坂朗子、高橋寿光
- 2009 「第1次ルクソール西岸アル=コーカ地区調査概報」『エジプト学研究』第15号、早稲田大学エジプト学会、pp.39-70.
- 2010 「第2次ルクソール西岸アル=コーカ地区調査概報」『エジプト学研究』第16号、早稲田大学エジプト学会、pp.47-77.
- 2011 「第3次ルクソール西岸アル=コーカ地区調査概報」『エジプト学研究』第17号、早稲田大学エジプト学会、pp.45-63.
- 2012 「第4次ルクソール西岸アル=コーカ地区調査概報」『エジプト学研究』第18号、早稲田大学エジプト学会、pp.5-20.
- 2013 「第5次ルクソール西岸アル=コーカ地区調査概報」『エジプト学研究』第19号、早稲田大学エジプト学会、pp.107-120.
- 近藤二郎、吉村作治、柏木裕之、河合望、高橋寿光
- 2014 「第6次ルクソール西岸アル=コーカ地区調査概報」『エジプト学研究』第20号、早稲田大学エジプト学会、pp.43-58.
- 吉村作治、近藤二郎
- 1994 「アメンヘテプ3世王墓の調査について エジプト・ルクソール西岸、王家の谷西谷調査報告」、『人間科学研究』第7巻第1号、pp.187-199.

- 2000 「王家の谷・西谷調査報告－1992年8月～2000年1月－」、『エジプト学研究』第8号、pp.57-64.
吉村作治、近藤二郎、河合 望、西坂朗子、瀬戸邦弘、高橋寿光、中右恵理子
- 2005 「アメンヘテプ3世王墓保存修復作業概報：2001年3月～2004年3月」、『エジプト学研究』第13号、pp.5-21.
早稲田大学エジプト学研究所編
- 2002 『ルクソール西岸岩窟墓〔I〕－第241号墓と周辺遺構－』、早稲田大学エジプト学研究所.
- 2005 『マルカタ南〔V〕－イシス神殿北建物址－』、株式会社アケト.
- 2003 『ルクソール西岸岩窟墓〔II〕－第318号墓と隣接する墓－』、株式会社アケト.
- 2007 『ルクソール西岸岩窟墓〔III〕－第333号墓、A.21号墓、A.24号墓、W-4 (Nr.-127-)号墓－』、株式会社アケト.

年輪年代学とエジプト学

ピアース ポール クリースマン*・ジェフリー S デイーン*

Dendrochronology and Egyptology

Pearce Paul CREASMAN* and Jeffrey S. DEAN*

Abstract

Basic tree-ring analyses have been applied to wooden archaeological remains around the world for nearly a century and with great success, but only rarely and incompletely to Egyptian material. When tree-ring studies are applied to archaeology (known as “dendroarchaeology”), they are most often employed to address chronological questions, for which there is a great need in Egyptology. Dendroarchaeology is also used as a powerful tool to understand past climatic conditions (e.g., drought, flood levels, temperature reconstructions) and human/environment interactions. This manuscript introduces the fundamental concepts of dendrochronology for the non-specialist, in light of and stating its clear benefits for Egyptology.

1. はじめに

年輪年代学者は、樹木の年輪を自然界の時辰儀として環境変化の記録として捉えている。年輪は産業革命以前の文化や環境に関して他の方法からは得がたい視点を提供してくれるのである。その方法論はしばしばジグソーパズルと比較される。さまざまな証拠を元に集められた断片を骨惜みせず何年もかけて組み合わせ、最終的には完全な（またはそれに近い）年代記を年単位または季節単位の精度で築き上げるからである。必然的に数十年、数百年の誤差を持つ放射性炭素年代測定法とは異なり、地質学・考古学的な年代測定における年輪年代学は、暦年までを正確に測定できる唯一の方法である (Bannister 1963)。それゆえ年輪年代学では、「1年の誤差でさえ（中略）大きな間違い」と言われる (Kuniholm 2002: 64)。

もし年輪年代学がもたらし得る年単位の解析度が古代エジプト史にも確立できるとなれば、その影響は、ヨーロッパ人が到来する以前のアメリカ南西部（この地域ではそれまでは記録文書が存在しなかった）の歴史の理解を根本的に変えたそれに匹敵するであろう (Douglass 1929; Haury 1962)。さらにエジプトの年代と歴史区分に依存するところが多く、相互に関連し合う近東や地中海世界の考古学にも広範囲にわたる影響を及ぼすであろう。この認識は新たなものではない (E.g., Haury 1935; Bannister 1970; Creasman et al. 2012)。少なくともここ 100 年はこのような精度とその可能な解決策がエジプトとその近隣諸国の歴史に求められるようになっており、年輪年代学こそがその解決法である。

* アリゾナ大学年輪研究所

* University of Arizona, Laboratory of Tree-Ring Research

確かに古代（テオプラストス）でも年輪が時間の審判として認識されていたが、具体的な観察（例えば1709年にヨーロッパを襲った大寒波が樹木の成長に及ぼした影響）が行われたのは西暦18世紀、19世紀に入ってからである（E.g., Studhalter 1955; Dean 1997: 32-33）。年輪の科学、つまり年輪年代学が発達したのは20世紀初頭のことで、米国アリゾナ州の天文学者アンドリュー・エリコット・ダグラス（Andrew Ellicott Douglass）が年輪と周期的な太陽の黒点活動に影響を受ける気象条件の相関を試みたことに始まった。その目標は失敗に終わったものの、彼の年輪の検査は各樹木に見られる幅の異なる年輪の発生がその地方の成長パターンを反映しているという認識に導いた（Douglass 1914; Dean 1997: 33）。この発見が年輪年代学の基本的法則と方法の基盤となり、ブライアント・バニスター（Bryant Bannister）が「年輪を時間の測定に用いる方法（中略）そして（中略）過去の環境条件を推測する作業」と定義する科学が生まれた（Bannister 1963: 161）。年輪がエジプト学者を含める考古学者にとって有用であることは、この分野が創立された当初から明らかであった（Creasman in press a; Creasman in press b）。

2. 年輪年代学の基本的な法則と方法

全種とはいえないが、多くの種の樹木の毎年の成長パターンが年輪年代学に活用できる。成長期の初め、マツ属やコナラ属の木々をはじめとする種の樹木は細胞壁が疎な大きな細胞を形成し、断面の色が薄い木材ができる。この部分は早材と呼ばれる。成長期が進むと、形成される細胞はより小さく圧縮され、細胞壁が密になった結果、晩材と呼ばれる目に見えて色の濃い帯ができる。晩材のくっきりとした外縁は、その成長期の終わりを示す（Bannister 1963: 161-163; Dean 1997: 34）。こうした毎年の濃淡帯の形成の結果が、例えば切り株や枝の切り口面に肉眼でも見える、おなじみの年輪なのである（図1）。

さまざまな環境条件や人的条件が年輪の幅に影響する。例えば干ばつや冷温はある程度成長を妨げ、より細い年輪をもたらす（Bannister 1963: 163）。年輪年代測定法は輪を数えて行われるのではなく、十分な数の標本のさまざまな年輪幅のパターンを比較して行われるのであり、さらに各標本が比較するのに十分な数の年輪を有している必要がある。（この場合「十分な」という言葉は相対的であり、個々の事例の総合的な状

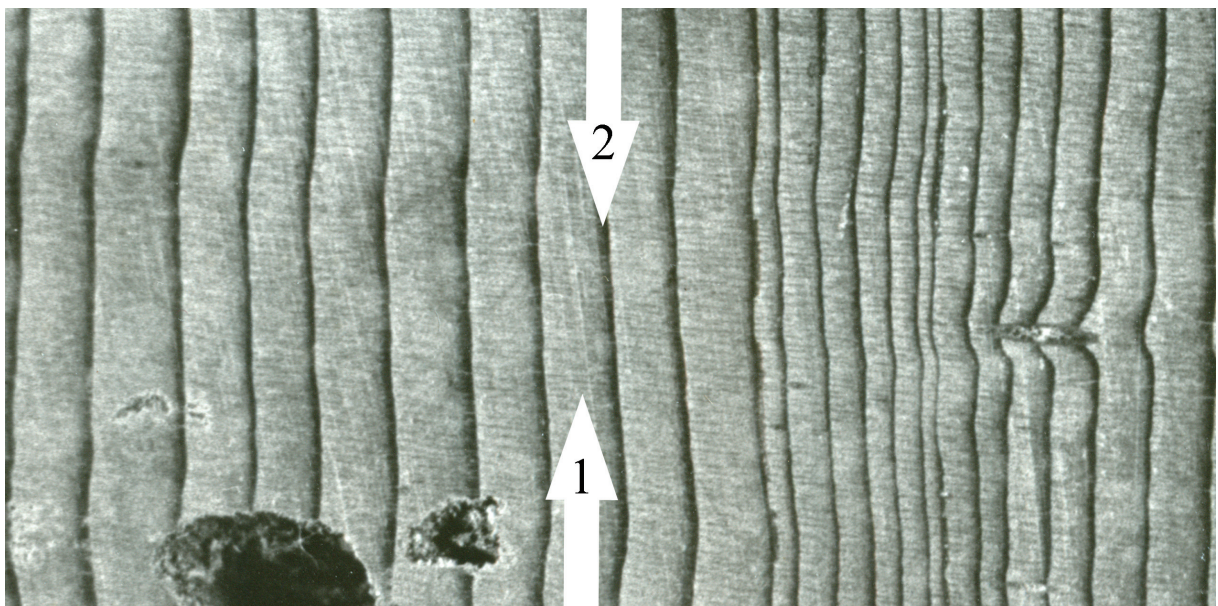


図1 針葉樹の早材と晩材
Fig.1 Earlywood and latewood in a conifer

況によって異なる。) 具体的には、局所的な成長環境ではなく気候変動 (通常低地では降雨量、高地では気温) を反映することが分かっている細い年輪が使用される (Dean 1997: 37)。

年代測定に使える年輪を形成すると知られる種なら実際どの木でも年輪年代学に適した年輪を形成するとは限らない。その木が、環境条件に敏感になり十分に可変的年輪を作り得る条件の下で育たなければならないからである。例えば、近くの泉によって常に水が豊富な地に生えた木には「現状に満足した」成長パターン、つまり適合または比較するには均一過ぎる成長パターンが見られる。それに対し、同じ岩場の斜面に生えた同種の木でも地下水面に根が届かない木であれば、適当な変動性を持ち有益な「高感度の」年輪が形成される可能性が高くなる (Ferguson 1970: 184-185)。

重複する時期に同じくらい高感度な土地に育った木々は、比較し得るパターンを作り出す (Dean 1997: 34-35)。そのことによって別々の木からの標本が有意義な比較を可能とするのである。さらに、別の時代の標本のパターンが重複する場合、交差年代決定法により長期間の年代記を復元することができる (Douglass 1941)。

生木など、既知の年代記が現代まで続く標本の場合は、年単位の精度で絶対年代を確立することができる。すなわち、長期の年代記の復元は生木 (つまり最後の成長輪が観察でき、それと暦年との関係が疑いもない木) に始まる。一般的に標本は樹木を害さない成長錐 (要は細い管状ドリル) によって採取される。得られた年代記は、生木の外縁 (樹皮部) の年輪によってそれが採集された年に固定されるのである (図2)。

測定されグラフ化された年輪の幅は、他に採取された標本と比較することによってその幅が標準化される (Baillie 1995: 16-17; Dean 1997: 40)。この作業によって、樹齢に関連した成長要素や特に局所的な土地条件など気候条件以外の結果による変数を考慮に入れることができる。年輪年代学者はそれぞれのサンプルにお

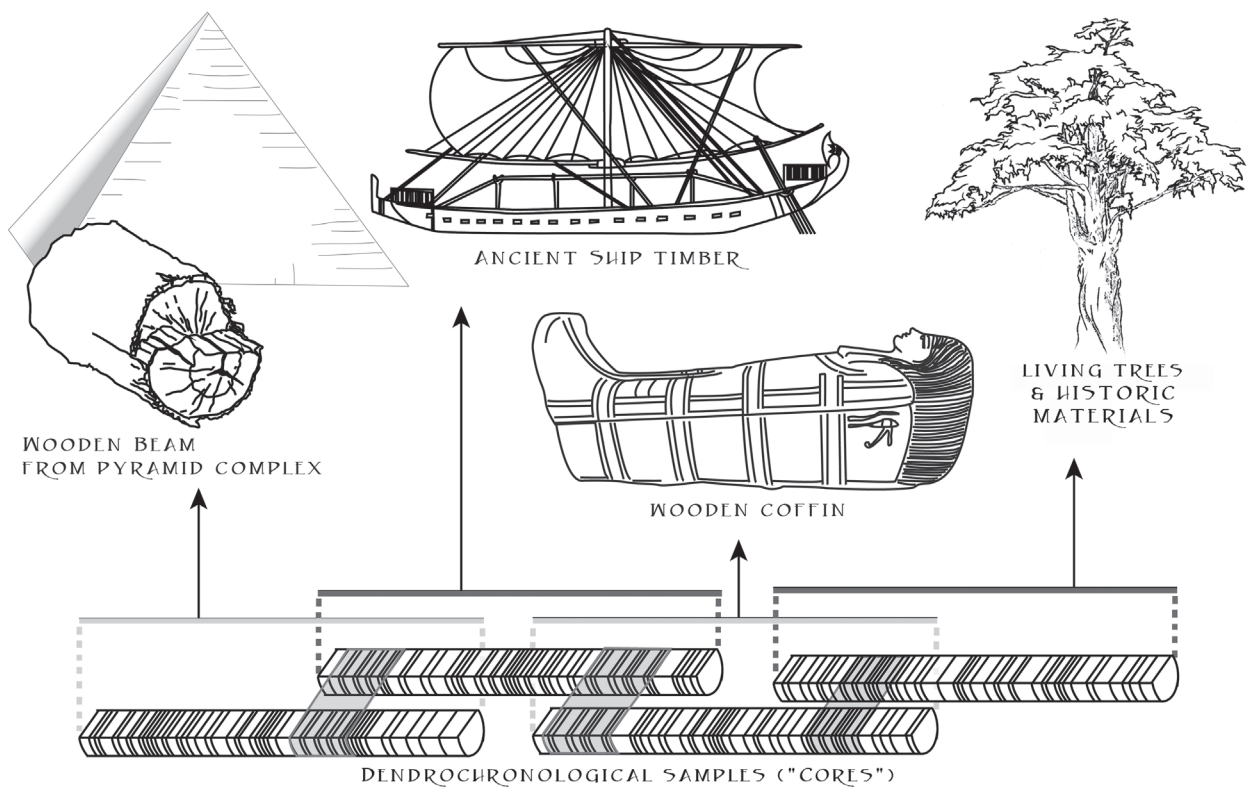


図2 古代エジプトの年輪による代表的な編年 (ノンスケール)
 Fig.2 Representative chronology building via tree rings for ancient Egypt; not to scale
 (R. Caroli / P.P. Creasman: © University of Arizona Egyptian Expedition)

いて虚偽（二重）の年輪や「失われた年輪」の可能性にも注意し、必要となれば改正しなければならない。生育条件が良すぎる場所でも、統計的な技法によって交差年代決定が達成できる (Dean 1997: 42)。

最外年輪の年が不明な資料源（例えば枯れ木や歴史的建造物）でも、標本は採取し、測定し、グラフ化することができる。そして、年輪パターンがグラフ化できさえすれば、年代が判明しているものと比較できるのである。適合を特定することによって、新しいサンプルを配置することができ、その配列つまり年代記をより古い時代へ延長することができる。この作業を繰り返すことによって、1 万年以上の継続的な配列が実現されたこともある (E.g., Becker 1993; Friedrich et al. 2004)。

初期段階の生きた標本が存在しない場合でも、サンプルの交差年代決定は可能である。この場合結果として生じる年代記は「浮いている」と言われ、つまり既知の暦年に固定されていない。例えば、アメリカ南西部の諸遺跡で集められた考古学的標本から確立された 585 年間にわたる年輪年代記は、1929 年まで「浮いた」ままであった。しかしその年、ダグラスは既知の有史時代の配列と浮いた先史時代の配列の両方をまたぐ一片の木炭をアリゾナ州ショーローで発見したのである。この年輪版「ロゼッタストーン」のおかげで、突如として南西部中の先史遺跡の正確な暦年を確定できるようになったのである (Douglass 1929)。

3. エジプトにおける年輪年代学

年輪年代学は世界各地のあらゆる環境で適用され素晴らしい実績を挙げてきたし、今となっては年代測定への使用はごく普通になっている (Baillie 1995; Dean 1997: 46)。この科学の根源がアメリカ南西部にあるのは、スペイン人による征服や歴史的記録が始まる以前にこの地域に存在していた文化の考古学的遺物が、その砂漠気候のおかげで良い状態で保存されてきたからだろう (Douglass 1929)。

皮肉なことに、古代エジプトの遺跡や歴史上の出来事の年代測定は、膨大な歴史的文献があるにもかかわらず、そのような具体性を欠いている。数え切れない出版物に王朝、治世、各出来事の年代が精密な暦年で示されているが、その不確実性を認めてか「約」が書き加えられている。マネットによる基本的な王朝の枠組みを重ねて、古代の王名表、天文現象（例：ソティス周期）、異文化との対象年表、放射性炭素年代測定法など、年単位の精度を求めることのできないあらゆる方法による計算から、このような絶対年代と称する年代が引き出されている (E.g., Spence 2000; Hornung et al. 2006; Wiener 2006; Bronk Ramsey et al. 2010; Dee et al. 2010; Shortland and Bronk Ramsey 2013)。不確実にせよ概して機能的なこの枠組みは十分に役立つため、早期からエジプトの年輪年代学を求める声は (Douglass 1932; Breasted 1933; Haury 1935)、近年の学者からの同調にもかかわらずなおざりにされてきた (Bannister 1970; Dean 1978; Bannister 1985; Kuniholm 1992; Renfrew 1996; Kuniholm 2001; Kuniholm 2002; Cichocki 2000; Shaw 2000a; Moeller 2005; Cichocki 2006; Kitchen 2006; Wiener 2006; Creasman in press a; Creasman in press b)。

エジプトでエジプトのための年輪年代学の進歩が遅れた要因は他にもいくつかある。その中でも最も重要で基礎的な要因は、エジプトで考古学的に見つかる木材にある。保存条件が良好なおかげで木材は豊富にある。すでに 1930 年代には、ダグラスと彼が連絡を取っていたエジプト学者たちは、古代エジプトについて有意義な進展を遂げるのに十分な木材がエジプトや他国の博物館のコレクションにすでに存在すると確信していた。これらの木材の多くは梁や厚板などで、地中海東部など周辺地域の史跡で回収されるような主に小さいまたは部分的に焼けた標本に比べると問題点が少ない (Griggs and Manning 2009: 711)。

エジプトでは、在来種と輸入品の木材の両方が出土する。輸入された材木で圧倒的に多いのは有名なレバノン産のスギ（ヒマラヤスギ属レバノンスギ種）と同地域からの針葉樹（ビャクシン属各種、マツ属各種）である。これらの木材は、建築や造船、そして棺や彫像、その他の小物の製造に使われた (Gale et al. 2000:

348-352)。特に船舶は一度に大量の木材を提供してくれる。例えば、第4王朝に造られ埋納されたクフ王第1の船はおよそ38トンの重さである(Mark 2009: 133)。中には困難な(例: 年輪の失われた(Manning et al. 2014: 402)) ものもあるが、針葉樹は年輪年代学に有用なことが知られており(Liphschitz 2007; Bardinnet 2008; Touchan and Hughes 2009; Touchan et al. 2011; Griggs et al. 2013)、古代エジプトの標本も交差年代決定がなされている(E.g., Kuniholm 1992; Kuniholm 2001; Manning et al. 2014)。

エジプト在来種の実用性については未だに分かっていない。1970年代にはバニスター、その後も他の学者がエジプトでは最もよく見られる2種の(Gale et al. 2000: 335-336, 340-341)イチジク属エジプトイチジク種やアカシア属アラビアゴムモドキ種の活用を試みたが、いずれも成功を収められなかった(Bryant Bannister, personal communication, 10 October 2011)。そのため後の研究者たちはこれらの木は年輪年代測定には使用不可能だと見なすようになった。しかし近隣地域では、アカシア属やその他にもエジプトではありふれたギョリヨウ属の樹木が年輪年代学での活用を実証されている(Gourlay 1995a; Gourlay 1995b; Eshete and Ståhl 1999; Gebrekirstos et al. 2008; Touchan and Hughes 2009; Nicolini et al. 2010; Wils et al. 2010; Wils et al. 2011)。エジプト出土のこれらの樹木の標本も再検討する必要があるであろう。

これらの資源は、世界の他地域のようにエジプトでも抜本的な探求領域(環境、年代記、人間行動)に光を当てる可能性を秘めている。もし木が成長中に伐採されたり、または何らかの理由で死んだ場合、あわよくば約2ヶ月以下の正確度で年代を測定することができる。それは古代エジプトにおいて認識されていた3つの季節(*3ht*, *Prt*, *Smw*)と相関させるのに十分であり、現在可能な限りの精度を提供することができるのである。

4. 古代環境の復元

気候変化の現代社会への影響(農業から政治、国家安全保障に及ぶ全て)は、ニュースを見ればごく明らかであるが、変動する環境が古代社会に与えた影響もやはり同様であった。古代エジプトの活動的な環境を理解することは、その中に暮らす人々の文化と歴史を理解することにも繋がる。特に干ばつやそれと同じぐらい危険なナイル川の氾濫は多大なる影響を与えたことであろう。前者にいたっては、古王国時代が減びた要因のひとつによく挙げられる(E.g., Bell 1970; Bell 1975; Bell 1979; Hassan 2007)。

前述したように、年輪の幅の大小は環境条件についての情報を提供してくれる。さらに年輪内の細胞密度(Dean 1997: 44; Wimmer and Grabner 2000)や安定同位体(E.g., McCarroll and Loader 2004)の分析と比較からも同じような情報が得られる。これらの分析は、気温、気圧、夏季の放射照度(日射量)、降水量などの気候変数に関する結論に達し(E.g., Dean 1997: 43-44; McCarroll and Loader 2004)、さらに材木の供給源を特定することもできる(Bridge 2012; Rich et al. 2012; Manning et al. 2014)。

年輪年代学では、エルニーニョ南方振動天候パターン(E.g., Gebrekirstos et al. 2008; Borgaonkar et al. 2010)や地球の温暖化(Hughes 2002)などの大規模な気候傾向、または例外的な環境上の出来事の痕跡を年輪に見出すことができる。後者の例としては、紀元1700年にアメリカ北西部で起きたカスケード地震(Jacoby et al. 1997)、紀元536年に世界中が火山灰で覆われた異常気象(Baillie 1994)、スペインのセゴビアで起きた歴史的洪水(Génova et al. 2011)が挙げられる。

エジプト人は先史時代からアカシアをはじめとする在来種の木材を大いに活用したことから(E.g., Gale et al. 2000; Adams 2001)、長期の年輪配列を作成することが可能である。北アフリカ他地域の乾燥した環境で育ったアカシア属の年輪は、気候指標とりわけ降水量を示す(E.g. Nicolini et al. 2010)。すなわち、エジプトで育った種の樹木を検査することによって、気温の変動や干ばつ、氾濫の頻度と強度の変化、沖積土の

沈殿と浸食などの諸問題に加え (E.g., Woodhouse and Overpeck 1998; Gray et al. 2011; Cook et al. 2013)、収穫量など樹木や森林とは直接関係のない質問に関するデータさえも得られる可能性があるのである (E.g., Therrell et al. 2006)。

針葉樹の材木やその他のエジプトに輸入された木材は、当然その土地 (つまり外国) の成長条件を反映し、ナイル川の流れなどに関係する条件は反映しない。しかし、地域全体の干ばつなど、エジプトも影響するような広範囲に及ぶ気候条件が表れることはある。ダハシュールのセンウセレト3世のピラミッド複合体で発掘された造船材のサンプルから採取された¹⁴Cの量からは、暫定的に古王国時代後期に相当する時代の干ばつを示す特徴が確認されている (Manning et al. 2014)。年輪年代学的な年輪検査によってこの合致を確かめ、いずれはその事象の正確な年代を提供できるようになることを願ってやまない。

5. 固定年代記の構築

エジプト学者にとって、年輪年代学の最大の魅力は古代エジプトの出来事を絶対年代によって編年する可能性であろう。年輪年代学は、とりわけ考古地磁気や放射性炭素 (¹⁴C) など他の方法で得られた絶対年代の較正にも使われる (E.g., Becker 1993; Freidrich et al. 2004; Manning et al. 2014)。放射性炭素年代測定法が出す絶対年代は、特定の暦年ではなく年代範囲とその確立をもって表される (E.g., Manning et al. 2013)。年輪年代学の結果は、放射性炭素年代をさらに絞り込み助長することができるのである。エジプトで発見されたがおそらくレバノン産の *C. libani* を使って最近得られた「高精度」炭素年代の例としては、メンフィス出土で第1中間期のイピハイシュテフという人物の木棺 (米国イリノイ州シカゴ所蔵) が存在する (Manning et al. 2014)。木棺は「紀元前 2076-2068 年 (確率 68.2%)、そして紀元前 2081-2064 年 (確率 95.4%)」、船は「95.4% の範囲に限ると紀元前約 1898-1876 年」という結果が出た (Manning et al. 2014: 405-406)。これらの数十年以内の「高精度」な¹⁴C年代範囲は、エジプトや近隣諸地域の高・中・低年代説の議論など、大まかな復元には有用である¹⁾。しかし、多くのエジプトの王の治世は10年以下であるため、このような年代範囲を特定の治世に確定することはほとんど不可能なのである。年輪と¹⁴Cの複合年代測定でさえも、エジプトにおける真の絶対年代を構築するのに必要な暦年精度を提供することはできない。

古代エジプトにおける絶対年代は、プサメティコス (プサムテク) 1世による第26王朝の始まり、すなわち紀元前664年より遡ることはできないというのが定説となっている (Schneider 2010; Creasman in press a; Creasman in press b)²⁾。これではそれ以前の25王朝や先王朝時代を含む3000年以上の年月が未解決ということになる。文献に登場する絶対年代は、多くの権威ある出版物の中から選ばれ引用されたものだが (E.g., Shaw 2000b; Redford 2001)、それらはさまざまな不明確な方法によって慎重に算出されたもので、数十年の差があることがある (Creasman in press a; Creasman in press b)。固定された時点ではなく、それぞれの治世の始まりから年代を数える古代エジプトの慣行も曖昧さの原因となっている。治世の最後の年は判明していないことが多い。観念的な理由によりある治世がそっくりリストから削除されたり、その分の年数が他の王に割り当てられたりすることもあった。共同統治も可変性を導入するなど、他にも原因はある (Creasman in press a; Creasman in press b)。天文現象、天災、異文化との相関による同期化を行っても、これらの年代記は不完全な歴史的記録物に頼るほかないのである。

数百年にわたる暫定的な年代記が、交差年代決定法によってすでに作成されている。イピハイシュテフの木棺のスギ材からは (とりあえず) 151年間の配列、シカゴにあるダハシュール出土の船のスギ材からは335年間の配列が交差年代決定されている (Manning et al. 2014: 402-403)。どちらも考古学的状況の年代から歴史的年代記における大まかな配置は分かっているし、前述した通り年輪と¹⁴Cの複合年代測定によって

年代範囲が提供されているが、どちらの年代も浮いたままである。言い換えれば、年代測定に使われたのが考古学的状況からの木材に限られていたため、暦年を確定することができないのである。これらの年代を固定された年代記と交差決定することによって初めて正確な年代を断定することができる。古代エジプトで出土するスギやその他の木材においては、そのような固定された年代記はまだ存在しないが、それを作成することは可能である。

現存する近東の年代記は、最も長いものでも約 1000 年間（紀元 1097-2000 年）である (Touchan et al. 2007)。それでも、エジプトの先王朝時代（紀元前 3000 年以前）に相当する時代まで遡る絶対年輪年代記の実現は可能であり、世界各地ですでに存在している。例えば、チリ南部では固定年代の連続配列が紀元前 3656 年まで存在する [Fitzroya cupressoides (アレシマまたはパタゴニアヒバ)] (Lara and Villalba 1993)。現在このように固定され連続的な配列の中で最も古いものは中央ヨーロッパのナラとマツの合成年代記であり、紀元前 10461 年まで続いている (Friedrich et al. 2004)。

6. エジプト年代記における年輪年代法の応用

絶対年代に関して忘れてならないのは、年輪年代学はその木を切り倒したまたは切り出した年、つまり使用の *terminus post quem*（遡及可能な年代上限）を断定することである。その時代や文化における木材使用行動の知識を基に、建築物、船舶、その他の木製品の年代のクラスターを組み合わせることによって、使用事象の暦年（または木材標本に樹皮が残っていない場合は暦年の推定 (Nash 1993)）が出される。木材自体の年代が提供する情報を拡大適用するには、情報に基づいた論理的な推論が必要なのである。

多くの行動的要素が、伐木の年代と採取された考古学的状況での堆積との関係に影響する。まず輸送（例：レヴァントからエジプトへ）が使用を遅らせるであろう。年輪年代学を用いれば後の時代のように (E.g., Bernabei et al. 2010; Klein et al. 2014)、古代の季節ごとの慣行も探ることができるかもしれない。古代エジプト人は木材を将来使うために備蓄したし、古い木材を新たな状況で再利用することも一般的であった (Creasman 2013: 158; Creasman 2014)。修復によって新しい木材が導入されることもあった (Creasman 2014)。このような行動から（以下により詳しく論じるように）、考慮する物体が船や棺など複数の材木から成る場合いくつかの伐木年が生じることがある。このようなすべての可能性を考慮に入れなければならない。

建築物、船舶、または棺より小さな遺物でも年輪年代学に有用なことがある。世界の他地域では、雪かきシャベル (Hoshino et al. 2008)、家具 (Klein et al. 2014)、彫像 (Haneca et al. 2005) などの木製品が年輪年代をもたらした。これを念頭に、エジプトでもあらゆる形での木材を調査するべきである。

年輪年代をある王の治世に特定するには、標本とそのさまざまな背景を解釈しなければならない。前述したように、年輪年代測定法は個々の年代ではなく年代のクラスターに依存する。クラスターをどう定義するかは研究者によって異なるが、「短期間に収まる三つ以上の年代」は典型的な一例かもしれない (Ahlstrom 1985: 59; cf. Towner 1997: 63; Towner 2002: 75; Nash 2002: 250)。年代クラスターから遺跡の建設史などに関する論理的な推論を引き出すこともできる。ニューメキシコ州（米国）のパルチェ・キャニオンにあるトワイン・ハウスと呼ばれる遺跡がその良い例である (Ababneh et al. 2000)。巨石の上に建てられたこのナバホ族の防御的 stone 建築物は三つの部屋から成り、建築要素がいくつか原位置の（その場の）状態で含まれていた。年輪年代分析のために原位置出土の材木だけがサンプル採取され、まぐさは紀元 1720 年代、屋根の梁は紀元 1730 年代から 1740 年代という年代が出た。研究者たちはこれらのクラスターとその中の具体的な年代を説明すべく 3 つの可能な遺跡構築史を提案した：①「この建築物は 1728 年に建てられ、1740 年代に屋根全体が取り換えられた」；②「この建築物は 1745 年に新しく切り出した屋根の梁と他の建物から再利用し

たまぐさを使って構築された」;③「この建築物は1728年に建てられたが、1740年まで屋根が付けられなかった(またはその年に屋根が再び作られた)(Ababneh et al. 2000: 278)」。最終的に、研究者たちは年代と背景の詳細を考慮に入れた上で、紀元1728年に構築そして紀元1745年に屋根の建設(再建)、という③の仮定を支持したのである。

アメリカ南西部の遺跡で年輪年代学が作成した年表と違い、エジプトの年輪年代は豊富な歴史的記録と照合しなければならない。そこには即位年という数多くの相対的ではあるが精密な年代が提起される(Creasman in press a; Creasman in press b)。

古代エジプトの遺跡において、年輪によって年代測定される事象の即位年はあらゆる資料源から提供される可能性がある。特定の出来事の日付(またはそれ以前と以後 *terminus post/ante quem*)を記したパピルスやその他の証拠碑文は、仮定上関係する考古学的材木があるかもしれない。例えば、ワディ・アル＝ジャルフで見つかった「王(クフ)の全ての仕事の監督官」メレルの日誌(Tallet and Marouard 2014)やクフ王第2の船の石坑の蓋石に記された日付(Yoshimura and Kurokochi 2013)などである。

2～3の即位年を断定するだけでは、完全なエジプト固定年代記の構築を成し遂げることはできない。おそらく数多くの出来事の日付を固定することによって完成されるであろう。年輪年代測定は歴史情報源の再評価を必要とし、そのいくつかは対立を生むに違いない。エジプト学者たちは、矛盾する年輪年代データに直面し、具体的な即位年の理解を再検討する必要に迫られるであろう(Cf. Towner 2000)。

7. 行動の解釈

年輪年代学の年代測定作業を複雑にする要因には、同時に古代エジプト人がどのように材木を入手し利用したかを明らかにするものもある。直接間接を問わず、輸送、乾燥、貯蔵、修復、再利用は木材に痕跡を残すからである。

材木の一生は、それが得られた木の伐採から始まる。樹皮の外縁が残っていれば、最外の年輪の性質から材木がどの季節に切り出されたのかを断定することができる可能性がある。例えば晩材が無ければ、それは晩材ができる前の成長期の途中で伐木されたことを示す(Baillie 1995: 21–25)。エジプト内であれば外国であれ、木材の収穫の季節的パターン(Dean 1997: 49)や森林管理(Loewen 2000)を見出すことができる。樹種の特定は異種の相関や利用法を特定できる。例えば、木材を食べる海生軟体動物のフナクイムシに抵抗力のあるスギが海洋船舶に好んで使われたことは有名である(Pulak 2001)。

調達された未加工の材木は使用できる材木に変形される。年輪年代分析、特に一度に使われた大量の木材(例:造船材)の分析では、この過程の多くの面が明らかになる。工具痕跡は木の伐採、枝や樹皮の除去、切断、成形の方法を明らかにする(Dean 1997: 49; Nash 2002: 254–255; Creasman 2014)。材木によってはきこりや大工がつけた印の痕跡が残っているものもある(E.g., Dean 1997: 49; Creasman 2014)。

木材は伐木してからすぐに使用されるとは限らない。輸送やたわみを防ぐための乾燥は何年もかかったかもしれない(Tredgold and Hurst 1875: 340–356)。残念ながら古代エジプト人(または外国の供給業者)が材木を乾燥させたかどうかは今のところ分かっていないが、状況によっては(例えば造船や家具の製造では)させたと考えるのが理にかなっているであろう。年輪年代学はこの問題の解決に役立つかもしれない。

材木の木目の研究は、生産中に無駄になる木材の量を明らかにできる(Creasman 2014)。造船など大量の木材を要する事象では、木目と年輪を比較することによってその材木が何本分の木を表しているかを推測することもできる。例えばピッツバーグにあるダハシュール出土の船に使われた材木を比較したところ、この船体の建造には少なくとも18本のスギの木が使われたことが分かった。さらに同じ検査から、同じ木から

得た厚板が対応する左舷と右舷に使われていることが明らかになった。おそらく構造上の対象を保つためであろう (Ward 2000: 96; Creasman 2014)。異なる事象 (例えば違う種類の船舶) における材木利用の比較は、建造慣行 (例: 材木の質の相関性、損失量など) の対応点と相違点を明らかにできる (Creasman 2014)。

古代エジプトでは初期のころから再利用が普通に行われていた (Creasman 2013; Creasman 2014)。これは年輪年代測定に複雑さを導入する反面、年輪年代学によって、造船材の備蓄と船の再構築 (Pomey 2009: 2; Creasman and Doyle 2010: 16; Pomey 2011: 9; Tallet 2012: 150-151, 160, fig.10; Yoshimura and Kurokochi 2013)、他の建造プロジェクトにおける材木の再利用 (例: ダハシュールの船) (Creasman 2010; Creasman 2013: 160; Creasman 2014)、引き上げドックを補強するための解体した船舶からの木材の設置³⁾、などを含む慣行に光を当てることができる。

年輪の研究は年代記に直接影響すること以外にも、伐木と木工の技術と原理 (E.g., Towner 1997; Creasman 2014)、組み立て作業と構築の印 (Creasman 2014) など人間行動のあらゆる面を明らかにすることができるのである。

行動は年代測定を複雑にするかもしれないが、これらの複雑性に対処することによって古代エジプト文明の無視されがちな側面に光を当てることになる。年輪年代学の利点と関心は、暦年の確立をはるかに超えて広がっているのである。

8. おわりに

年輪年代学は、他の方法では調査しがたい多様な手段を考古学者やエジプト学者に与えてくれる。良好な保存と来世に備えて儀式的な供給を行う古代エジプトの慣行の結果、エジプトでの考古学的発掘からは人為的に改変された木材が何百トンも採取されている。年輪に基づく調査に当たって、古代の船、棺、家具、建築材は確固たる資料源なのである。変化する気候、変動する景観、そして適応する動植物は、その景観を占有する文化に絶大な影響を与えてきた。エジプト学者は、自分たちが研究する分野の中でさえこれらの現象をごく部分的にしか把握していない。これらをよく理解することは、直接的にも間接的にもエジプト学上最も議論を呼ぶ問題のひとつである絶対年代記に理解をはぐくむことに繋がる。これらの分野で進展を遂げるには、年輪年代学とエジプト学が協力していかなければならないのである。

(日本語訳協力 河合 望)

註

- 1) 問題点に関する考察は Bietak 2013 を参照。
- 2) 紀元前 690 年は Kitchen 2013、紀元前 721 年は Khan 2006 を参照。
- 3) ラフーン: Petrie et al. 1923: 2, 12, 34, pls.XIII and XV. リシュト: Arnold 1991: 86-92; Arnold 1992: 92-95, 102-112. Creasman 2013: 169-170; Creasman 2014 も参照。

参考文献

- Ababneh, L.N., Towner, R.H., Prasciunas, M.M., and Porter, K.T.
2000 "The Dendrochronology of Palluche Canyon, Dinétah", *Kiva* 66(2), pp.267-289.
- Adams, B.
2001 "Locality 6 in 2000: Amazing Revelations", *Nekhen News* 13, pp.4-7.
- Ahlstrom, R.V.N.
1985 *The Interpretation of Archaeological Tree-ring Dates*. PhD dissertation, University of Arizona, Tucson.
- Arnold, D.

- 1991 *Building in Egypt: Pharaonic Stone Masonry*, Oxford.
- 1992 *The South Cemeteries of Lisht vol. 3, The Pyramid Complex of Senwosret I*, New York.
- Baillie, M.G.L.
- 1994 “Dendrochronology Raises Questions about the Nature of the AD 536 Dust-Veil Event”, *The Holocene* 4(2), pp.212-217.
- 1995 *A Slice through Time: Dendrochronology and Precision Dating*, London.
- Bannister, B.
- 1963 “Dendrochronology”, In Brothwell, D.R. and Higgs, E.S. (eds.), *Science in Archaeology: A Comprehensive Survey of Progress and Research*, New York, pp. 162–176.
- 1970 “Dendrochronology in the Near East: Current Research and Future Potentialities”, in *Proceedings of the Seventh International Congress of Anthropological and Ethnological Sciences* 5, pp.336-340, (Reprinted).
- 1985 *Letter to D. Watters, Carnegie Museum of Natural History, Pittsburgh, Pennsylvania, USA, dated 3 October 1985, Laboratory of Tree-Ring Research archives, University of Arizona, Tucson, Arizona, USA.*
- Bardinet, T.
- 2008 *Relations économiques et pressions militaires en méditerranée orientale et en Libye au temps des pharaons*, Paris.
- Becker, B.
- 1993 “An 11,000-Year German Oak and Pine Dendrochronology for Radiocarbon Calibration”, *Radiocarbon* 35, pp.201-213.
- Bell, B.
- 1970 “Oldest record of the Nile Floods”, *Geographical Journal* 136, pp.569-573.
- 1975 “The Dark Ages in Ancient History: The First Dark Age in Egypt”, *American Journal of Archaeology* 75, pp.1-26.
- 1979 “Climate and the History of Egypt: The Middle Kingdom”, *American Journal of Archaeology* 79, pp.223-269.
- Bernabei, M., Bontadi, J., and Rognoni, G. R.
- 2010 “Dendrochronological Investigation of Stringed Instruments from the Collection of the Cherubini Conservatory in Florence, Italy”, *Journal of Archaeological Science* 37, pp.192-200.
- Bietak, M.
- 2013 “Antagonisms in Historical and Radiocarbon Chronology”, in A. J Shortland and C. Bronk Ramsey (eds.), *Radiocarbon and the Chronologies of Ancient Egypt*, Oxford, pp.76-109.
- Borgaonkar, H.P., Sikder, A.B., Ram, S., and Pant, G.B.
- 2010 “El Niño and Related Monsoon Drought Signals in 523-Year-Long Ring Width Records of Teak (*Tectona grandis* L.F.) Trees from South India”, *Palaeogeography, Palaeoclimatology, Palaeoecology* 285, pp.74-84.
- Breasted, J.H.
- 1933 *Letter to A.E. Douglass, University of Arizona, Tucson, Arizona, USA, dated 1 November 1933, Laboratory of Tree-Ring Research archives, University of Arizona, Tucson, Arizona, USA.*
- Bridge, M.
- 2012 “Locating the Origins of Wood Resources: A Review of Dendroprovenancing”, *Journal of Archaeological Science* 39, pp.2828-2834.
- Bronk Ramsey, C., Dee, M., Rowland, J., Higham, T., Harris, S., Brock, F., Quiles, A., Wild, E., Marcus, E., and Shortland, A.
- 2010 “Radiocarbon-Based Chronology for Dynastic Egypt”, *Science* 328, pp.1554-1557.
- Cichoński, O.
- 2000 “Methods and Aims in Dendrochronology: Dating Wooden Objects from the Eastern Mediterranean in the Second Millennium B.C. (Absolute Chronology IV)”, in Bietak, M. (ed.), *The Synchronization of Civilizations in the Eastern Mediterranean in the Second Millennium B.C.*, Denkschriften der Österreichischen Akademie der Wissenschaften 19, Vienna, pp. 62–67.
- 2006 “Libanesische Zedern als Datierungswerkzeug in der ägyptischen Archäologie”, in Czerny, E., Hein, I., Hunger, H., Melman, D., and Schwab, A. (eds.), *Timelines: Studies in Honour of Manfred Bietak*, Bd. 3, Orientalia Lovaniensia Analecta 149, Louvain, pp. 293–299.
- Cook, E.R., Palmer, J.G., Ahmed, M., Woodhouse, C.A., Fenwick, P., Zafar, M.U., Wahab, M., and Khan, N.
- 2013 “Five Centuries of Upper Indus River Flow from Tree Rings”, *Journal of Hydrology* 486, pp.365-375.
- Creasman, P.P.
- 2010 “A Further Investigation of the Cairo Dahshur Boats”, *Journal of Egyptian Archaeology* 96, pp.101-123, pl.II.
- 2013 “Ship Timber and the Reuse of Wood in Ancient Egypt”, *Journal of Ancient Egyptian History* 6, pp.152-176
- 2014 “Reflections of a Timber Economy: The Interpretation of Middle Kingdom Ship and Boat Timbers”, *Göttinger Miszellen* 240, pp.19-35.

- in press
- a “The Potential of Dendrochronology in Egypt: Understanding Ancient Human/Environment Interactions”, in Ikram, S. and Kaiser, J. (eds.), *Proceedings of the Conference on the Bioarchaeology of Ancient Egypt at the American University in Cairo 2013*, Cairo.
- b “Tree Rings and the Chronology of Ancient Egypt”, *Radiocarbon*.
- Creasman, P.P. and Doyle, N.
- 2010 “Overland Boat Transportation during the Pharaonic Period: Archaeology and Iconography”, *Journal of Ancient Egyptian Interconnections* 2.3, pp.14-30.
- Creasman, P.P., Bannister, B., Towner, R.H., Dean, J.S., and Leavitt, S.W.
- 2012 “Reflections on the Foundation, Persistence, and Growth of the Laboratory of Tree-Ring Research, circa 1930–1960”, *Tree-Ring Research* 68(2), pp. 81-89.
- Dean, J.S.
- 1978 “Tree-Ring Dating in Archaeology”, in Jennings, J. (ed.), *University of Utah Anthropological Papers: Miscellaneous Collected Papers* 24, Salt Lake City, pp.129-163.
- 1997 “Dendrochronology”, In Taylor, R.E. and Aitken, M.J. (eds.), *Chronometric Dating in Archaeology*, New York, pp.31-64.
- Dee, M.W., Brock, F., Harris, S.A., Bronk Ramsey, C., Shortland, A.J., Higham, T.F.G., and Rowland, J.M.
- 2010 “Investigating the Likelihood of a Reservoir Offset in the Radiocarbon Record for Ancient Egypt”, *Journal of Archaeological Science* 37, pp.687-693.
- Douglass, A.E.
- 1914 “A Method of Estimating Rainfall by the Growth of Trees”, *Bulletin of the American Geographical Society* 46(5), pp.321-335.
- 1929 “The Secret of the Southwest Solved by Talkative Tree Rings”, *National Geographic Magazine* 56(6), pp.736-770.
- 1932 *Letter to Prentice Duell, American Express Company, Cairo, Egypt, dated 2 July 1932, Laboratory of Tree-Ring Research archives*, University of Arizona, Tucson, Arizona.
- 1941 “Crossdating in Dendrochronology”, *Journal of Forestry* 39(10), pp. 825–831.
- Eshete, G. and Ståhl, G.
- 1999 “Tree Rings as Indicators of Growth Periodicity of Acacias in the Rift Valley of Ethiopia”, *Forest Ecology and Management* 116, pp.107-117.
- Ferguson, C.W.
- 1970 “Concepts and Techniques of Dendrochronology”, in Berger, R. (ed.), *Scientific Methods in Medieval Archaeology*, Berkeley, pp.183-200.
- Freidrich, M., Remmele, S., Kromer, B., Hofmann, J., Spurk, M., Kaiser, K.F., Orsel, C., and Küppers, M.
- 2004 “The 12,460-Year Hohenheim Oak and Pine Tree-Ring Chronology from Central Europe—A Unique Annual Record for Radiocarbon Calibration and Paleoenvironment Reconstructions”, *Radiocarbon* 46(3), pp.1111-1122.
- Gale, R., Gasson, P., Hepper, N., Killen, G.
- 2000 “Wood”, in Nicholson, P. T. and Shaw, I. (eds.), *Ancient Egyptian Materials and Technology*, Cambridge, pp.334-371.
- Gebrekirstos, A., Mitlöhner, R., Teketay, D., and Worbes, M.
- 2008 “Climate-Growth Relationships of the Dominant Tree Species from Semi-arid Savannah Woodland in Ethiopia”, *Trees* 22, pp.631-641.
- Génova, M., Ballesteros-Cánova, J.A., Díez-Herrero, A., and Martínez-Callejo, B.
- 2011 “Historical Floods and Dendrochronological Dating of a Wooden Deck in the Old Mint of Segovia, Spain”, *Geoarchaeology* 26(5), pp.786-808.
- Gourlay, I.D.
- 1995a “The Definition of Seasonal Growth Zones in Some African Acacia species—A Review”, *International Association of Wood Anatomists Journal* 16, pp.353-359.
- 1995b “Growth Ring Characteristics of Some African Acacia species”, *Journal of Tropical Ecology* 11(1), pp.121-140.
- Gray, S.T., Lukas, J.J., and Woodhouse, C.A.
- 2011 “Millennial-Length records of Streamflow from Three Major Upper Colorado River Tributaries”, *Journal of the American Water Resources Association* 47(4), pp.702-712.
- Griggs, C.B. and Manning, S.W.
- 2009 “A Reappraisal of the Dendrochronology and Dating of Tille Höyük (1993)”, *Radiocarbon* 51(2), pp.711-720.
- Griggs, C., Pearson, C., Manning, S.W., and Lorentzen, B.

- 2013 “A 250-Year Annual Precipitation Reconstruction and Drought Assessment for Cyprus from *Pinus brutia* Ten. Tree-Rings”, *International Journal of Climatology*, doi: 10.1002/joc.3869.
- Haneca, K., De Boodt, R., Herremans, V., De Pauw, H., Van Acker, J., Van de Velde, C., and Beeckman, C.
2005 “Late Gothic Altarpieces as Sources of Information on Medieval Wood Use: A Dendrochronological and Art Historical Survey”, *International Association of Wood Anatomists Journal* 26(3), pp.273-298.
- Hassan, F.
2007 “Droughts, Famine, and the Collapse of the Old Kingdom: Re-reading Ipuwer”, in Hawass, Z. and Richards, J. (eds.), *The Archaeology of Art and Ancient Egypt: Essays in Honor of David B. O’Connor*, Cairo, pp.357-377.
- Haury, E.W.
1935 “Tree Rings: The Archaeologist’s Time-Piece”, *American Antiquity* 1.2, pp.98-108.
1962 “HH-39: Recollections of a Dramatic Moment in Southwestern Archaeology”, *Tree-Ring Bulletin* 24, pp.3-4.
- Hoshino, Y., Okochi, T., and Mitsutani, T.
2008 “Dendrochronological Dating of Vernacular Folk Crafts in Northern Central Japan,” *Tree-Ring Research* 64(2), pp.109-114.
- Hornung, E., Krauss, R., and Warburton, D.A.
2006 *Ancient Egyptian Chronology*, Leiden.
- Hughes, M.K.
2002 “Dendrochronology in Climatology—The State of the Art”, *Dendrochronologia* 20(1–2), pp.95-116.
- Jacoby, G.C., Bunker, D.E., and Benson, B.E.
1997 “Tree-Ring Evidence for an A.D. 1700 Cascadia Earthquake in Washington and Northern Oregon”, *Geology* 25(11), pp.999-1002.
- Khan, D.
2006 “Divided Kingdom, Corgency, or Sole Rule in the Kingdom(s) of Egypt-and-Kush?”, in Bietak, M. (ed.), *Proceedings of SCIEEM 2005, Ägypten und Levante* 16, Vienna, pp.235-252.
- Kitchen, K.A.
2006 “The Strengths and Weaknesses of Egyptian Chronology—A Reconsideration”, in Bietak, M. (ed.), *Proceedings of SCIEEM 2005, Ägypten und Levante* 16, Vienna, 293-308.
2013 “Establishing Chronology in Pharaonic Egypt and the Ancient Near East: Interlocking Textual Sources Relating to c. 1600–664 BC”, in Shortland, A. J. and Bronk Ramsey, C. (eds.), *Radiocarbon and the Chronologies of Ancient Egypt*, Oxford, pp.1-18.
- Klein, A., Nemestothy, S., Kadnar, J., and Grabner, M.
2014 “Dating Furniture and Coopered Vessels without Waney Edge—Reconstructing Historical Wood-working in Austria with the Help of Dendrochronology”, *Dendrochronologia* 32, pp.90-96.
- Kuniholm, P.I.
1992 *Aegean Dendrochronology Project December 1991 Annual Report*, Cornell, <http://dendro.cornell.edu/reports/report1991.pdf>, accessed 15 July 2014.
2001 “Aegean Dendrochronology Project 1999–2000”, *Arkeometri Sonuçları Toplantısı* 16, pp.79-84.
2002 “Archaeological Dendrochronology”, *Dendrochronologia* 20.1/2, pp.63-68.
- Lara, A. and Villalba, R.
1993 “A 3620-Year Temperature Record from Fitzroyal cupressoides Tree Rings in Southern South America”, *Science* 260, pp.1104-1106.
- Liphschitz, N.
2007 *Timber in Ancient Israel: Dendroarchaeology and Dendrochronology*, Tel Aviv.
- Loewen, B.
2000 “Forestry Practices and Hull Design, ca. 1400–1700”, in Guerreiro, I. (ed.), *Fernando Oliveira and his Era: Humanism and the Art of Navigation in Renaissance Europe (1450–1650)*, Aviero, pp.143-151.
- Manning, S. W., Dee, M. W., Wild, E. M., Bronk Ramsey, C., Brandy, K., Creasman, P.P., Griggs, C.B., Pearson, C.L., Shortland, A.J., and Steier, P.
2014 “High-Precision Dendro-14C Dating of Two Cedar Wood Sequences from First Intermediate Period and Middle Kingdom Egypt and a Small Regional Climate-Related 14C Divergence”, *Journal of Archaeological Science* 46, pp.401-416.
- Manning, S.W., Kromer, B., Dee, M.W., Friedrich, M., Higham, T.F.G. and Bronk Ramsey, C.
2013 “Radiocarbon Calibration in the Mid- to Later 14th Century BC and Radiocarbon Dating Tell El-Amarna, Egypt”, in Shortland, A. J. and Bronk Ramsey, C. (eds.), *Radiocarbon and the Chronologies of Ancient Egypt*, Oxford, p.121-145.

- Mark, S.
2009 “The Construction of the Khufu I Vessel (c.2566 BC): A Re-evaluation”, *International Journal of Nautical Archaeology* 38(1), pp.133-152.
- McCarroll, D. and Loader, N.J.
2004 “Stable Istopes in Tree Rings”, *Quaternary Science Reviews* 23, pp.771-801.
- Moeller, N.
2005 “The First Intermediate Period: A Time of Famine and Climate Change?”, *Egypt and the Levant* 15, pp.153-167.
- Nash, S. E.
1993 “A Cutting-Date Estimation Method for Two Archaeologically Important Tree Species”, *Arizona Anthropologist* 10, pp.73-98.
2002 “Archaeological Tree-Ring Dating at the Millennium”, *Journal of Archaeological Research* 10(3), pp.243-275.
- Nicolini, G., Tarchiani, V., Saurer, M., and Cherubini, P.
2010 “Wood-Growth Zones in *Acacia seyal* Delile in the Keita Valley, Niger: Is There Any Climatic Signal?”, *Journal of Arid Environments* 74, pp.355-359.
- Petrie, F., Brunton, G., and Murray, M.A.
1923 *Lahun II*, London.
- Pomey, P.
2009 “Ancient Ship Remains Unearthed at Ayn Soukhna on the Gulf of Suez”, *Pharos: Newsletter of the Alexandria Centre for Maritime Archaeology & Underwater Cultural Heritage* 1, p.2.
2011 “Les Bateaux d’Ayn Soukhna: Les Plus Vieux Vestiges de Navires de Mer Actuellemente Connus”, *Égypte, Afrique et Oriente* 64, pp.3-12.
- Pulak, C.
2001 “Cedar for Ships”, *Archaeology and History in Lebanon* 14, pp.24-36.
- Redford, D.B. (ed.)
2001 *The Oxford Encyclopedia of Ancient Egypt*, 3 vols., Oxford.
- Renfrew, C.
1996 “Kings, Tree Rings and the Old World”, *Nature* 381, pp.733-734.
- Rich, S., Manning, S.W., Degryse, P., Vanhaecke, F., and Van Lerberghe, K.J.
2012 “Strontium Isotopic and Tree-Ring Signatures of *Cedrus brevifolia* in Cyprus”, *Journal of Analytical Atomic Spectrometry* 27, pp.796-806.
- Schneider, T.
2010 “Contributions to the Chronology of the New Kingdom and the Third Intermediate Period”, *Ägypten und Levante* 20, pp.373-404.
- Shaw, I.
2000a “Introduction: Chronologies and Cultural Change in Egypt”, in Shaw, I. (ed.), *The Oxford History of Ancient Egypt*, Oxford, pp.1-17.
2000b “Chronology”, in Shaw, I. (ed.), *The Oxford History of Ancient Egypt*, Oxford, pp.479-483.
- Shortland, A.J. and Bronk Ramsey, C.
2013 *Radiocarbon and the Chronologies of Ancient Egypt*, Oxford.
- Spence, K.
2000 “Ancient Egyptian Chronology and the Astronomical Orientation of the Pyramids”, *Nature* 408, pp.320-324.
- Studhalter, R.A.
1955 “Tree Growth I. Some Historical Chapters”, *Botanical Review* 21(1/3), pp.1-72.
- Tallet, P.
2012 “Ayn Sukhna and Wadi el-Jarf: Two Newly Discovered Pharaonic Harbours on the Suez Gulf”, *British Museum Studies in Ancient Egypt and Sudan* 18, pp.147-168.
- Tallet, P. and Marouard, G.
2014 “The Harbor of Khufu on the Red Sea Coast at Wadi al-Jarf, Egypt”, *Near Eastern Archaeology* 77(1), pp.4-14.
- Therrell, M.D., Stahle, D.W., Diez, Villanueva Diaz, J., Cornejo Oviedo, E.H., and Cleaveland, M.K.
2006 “Tree-Ring Reconstructed Maize Yield in Central Mexico: 1474–2001”, *Climate Change* 74, pp.493-504.
- Touchan, R., Anchukaitis, K.J., Meko, D.M., Sabir, M., Attalah, S., and Aloui, A.
2011 “Spatiotemporal Drought Variability in Northwestern Africa over the Last Nine Centuries”, *Climate Dynamics* 37, pp.238-252.
- Touchan, R. and Hughes, M.K.

- 2009 “Dendroclimatology in the Near East and Eastern Mediterranean Region”, in Manning, S.W. and Bruce, M.J. (eds.), *Tree-rings, Kings, and Old World Archaeology and Environment. Papers Presented in Honor of Peter Ian Kuniholm*, Oxford, pp.65-70.
- Touchan, R., Akkemik, Ü., Hughes, M.K., and Erkan, N.
2007 “May–June Precipitation Reconstruction of Southwestern Anatolia, Turkey during the Last 900 Years from Tree Rings”, *Quaternary Research* 68, pp.196-202.
- Towner, R.H.
1997 *The Dendrochronology of the Navajo Pueblitos of Dinétah*. PhD dissertation. University of Arizona, Tucson.
2000 “Dendrochronology and Historical Records: Concordance and Conflict in Navajo Archaeology”, in Nash, S.E. (ed.), *It's About Time: A History of Archaeological Dating in North America*, Salt Lake City, pp.168-185.
2002 “Archaeological Dendrochronology in the Southwestern United States”, *Evolutionary Anthropology* 11, pp.68-84.
- Tredgold, T. and Hurst, J.T.
1875 *Elementary Principles of Carpentry*, second edition, revised, London.
- Ward, C.
2000 *Sacred and Secular: Ancient Egyptian Ships and Boats*, Philadelphia.
- Wiener, M.H.
2006 “Egypt and Time”, in Bietak, M. (ed.), *Proceedings of SCIEEM 2005, Ägypten und Levante* 16, Vienna, pp.325-339.
- Wils, T.H.G., Robertson, I., Eshetu, Z., Koprowski, M., Sass-Klaassen, U.G.W., Touchan, R., and Loader, N.J.
2010 “Towards a Reconstruction of Blue Nile Baseflow from Ethiopian Tree Rings”, *The Holocene* 20, pp.837-849.
- Wils, T.H.G., Sass-Klaassen, U.G.W., Eshetu, Z., Bräuning, A., Gebrekirstos, A., Couralet, C., Robertson, I., Touchan, R., Koprowski, M., Conway, D., Briffa, K.R., and Beeckman, H.
2011 “Dendrochronology in the Dry Tropics: The Ethiopian Case”, *Trees* 25, pp.345-354.
- Wimmer, R. and Grabner, M.
2000 “A Comparison of Tree-Ring Features in *Picea abies* as Correlated with Climate”, *International Association of Wood Anatomists Journal* 21(4), pp.403-416.
- Woodhouse, C.A. and Overpeck, J.T.
1998 “2000 Years of Drought Variability in the Central United States”, *Bulletin of the American Meteorological Society* 79, pp.2693-2714.
- Yoshimura, S. and Kurokochi, H.
2013 “Brief Report on the Project of the Second Boat of King Khufu”, *Journal of Ancient Egyptian Interconnections* 5(1), pp.85-89.

中王国時代の装身具利用からみた 埋葬習慣の地域性

山崎 世理愛*

Regional Variability of Personal Adornments and Burial Customs in the Middle Kingdom

Seria YAMAZAKI*

Abstract

The Middle Kingdom was a period of reformation and social change, specifically in funerary customs, people were able to associate themselves with Osiris. Moreover, belief in the afterlife became popular among commoners, and their interest of preparing for the netherworld was increased. This change made a new trend of funerary items such as shabti, wooden model and coffin texts. In order to understand the burial customs during the Middle Kingdom, the models and coffins have been studied, but the personal adornments like jewelry and amulet have not yet been discussed well. Moreover, unlike other objects, regional variability of the adornments remains unclear.

In this paper, therefore, the personal adornments of the Middle Kingdom were studied to clarify their regional diversity with quantitative analysis. This study dealt with 160 tombs including personal adornments, and the adornments were categorized into 18 types according to their functional and morphological features.

The analysis showed that especially four types; necklaces, collars, single string bracelets and broad bracelets were mostly popular adornments during the Middle Kingdom. Furthermore, frequency of the four types showed the regional features; there were different patterns of the selection by the region. Firstly, collars and broad bracelets were the most popular in the Memphis-Fayum region. Middle Egypt (to Rifeh) had a similar pattern but broad bracelets were absent. Secondly, necklaces and single string bracelets were mainly used in South Egypt (to Thebes), and they tended to be made of expensive materials such as gold, silver and semi-precious stones.

Moreover, a series of jewelry belonging to the “Lower Egyptian Costume” were mostly found from the royal burials in the Memphis-Fayum region. Collars and broad bracelets also appeared in the royal burials as essential items. Therefore it is probable that such adornments were originally regalia and mainly used as the royal burial goods. In the Middle Kingdom, non-royalty could emulate some regalia. These aspects indicate that commoner at the Memphis-Fayum idealized the royal burial and custom, and people of Middle Egypt probably bear similar belief. However, there was different ideal in South Egypt where the most important item for the burial was not regalia but the necklaces and single string bracelets made of expensive materials. Therefore, each region had own ideology for the burial, and it was reflected in the personal adornments.

* 早稲田大学文学部考古学コース 4年

* Undergraduated Student, School of Humanities and Social Sciences, Waseda University

1. はじめに

古代エジプトの中王国時代は、それまで築き上げられてきた社会の伝統を継承しながらも、新王国時代に続く新たな文化的要素が育まれた時代である。また、王以外にも来世への道が開かれたことで、人々の死後への関心がより強くなった時期でもある。もちろん、それは埋葬習慣から直接看取される。たとえば、木棺にはコフィンテキストなど来世に向けて様々な呪文が書かれた。さらに、穀物倉庫、パン作り、ビール醸造などの木製模型が来世のために副葬されたのである。そしてその影響は、装身具・アミュレットにも表れたと言われている。しかし、先行研究では、装身具の製作技術や種類の紹介が主で、埋葬習慣と関連づけた論考は極めて少ない。

また、中王国時代における埋葬習慣の地域性については、これまで木棺の装飾や副葬品から語られてきた。しかし、副葬品の中でも装身具からは、十分な考察がされてこなかったのである。そこで本論では、装身具・アミュレットの地域別出土傾向を分析することで、新たな視点から中王国時代の埋葬習慣について考察を加える。

2. 先行研究と本論の目的

古代エジプトでは、襟飾りや腕輪など様々な装身具およびアミュレットが利用された。幅広い社会階層の墓に副葬され、発掘調査によって多種多様な形態が確認されている。装身具・アミュレットの研究は、ピートリ (Petrie, W.M.F.) によるアミュレットの分類 (Petrie 1914) を基礎研究の始まりとして、諸研究者がスカラベなど個々の遺物に関する研究を進めるに至る。また、アルドレッド (Aldred, C.) による各時代の装身具とその製作技法に関する書籍 (Aldred 1971) や、アンドリュース (Andrews, C.) による各アミュレットの持つ意味について詳述された書籍 (Andrews 1994) が刊行されており、遺跡の報告書などで広く引用されている。

王朝時代を通して装身具およびアミュレットは利用されたが、その種類が大幅に増加したのは中王国時代だと言われている (Wegner 2010: 124)。ウェグナー (Wegner, J.) は、その理由として、王族以外の人々と神との距離が縮まるという中王国時代の社会的変化を指摘している。つまり、それまで王族が独占していた神と結びつきの強いシンボルを、王族以外の人々も利用できるようになり、装身具・アミュレットに取り入れ始めたということである (Wegner 2010: 125-127)。また、中王国時代の装身具については、出土遺物と画像資料の両方をもとにグラジェツキー (Grajetzki, W.) がタイプごとにまとめ、それぞれの役割について述べている (Grajetzki 2014: 116-127)。

以上のように、古代エジプトの装身具およびアミュレットに関する既往研究は、主に装身具の種類紹介や型式分類に重点を置いておこなわれてきた。中王国時代の装身具はそれに加え、最近では、特にグラジェツキーによって、タイプ分けやアセンブリッジについて検討がされているという状況にある。

中王国時代における埋葬習慣の変化は、木製模型や木棺装飾、その他様々な副葬品から考察がされているが、装身具という視点ではあまり語られてこなかった。というのも、先行研究では、装身具の地域や時期による違いという視座に立った研究がほとんどおこなわれていないのである。また、これまでグラジェツキーのように、出土例を挙げてそれを考察するという方法が中心で、定量的な分析はおこなわれてこなかった。よって本論では、副葬品の中でも装身具に焦点をあて、特にその地域性について明らかにすることを目的とする。さらに、その地域性は何に起因するのかということも考察してみたい。

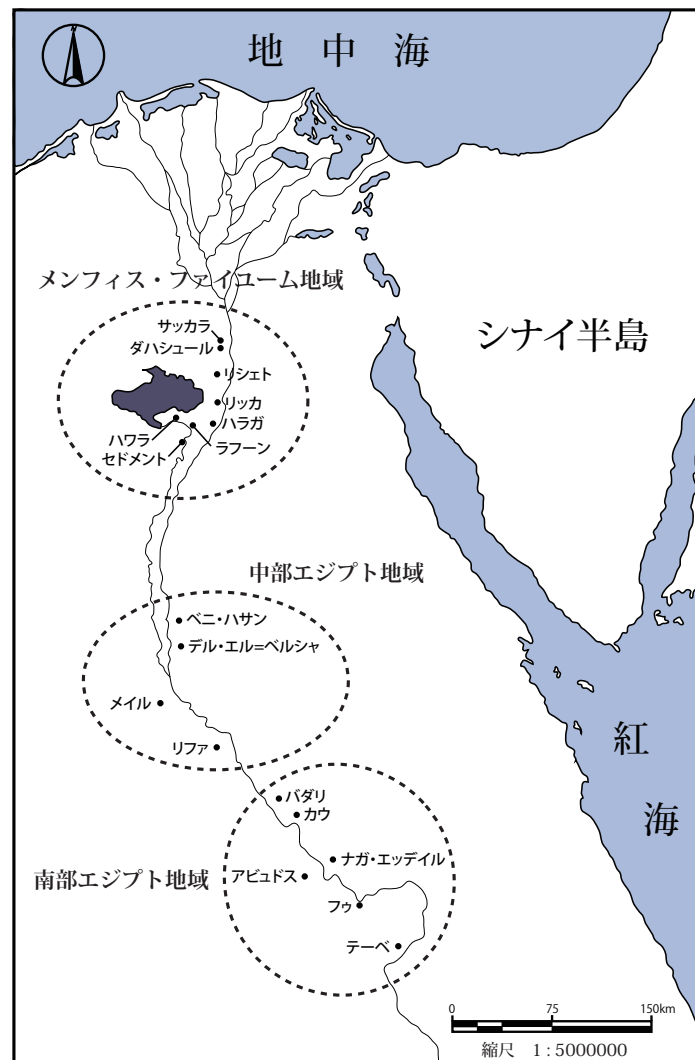


図1 対象遺跡を示したエジプト地図

Fig.1 Map of Nile Valley

3. 対象遺跡・資料と分析方法

本論で対象とする遺跡は、サッカラ遺跡 (Firth and Gunn 1926)、ダハシュール遺跡 (de Morgan 1895; de Morgan 1903; Baba and Yoshimura 2011)、リシエト遺跡 (Mace and Winlock 1916; Lansing and Hayes 1934; Arnold 1992)、リッカ遺跡 (Engelbach 1915)、ハワラ遺跡 (Farag and Iskander 1971)、ハラガ遺跡 (Engelbach 1923)、ラフーン遺跡 (Brunton 1920; Petrie, Brunton and Murray 1923; Winlock 1934)、セドメント遺跡 (Grajetzki 2005)、ベニ・ハサン遺跡 (Garstang 1907)、デル・エル=ベルシャ遺跡 (Kamal 1901; D' Auria, Lacovara and Roehrig 1988)、メイル遺跡 (<http://www.metmuseum.org/>)、リファ遺跡 (Petrie 1907)、バダリ遺跡 (Brunton 1927)、カウ遺跡 (Brunton 1927)、ナガ・エッデイル遺跡 (Eaton 1941)、アビュドス遺跡 (Garstang 1902; Peet 1914; Peet and Loat 1914; Frankfort 1930; Richards 2005)、フウ遺跡 (Petrie 1901)、テーベ遺跡 (Hayes 1953; Roehrig 2003) である (図1)。地域区分については、図1に示した通り、3地域に分ける¹⁾。

対象とする遺物は墓から出土した装身具であるが、装身具は本来の形態ではなくビーズ単体として出土することが多い。そして、発掘報告書の精度によっては、出土位置も不明な場合がある。そのため本論では、第11王朝末～第13王朝中頃に比定される墓から出土した、形態が明らかな装身具のみを分析の対象とする。

一方で、中には盗掘されている墓も多く、装身具の形態は判明していても、個体数が不明な場合がある。したがって、分析においては遺物の出土量ではなく、それぞれの種類の装身具が何基の墓から出土したのかという「出土墓数」に注目する。具体的な分析対象墓数は表1に示した通りで、メンフィス・ファイユーム地域は合計86基、中部エジプト地域は合計18基、南部エジプト地域は合計56基、全地域合わせて160基となっている(表5)²⁾。以上の墓を対象に、装身具の種類別出土傾向を地域ごとに分析していく。なお、同一の墓から複数種類の装身具が出土することがあるが、その場合は、それぞれの装身具につき出土墓数を1基ずつカウントする。墓の時期設定については、基本的に発掘報告書の記述に従うが、中には後の研究によって大幅に年代が修正された墓も存在する。その場合は、最近の研究を十分考慮した上で時期を設定する。

表1 地域・遺跡ごとの分析対象とする墓数
Pl.1 Number of tombs for analysis

地域	遺跡名	中王国時代前半	中王国時代後半	不明	計
メンフィス・ファイユーム地域	サッカラ	4基	6基	-	10基
	ダハシュール	-	8基	-	8基
	リシェト	2基	2基	3基	7基
	リッカ	-	1基	11基	12基
	ハワラ	-	1基	-	1基
	ハラガ	-	15基	31基	46基
	ラフーン	-	1基	-	1基
	セドメント	1基	-	-	1基
中部エジプト地域	ベニ・ハサン	4基	2基	5基	11基
	デル・エル＝ベルシヤ	2基	-	-	2基
	マイル	-	1基	-	1基
	リファ	-	4基	-	4基
南部エジプト地域	バダリ	1基	-	-	1基
	カウ	4基	-	-	4基
	ナガ・エッデイル	1基	-	-	1基
	アビュドス	1基	21基	21基	43基
	フゥ	-	-	4基	4基
	テーベ	2基	1基	-	3基

4. 本論における装身具の分類

分析に先立って、ここではまず本論における装身具の分類を提示する。既往研究でおこなわれた分類は、アミュレットを含むビーズの形状に重点を置いていた。しかし、本来副葬品として埋納された段階では、多くが装身具として一つのまとまりを成していたであろう。副葬品としての利用において重要なのは、ビーズの形状だけではなく、そのまとまりにも意味があったと考えられる。そのため、本論ではまず、身体のどの部位を装飾するのかという機能を重視して分類をおこなう³⁾。そして、装着部位が同じ装身具については、ビーズの形状は考慮せず、装身具自体の形態によってさらに分類をする。また、中王国時代には、「下エジプト王様式の衣装(“Lower Egyptian Costume”）」と呼ばれる一連の装身具・アミュレットが存在する。これは、

表2 本論における中王国時代の墓から出土した装身具の分類
Pl.2 Classification of jewelry found from tombs

装着部位	分類	説明
A. 頭	A1: 環状頭飾り	冠としてつける環状のもの
	A2: 髪飾り	ビーズの形態をしており、髪あるいは鬢に通して使う
B. 首・胸	B1: 襟飾り	非常に幅の広い首飾りで、半円形ターミナル付きとハヤブサ頭形ターミナル付きのものがある。金属製で、ビーズの形が模様として表現されているタイプもある。
	B2: 襟飾り用重り	襟飾りと同じ形状のターミナル、材質で製作された重り
	B3: 胸飾り (ペクトラル)	首飾りに付けられた大きなペンダント
	B4: 一連首飾り	同形状のビーズが秩序よく連なったタイプと、多様な形状のビーズがばらばらに連なったタイプがある。ペンダントと一緒に連なっているものもある。
	B5: 幅広首飾り (チョーカー)	ビーズ製で幅の広い(襟飾りよりは狭い)首飾り
	B6: トルク	金属製で輪の形状をしており、首に密着して着けられる
C. 腕	C1: 幅広・幅狭腕輪	ビーズの位置を固定するためにスペーサーが用いられた幅の広いタイプ(幅広腕輪)と、管状ビーズを連ねることである程度の幅を持たせたタイプ(幅狭腕輪)がある
	C2: 一連腕輪	同形状のビーズが秩序よく連なったタイプと、多様な形状のビーズがばらばらに連なったタイプがある
	C3: 金属製腕輪	金属板を湾曲させたものとワイヤ状のものがある
D. 指	D1: スカラベ付き指輪	スカラベ形ビーズが用いられた指輪で、リングは金属製のものとして珉糸製のものがある
E. 腰	E1: ビーズ腰飾り	同形状のビーズが秩序よく連なったタイプと、多様な形状のビーズがばらばらに連なったタイプがある
F. 足	F1: 幅広・幅狭足輪	ビーズの位置を固定するためにスペーサーが用いられた幅の広いタイプ(幅広足輪)と、管状ビーズを連ねることである程度の幅を持たせたタイプ(幅狭足輪)がある
	F2: 一連足輪	同形状のビーズが連なった足輪で、ペンダントと一緒に連なっているものもある
G. 「下エジプト王様式の衣装」	G1: ビーズエプロン	幅の広いベルトからパピルス形や十字形、ユリ形などのビーズが複数本吊り下がったもの
	G2: ツバメ形ペンダント	ツバメの形をした赤色のペンダントで、腰に着けられる
	G3: 尻尾	動物の尾を模したもので、表面にビーズで装飾が施されている

「宮廷様式の埋葬 (“Court type burials”)⁴⁾と関係することが指摘されており (Grajetzki 2010: 92)、本論においても重要な位置を占める。そのため、機能を軸に分類する他の装身具とは別に、「下エジプト王様式の衣装」として分類することとする。

先述した160基の墓から出土した装身具を分類した結果、A1からG3までの18種類に中王国時代の装身具は分けられた。具体的な分類は、表2と図2に示した通りである。この分類に従って、装身具の種類別出土傾向を分析していく。

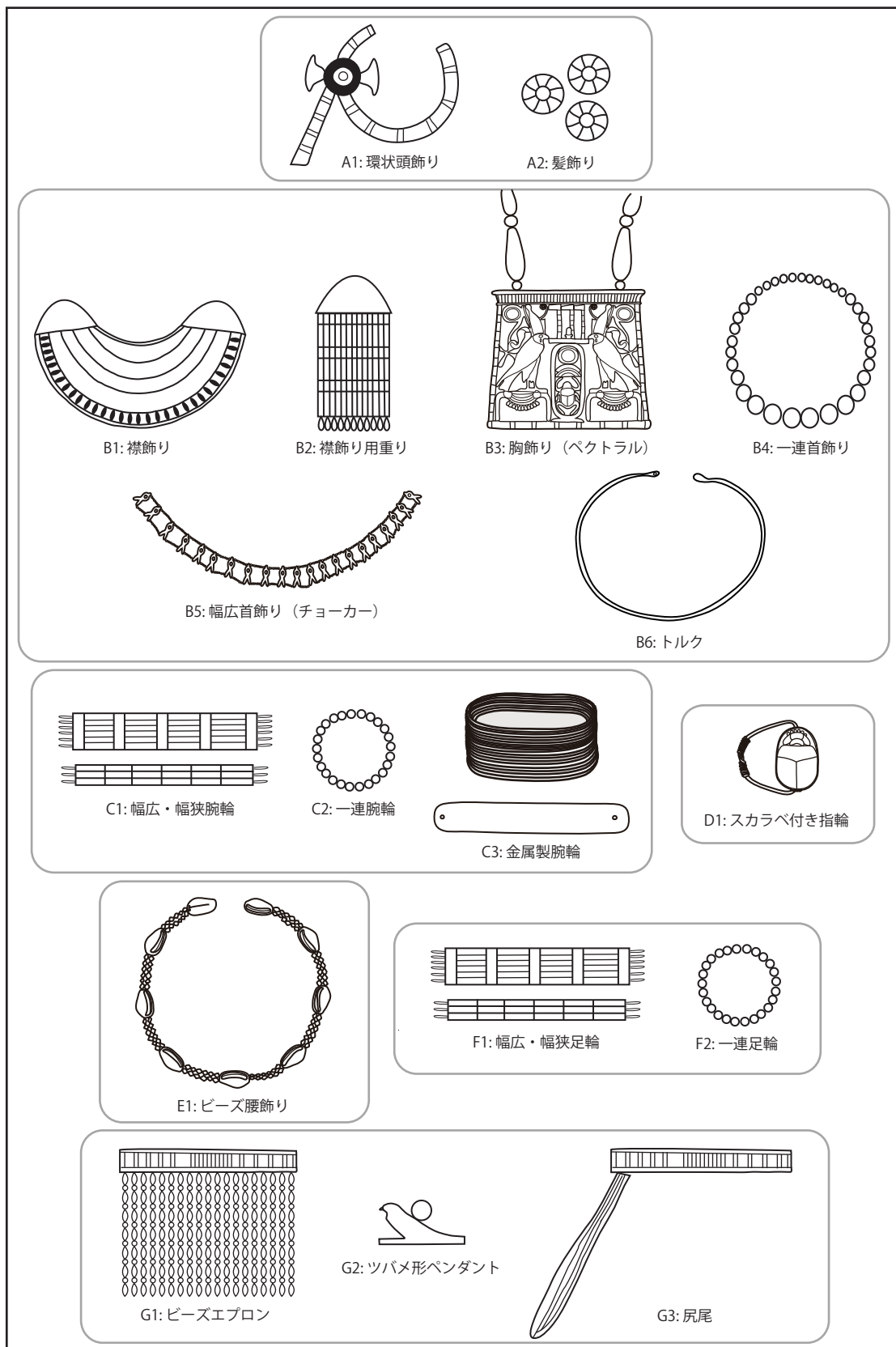


図2 分類した装身具の形状

Fig.2 Form of jewelry

5. 各地域における装身具の種類別出土傾向

(1) 主要な装身具について

■地域ごとの出土傾向

装身具の種類 (A1 ~ G3) 別出土傾向を分析した結果、B4. 一連首飾り (97 基)、B1. 襟飾り (66 基)、C2. 一連腕輪 (19 基)、C1. 幅広・幅狭腕輪 (16 基) の順に多くの墓から出土することが明らかとなった。ここでは、これらの特に多くの墓から出土した 4 種類の装身具について、地域別の出土傾向を示していく (図 3)。

<メンフィス・ファイユーム地域>

当該地域からは、襟飾りの出土墓数が最も多く、55 基が確認された。一連首飾りは、襟飾りに次いで多く、40 基から出土した。しかし、この分析結果は、各遺跡の発掘報告書の精度に左右されている可能性がある。なぜなら、メンフィス・ファイユーム地域の中でも、特にハラガ遺跡の発掘報告書には、出土したビーズの数量や出土位置が記されていない場合が非常に多く、一連首飾りを認識できていない可能性があるからだ。おそらくその影響もあって、遺跡別の出土傾向ではハラガ遺跡は著しく低い値を示している。そのため、実際はもっと多くの一連首飾りが副葬されていたと考えられる。そこで、一連首飾りにしばしば見られる、首の後ろ側が最も小さい球形ビーズで、前側に来るにつれて段々ビーズのサイズが大きくなるデザインに必要な「大きさの異なる球形ビーズ」が出土した墓も例外的に対象として、再度分析を試みた。その結果、出土墓数が増加し、襟飾りよりも出土墓数が多い (65 基) 結果となった。腕輪については、一連腕輪 (8 基) よりも幅広・幅狭腕輪の方が多くの墓から出土することが判明した (14 基)⁵⁾。幅広腕輪は、主に王族の墓から出土している。一方、幅狭腕輪は王族の墓からは確認されていない。

<中部エジプト地域>

メンフィス・ファイユーム地域と同じく、襟飾りの出土墓数が多かった (10 基)。続いて、一連首飾りが 8 基から確認された。ビーズ製腕輪の出土墓数は非常に少なく、一連腕輪が 1 基からのみ出土した。なお、本分析においては、幅広・幅狭腕輪の出土墓は確認されなかった⁶⁾。

<南部エジプト地域>

当該地域は、メンフィス・ファイユーム地域とは対照的な結果となった。つまり、最も出土墓数が多かったのは、一連首飾りで (49 基)、襟飾りの出土墓は中王国時代前半⁷⁾の 1 基だけなのである。さらに、腕輪についても、2 種類のうち、幅広・幅狭腕輪より一連腕輪の出土墓数が多い結果となった。したがって、一連首飾りと一連腕輪は、南部エジプト地域に特徴的な副葬品と言える。先述の通り、メンフィス・ファイユーム地域の一連首飾りは、再分析の結果、出土墓数が 65 基に増加した。これは、南部エジプト地域からの出土墓数よりも多い結果である。ただし、メンフィス・ファイユーム地域の対象遺跡数が多い点や、ハラガ遺跡など大規模な遺跡の存在から、当該地域は南部エジプト地域よりも、もともとの人口が多かったと推測できる。

なお、幅狭腕輪は、テーベのウアフ (Wah) の墓 (Roehrig 2003: 11-13) から出土しており、その形状はメンフィス・ファイユーム地域で出土したものと酷似している。また、彼の墓からは南部エジプト地域ではめずらしく、メンフィス・ファイユーム地域では 50 基以上の墓から出土する襟飾りが見つかっている。

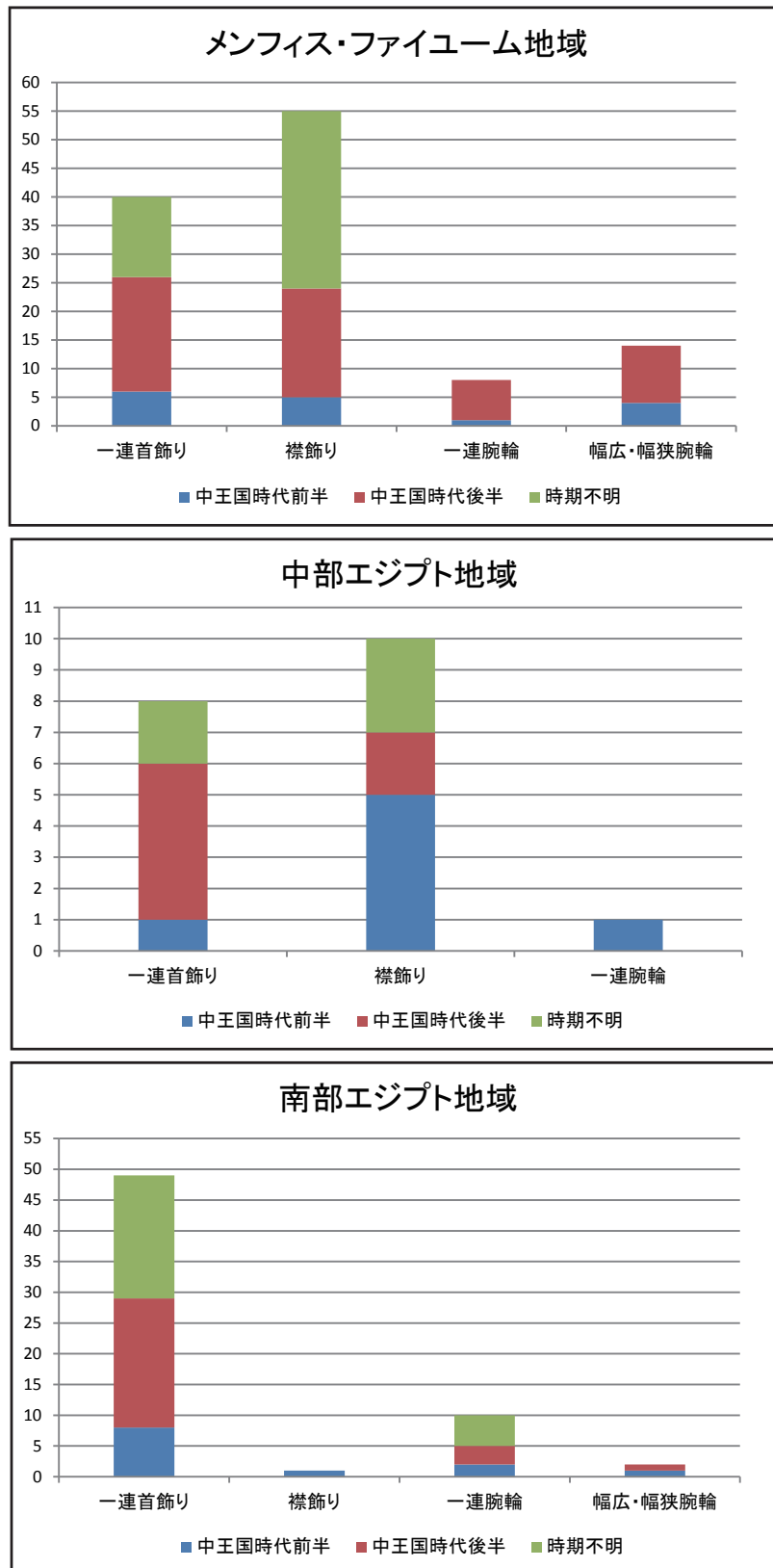


図3 主要な装身具の地域別出土墓数

Fig.3 Regional variation of jewelry in the Middle Kingdom

■素材について

ここまで、装身具の地域別出土傾向についての分析結果を提示した。これをふまえ、続いて主要な装身具の素材について述べる。

まず、一連首飾りに使われたビーズには、釉が施された石製あるいはファイアンス製が多用されているほか、準貴石製ビーズも頻繁に見られる。中でも、カーネリアンとアメジスト製が多く、他にもラピスラズリ、ガーネットが使われている。また、金、銀、琥珀銀製のビーズも見られる。王族以外も、上記のような価値の高い素材で製作された一連首飾りを所有しており、それは特にメンフィス・ファイユーム地域と南部エジプト地域において当てはまる。また、ペンダント付き一連首飾りに使われるペンダントは、金や銀を中心とした価値の高い素材で作られる傾向がある。この傾向は3地域いずれにも見て取れるが、全体的に高価な素材の副葬品が多いメンフィス・ファイユーム地域の王族を除けば、それは特に南部エジプト地域で顕著に見られる。

次に、襟飾りについては、メンフィス・ファイユーム地域に埋葬された王族のものは、ほとんどにカーネリアン、ターコイズ、ラピスラズリなどの準貴石や金が使われている一方、王族以外の墓に副葬されたものの多くは、釉が施された石製あるいはファイアンス製ビーズで製作されている。

一連腕輪には、やはり釉が施された石製あるいはファイアンス製ビーズが多く用いられているが、カーネリアンなど準貴石もしばしば見られる。また、メンフィス・ファイユーム地域の王女が埋葬された墓から出土する一連腕輪に使われたライオン形ビーズは金製である。

最後に、幅広・幅狭腕輪の素材は、その腕輪が幅広かそれとも幅狭であるのかで大きく二分される。というのも、王族の墓から出土する機会が多い幅広腕輪は、準貴石や金といった高価な素材で製作されている一方、幅狭腕輪のほとんどはファイアンス製なのである。



図4.「下エジプト王様式の衣装」を身にまとったセンウセレット1世のレリーフ (Patch 1995, fig.3)

Fig.4 Relief of Senwosret I wearing "Lower Egyptian Costume"

(2) 「下エジプト王様式の衣装」と殻笄ビーズの出土傾向

「下エジプト王様式の衣装」(図4)とは、ベルトおよびそのベルトから吊り下がるビーズエプロン⁸⁾、尻尾、垂れ布(hip drape)、ツバメ形ペンダントで構成される衣装のことである。古くはナルメル王のパレットに見られ、その後も主に王の衣装としてレリーフなどに表現された(Patch 1995)。また中王国時代には、王族以外も図像として「下エジプト王様式の衣装」をオブジェクト・フリーズ(frise d'objets)や人型木棺に描くことができた。さらに当該時期には、ビーズエプロンやツバメ形ペンダントが実際の遺物として、主に「宮廷様式の埋葬」から出土するようになる(Grajetzki 2014: 27, 28, 52, 67, 148; Grajetzki 2010: 93)。パッチ(Patch, D.C.)によると、「下エジプト王様式の衣装」は王とラー神とのつながりを強調する役割を担っており、ラー神の復活のシンボルとして身に着けられたということである(Patch 1995: 115-116)。

ここでは、改めて「下エジプト王様式の衣装」に属する装身具・アミュレットの出土傾向を分析する。また、「宮廷様式の埋葬」には、笏、棍棒、殻笄など王権の象徴が副葬されているが、殻笄には先端が平坦な円錐形ビーズが多数使われており、分析対象墓からも出土している。そこで、殻笄は本来装身具やアミュレットではないが、「宮廷様式の埋葬」および「下エジプト王様式の衣装」と関係することから、殻笄ビーズの出土傾向も分析していく。

< 「下エジプト王様式の衣装」 >

まず、本分析において「下エジプト王様式の衣装」に属するものは、ビーズエプロン、ツバメ形ペンダント、尻尾が確認された。ビーズエプロンと尻尾が出土した墓は、それぞれ1基のみが中王国時代前半の墓で、その他は全て中王国時代後半の墓である。そして、ツバメ形ペンダントの出土墓に至っては、全てが中王国時代後半に年代づけられる(表3)。つまり、これらは中王国時代後半になって増加したと指摘することができる。

また、これら3種類の装身具およびアミュレットは、セットで副葬されているということが言える。なぜなら、表3に示したそれぞれの遺跡の墓は、全て同一の墓だからである。つまり、ビーズエプロンが出土したダハシュール遺跡の3基とツバメ形ペンダントが出土したダハシュール遺跡の3基は同一墓なのである。表にある他遺跡の墓についても同様である。

「下エジプト王様式の衣装」が出土した地域と被葬者の社会的地位に注目してみると、中王国時代前半は中部エジプト地域のいわゆる地方豪族の墓のみであったのに対して、中王国時代後半になると、メンフィス・ファイユーム地域の王族あるいは王族と深い関係にあったと思われる被葬者の墓に限定される。

表3 「下エジプト王様式の衣装」の出土傾向
Pl.3 Number of tombs which contain "Lower Egyptian Costume"

	遺跡名	時期	出土墓数
ビーズエプロン	ダハシュール	中王国後半	3
	リシエト	中王国後半	1
	ハラ	中王国後半	1
	デル・エル=ベルシヤ	中王国前半	1
ツバメ形ペンダント	ダハシュール	中王国後半	3
	リシエト	中王国後半	1
	ハラ	中王国後半	1
尻尾	リシエト	中王国後半	1
	ハラ	中王国後半	1
	デル・エル=ベルシヤ	中王国前半	1

＜殻竿ビーズ＞

完形の殻竿と殻竿ビーズの出土傾向を見ると、本分析では1基のみ中王国時代前半の墓で、他は大半が中王国時代後半の墓からの出土である（表4）。したがって、殻竿もおそらく中王国時代後半に増加したことが示唆される。

唯一中王国時代前半に年代づけられるデル・エル＝ベルシャ遺跡の墓と、中王国時代後半のリシェト、ハワラ遺跡の墓は、「下エジプト王様式の衣装」が出土した墓と同一である。さらに、ダハシュール遺跡の4基のうち2基からも「下エジプト王様式の衣装」に属する装身具が出土している。

殻竿が出土した地域を見てみると、「下エジプト王様式の衣装」と同じく、中王国時代前半は中部エジプト地域の墓のみであったのに対して、中王国時代後半になるとメンフィス・ファイユーム地域の墓からも出土するようになる。しかし、引き続き中部エジプト地域からの出土例も認められる。また、殻竿が副葬された被葬者の社会的地位は、王族が中心であるものの、「下エジプト王様式の衣装」とは異なり、ハラガ遺跡やマイル遺跡に埋葬された王族以外の墓からも多数出土している。

表4 殻竿・殻竿ビーズの出土傾向
Pl.4 Number of tombs which contain frail

	遺跡名	時期	出土墓数
殻竿	ダハシュール	中王国後半	4
	リシェト	中王国後半	1
	リッカ	センウセレット1世～センウセレット3世治世	1
	ハワラ	中王国後半	1
	ハラガ	中王国後半、センウセレット2世～アメンエムハト3世治世	9
	デル・エル＝ベルシャ	中王国前半	1
	マイル	中王国後半	1

6. 小結

ここでは、分析から明らかになったことをまとめ、若干の考察を加えたい。

まず、中王国時代に最も副葬品として利用された装身具は、出土墓数の多さから首飾りであることが分かった。そして、同じ首飾りでも、襟飾りと一連首飾りとは分布に違いが見られた。一連首飾りは、南部エジプト地域において主要な装身具であったのに対して、襟飾りは、圧倒的にメンフィス・ファイユーム地域における利用が多いのである。また、首飾りの次に多くの墓から出土するのは腕輪であった。そして、腕輪も種類によって分布に違いがあることが判明した。幅広・幅狭腕輪は、ほとんどがメンフィス・ファイユーム地域から出土する一方、一連腕輪は南部エジプト地域に多いのである。しかし、腕輪の出土墓数は、首飾りと比べると圧倒的に少ない。王女の墓からは、襟飾りと腕輪がセットで出土する場合が頻繁に見られるが、王族でない被葬者の墓からは、腕輪は副葬されず襟飾りのみが出土する例が見受けられる。未盗掘で発見された、テティピラミッド墓地の第129号墓（Firth and Gunn 1926: 60-61）などがこれに該当する。つまり、最重要視されたのは首飾りであり、社会的地位が高い者や副葬品の中でも装身具に重きを置いている者は、首飾りに加え腕輪を副葬したのだと考えられる。

続いて、「宮廷様式の埋葬」に副葬品として含まれる「下エジプト王様式の衣装」と殻竿は、中王国時代後半にメンフィス・ファイユーム地域を中心に出土するということであった。また、少数ではあるが、中部

エジプト地域からも出土している。いずれも、南部エジプト地域からの出土例はない。そして、「下エジプト王様式の衣装」は、いわゆる地方豪族など非常に社会的地位の高い被葬者に限定して出土するということがであった。特に中王国時代後半には、メンフィス・ファイユーム地域に埋葬された王族に限って副葬されるようになる⁹⁾。所有者が王族以外の人型木棺に、図像としてビーズエプロンが描かれた例はあるものの(図5)、中王国時代後半では、王族以外の墓から実物が出土した例は今までのところ確認されていない。以上から、「下エジプト王様式の衣装」に属する装身具の存在は、王族以外の人々にも知られていたが、実際の副葬品としては王族が占有していた可能性が考えられる。殻竿も、王族の墓から頻繁に出土するが、「下エジプト王様式の衣装」よりも副葬される社会階層は広い。たとえば、ハラガ遺跡では、多数の王族でない墓からの出土例が認められるのである(Engelbach 1923)。よって、同じく「宮廷様式の埋葬」をされた被葬者でも、王族であるか否かによってその副葬品の内容には違いがあると言える。



図5 ビーズエプロンが描かれた人型木棺 (Baba and Yoshimura 2010, p.11)
Fig.5 Anthropoid coffin painted apron

7. 装身具にみられる地域性の要因について

首飾りや腕輪といった主要な装身具は、その形状によって地理的分布が異なることが分かった。では、その違いは一体何に起因しているのだろうか。装身具の形状から考えると、一連首飾りや一連腕輪より襟飾りや幅広・幅狭腕輪の方が多量のビーズを使っており、高い製作技術も必要になると考えられる。しかし、素材に目を向けてみると、王族の墓から出土した襟飾りや幅広腕輪を除けば、金、銀、準貴石など高価な素材が使われている例は少ない。対して、南部エジプト地域特にアビュドス遺跡から出土する一連首飾りには、金や準貴石が頻繁に使われている。さらに、他の装身具にも金や銀、そして様々な準貴石が用いられているのである。つまり、アビュドス遺跡を中心とした南部エジプト地域に埋葬された被葬者は、決して経済力が理由で襟飾りや幅広・幅狭腕輪を副葬できなかった訳ではないと推測できる¹⁰⁾。彼らは、あえて一連首飾りや一連腕輪を副葬するという選択をしたのではないだろうか。しかも、それらを高価な素材で製作することに重点を置いていたと考えられる。以上より、副葬される装身具には、襟飾りと幅広・幅狭腕輪を重視する「メンフィス・ファイユーム地域様式」と、一連首飾り・一連腕輪を重視する特にアビュドス遺跡を中心とした「南部エジプト地域様式」のような、地域による副葬品選択のあり方が存在した可能性が指摘できる。そして、このような埋葬習慣の違いは、地域によって異なる価値観や埋葬における理想に根差していると考えられる。なお、中部エジプト地域については、副葬品の選択に関しても他2地域の間中に位置しているように思われるが、襟飾りが分析対象墓の半分以上から出土していることより、メンフィス・ファイユーム地域の影響を強く受けていた様子がうかがえる。

「下エジプト王様式の衣装」と殻竿は、主に中王国時代後半において、メンフィス・ファイユーム地域を

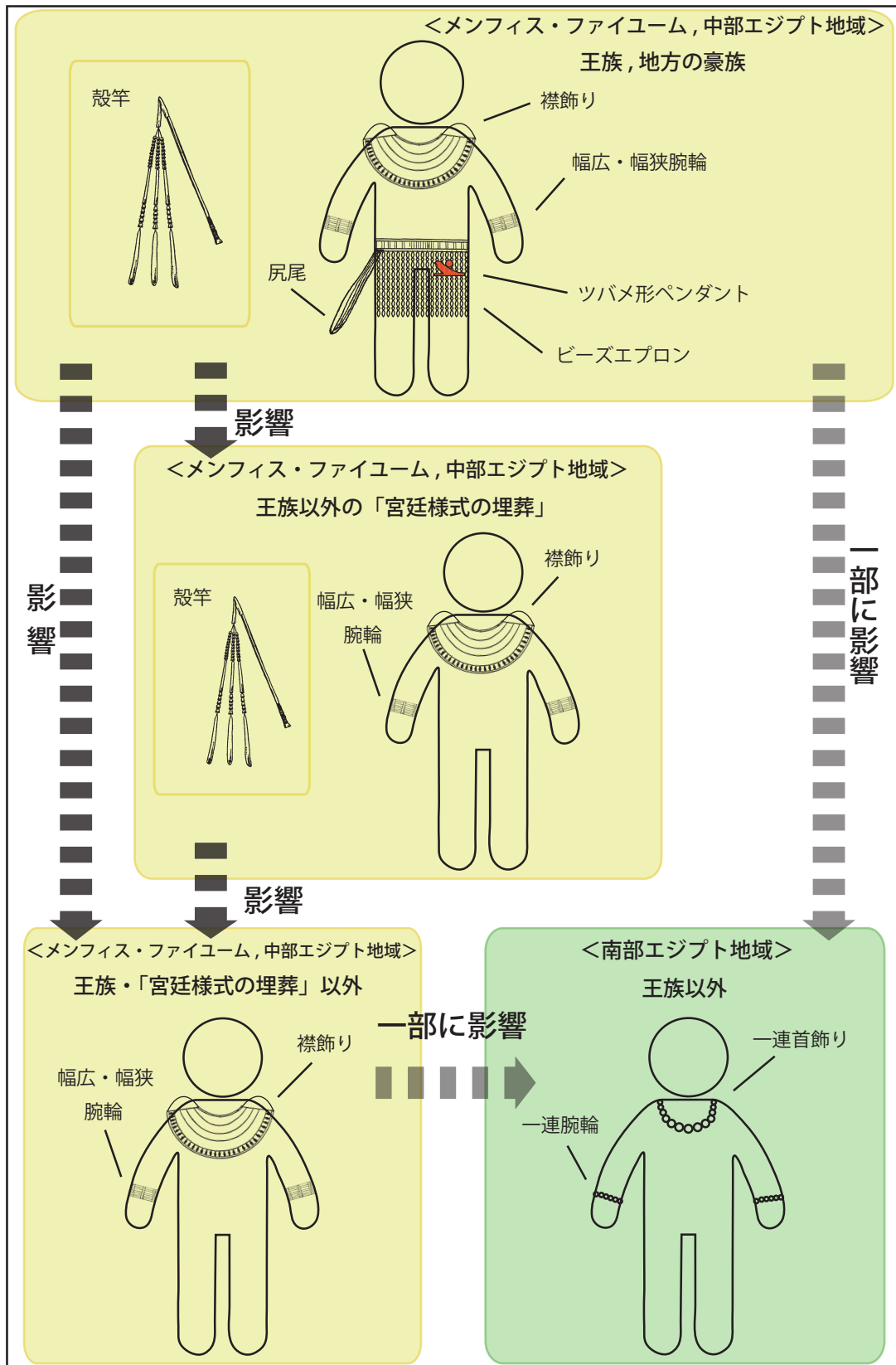


図6 装身具にみられる地域・社会階層による違い
(一部に Mace and Winlock 1916, fig.75、Lacau 1906, figs.95, 408, 430, 425 を引用して作成)
Fig.6 Variation of funerary jewelry in each region and social level

中心に出土するということであった。これには、王族の埋葬地が大きく関係していると考えられる。いずれも本来は王権の象徴であるため、王族の墓を中心に出土するのは当然であろう。それゆえ、伝統的に王族の墓が造営されたメンフィス・ファイユーム地域から集中して出土したと言える。そして、その影響を受けた王族以外の被葬者が王族を真似て副葬品を選択したため、さらに当該地域から「宮廷様式の埋葬」に含まれる副葬品の出土が増加したと考えられるのである。「下エジプト王様式の衣装」は、王族以外に実物として真似されることはなかったようだが、人型木棺に描かれた例は、やはりメンフィス・ファイユーム地域に該当するダハシュール遺跡で確認されている (Baba and Yoshimura 2010)。

先述の襟飾りと幅広腕輪も、王族の墓から主要な装身具として出土している。そのため、本来は「下エジプト王様式の衣装」のように、王族の衣装の一部であった可能性が考えられる。そして、やはりその影響で、王族以外の人々もそれらの装身具を副葬品として利用するようになったのではないだろうか。つまり、「メンフィス・ファイユーム地域様式の装身具」は、「王族の衣装に属する装身具」と言い換えることが出来よう。メンフィス・ファイユーム地域の人々は、王族の埋葬を理想として副葬品の選択をしたということである。一方、アビュドス遺跡を中心とする南部エジプト地域の人々は、王族の埋葬以外のところに理想を求めたため、副葬品において、メンフィス・ファイユーム地域の人々とは異なる選択をおこなったのだと考えられる。しかし、南部エジプト地域の中で、テーベからは「メンフィス・ファイユーム地域様式」の装身具が副葬された墓が数基確認されている。これは、中王国時代がテーベを拠点として始まり、王族が中王国時代初期にはテーベに埋葬されたことの影響が指摘できる。中王国時代後半においても、宮廷と何らかの関係があったと思われるテーベに埋葬された被葬者は、その影響を受け続けたと考えられる。

以上、装身具にみられる地域性の要因として、各地域が持つ埋葬における理想の違いを指摘した。まず、メンフィス・ファイユーム地域では、王族の埋葬を理想とし、副葬品を選択していた様子がうかがえた。中部エジプト地域についても、メンフィス・ファイユーム地域に似た副葬品の選択をおこなっていたということであった。一方、南部エジプト地域では一部の被葬者を除いて、王権の象徴といった装身具の形状よりも、高価な素材で一連首飾りや腕輪を製作することが理想とされた可能性を指摘した。

8. おわりに

装身具の種類ごとの分布状況を辿る中で、地域や社会階層によって、副葬する装身具が異なることが分かった。特に、メンフィス・ファイユーム地域と南部エジプト地域との間では、副葬される主要な装身具に大きな違いがみられた。そして、その要因として、副葬品における理想自体が異なっていた可能性を指摘した。メンフィス・ファイユーム地域の人々は、おそらく王族の埋葬を理想として、副葬品を選択していたのであろう。これまであまり注目されなかった装身具から、中王国時代の埋葬習慣について論じた点で、本論は当該時期の研究において有益であったと思われる。

しかし、本研究にはいくつかの課題点もある。まずそれは、被葬者の性別に関する考察をほとんどおこなっていない点である。装身具は男女両方の墓から出土するものの、性別によって出土する装身具の種類や素材に違いが見られる可能性がある。そのため、今後は被葬者の性別に注目して分析・考察をおこない、当時の埋葬習慣についてより細部まで明らかにする必要がある。次に、中部エジプト地域の資料が著しく少ない点も課題として挙げられる。中部エジプト地域は、中王国時代における社会の変化を知る上で、非常に重要な位置を占める。しかし、本論では資料数が少なかつたため、十分な分析や考察ができなかつた。今後は資料収集を進め、当該地域についての研究を深めることが必要である。以上2点が本論において特に大きな課題である。

本論の成果と課題をふまえ、最後に今後の展望について述べたい。今回は、中王国時代の装身具のみを対象としたが、装身具はどの時代においても一般的な副葬品であり、中王国時代以前・以降の墓からも出土する。本来、埋葬習慣を含めた文化は、時代ごとで明確に分かれるわけではなく、それまでの伝統を引き継ぎながら変化していくものである。したがって、連続する時代に目を向けることは、より深い対象時代への理解につながる。そのため、今後は古王国時代や新王国時代の装身具にも研究の幅を広げていきたい。さらに、装身具だけでなく、その他副葬品、墓の構造、棺の様式など、より広範囲な視点から検証を加えることで、中王国時代の埋葬習慣についてより深く理解できると考える。

謝辞

本稿は、2014年度に早稲田大学文学部考古学コースに提出した卒業論文の一部を核として大幅に書き直したものである。卒業論文の執筆時より、指導教授の近藤二郎先生にご教示を賜った。そして、早稲田大学文化構想学部助教の馬場匡浩先生、早稲田大学エジプト学研究所の矢澤健氏には、構想の段階からお世話になり、原稿を読んでいただいた上で数々のご指摘も賜った。また、早稲田大学大学院博士後期課程の竹野内恵太氏には、特に分析方法について多数の有益なアドバイスを賜った。ここに心より感謝を申し上げたい。

註

- 1) この地域区分は、ボリオ (Bourriau, J.) によるもの (Bourriau 1991: 5) を採用している。また、リファ遺跡は、ボリオの言う中部エジプトの南端アシュートに近いため、中部エジプト地域に区分した。
- 2) これら 160 基以外に、装身具が副葬された墓として 193 基が確認された。しかし、いずれも装身具の形態は不明であったため、本論の分析対象には含めていない。
- 3) 古代エジプトの装身具は、身体の装飾以外に呪術的機能を持っているものが多い。たとえば、襟飾りはミイラの保護において特別な力を与えるとされ、「死者の書」の中でも、ミイラに襟飾りを着けるように指示がされている (Andrews 1984: 38)。また、ビーズ腰飾りには、特に子安貝形ビーズを連ねたものが多く見られるが、これは女性を護る役割を担っていたことが指摘されている (Andrews 1990: 173)。
- 4) 「宮廷様式の埋葬」とは、ダハシュール、リシエト、ハワラ遺跡において未盗掘で見つかった王家の女性に代表される埋葬の形態を指す (Grajetzki 2010: 92)。グライエツキーによると、そこにはいくつかの共通するパターンが見出せる。まず、被葬者は複数の棺に埋葬され、しばしば内棺には人型木棺が用いられる。そして、副葬品は王家の象徴が中心であり、笏、棍棒、杖、穀竿、短剣、弓、矢などが含まれる。さらに、「宮廷様式の埋葬」をされた被葬者の中には、上述の副葬品に加えてビーズエプロンや聖水を入れるための石製容器などが副葬されている例も見られる。また、ミニアッチ (Miniaci, G.) は、王族以外の墓にも「宮廷様式の埋葬」が見られることを指摘し、「Court type burials」ではなく「オシリス神化 (“Osirification”）」の埋葬と言う方がよりふさわしいと述べている (Miniaci 2011: 2)。
- 5) ただし、一連首飾りと同様で、一連腕輪も墓の残存状況や発掘報告書の精度によって、差が生れてしまうという点に留意する必要がある。
- 6) ただし、ベニ・ハサンからは “bar-beads” と説明されたビーズが出土しており、これがスパーサービーズだとすれば、幅広腕輪が副葬されていた可能性がある。
- 7) 中王国時代のうち、センウセレト 3 世治世以前を中王国時代前半、以降を中王国時代後半とする。この時期区分は広く使用されており、センウセレト 3 世の治世を画期に、副葬品など物質文化に変化がみられることが指摘されている (Grajetzki 2003, 2006, 2014; Bourriau 1991)。
- 8) これ以降はビーズエプロンと呼称する。
- 9) リシエト遺跡のセネプティシの墓は、被葬者が王族であるかは定かではない。しかし、社会階層が非常に高かったことは明確である (Grajetzki 2014: 34-35)。
- 10) アビュドスでは、高価な素材で製作された副葬品が幅広い社会階層の墓から出土しており、厳しい行政の支配を受けずに、自由な経済活動を行うことが出来た人々の存在をリチャーズ (Richards, J.) は指摘している (Richards 2005: 176)。このことから、やはり彼らは経済力が理由で襟飾りや幅広・幅狭腕輪を副葬できなかった訳ではないと言える。

参考文献

- Aldred, C.
1971 *Jewels of the Pharaohs*, London.
- Andrews, C.
1984 *Egyptian Mummies*, London.
1990 *Ancient Egyptian Jewellery*, London
1994 *Amulets of Ancient Egypt*, London.
- Arnold, D.
1992 *The Pyramid Complex of Senwosret I: The South Cemeteries of Lisht, III*, New York.
- Baba, M. and S. Yoshimura
2010 "Dahshur North : Intact Middle and New Kingdom Coffins", *Egyptian Archaeology* 37 (Autumn), pp. 9-12.
2011 "Ritual Activities in Middle Kingdom Egypt: A View from Intact Tombs Discovered at dahshur North", in Bárta, M., Coppens, F. and Krejčí, J. (eds.) *Abusir and Saqqara in the Year 2010/1*, pp.158-170.
- Bourriau, J.
1991 "Patterns of Change in Burial Customs During the Middle Kingdom", in Quirke, S. (ed.), *Middle Kingdom Studies*, New Malden, pp.3-20.
- Brunton, G.
1920 *Lahun I: The Treasure*, London.
1927 *Qau and Badari I*, London.
- D'Auria, S., P. Lacovara and C.H. Roehrig
1988 *Mummies and Magic: the Funerary Arts of Ancient Egypt*, Boston.
- Eaton, E.S.
1941 "A Group of Middle Kingdom Jewellery", *Bulletin of the Museum of Fine Arts* 39, no.236, pp.94-98.
- Engelbach, R.
1915 *Riqqeh and Memphis VI*, London.
1923 *Harageh*, London.
- Farag, N., Z. Iskander
1971 *The Discovery of Neferuptah*, Cairo.
- Firth, C.M. and B. Gunn
1926 *Teti Pyramid Cemeteries*, Cairo.
- Frankfort, H.
1930 "The Cemeteries of Abydos: Work of the Season 1925-26.", *Journal of Egyptian Archaeology* 16, pp. 213-19.
- Garstang, J.
1902 *El-Arabah, a Cemetery of the Middle Kingdom: Survey of the Old Kingdom Temenos: Graffiti from the Temple of Sety*, London.
1907 *Burial Customs of Ancient Egypt: As Illustrated by Tombs of the Middle Kingdom, A Report of Excavations made in the Necropolis of Beni Hassan during 1902-3-4*, London.
- Grajetzki, W.
2003 *Burial Customs in Ancient Egypt: Life in Death for Rich and Poor*, London.
2005 *Sedment: Burials of Egyptian Farmers and Noblemen over Centuries*, London.
2006 *The Middle Kingdom of Ancient Egypt*, London.
2010 *The Coffin of Zemathor and Other Rectangular Coffins of the Late Middle Kingdom and second Intermediate period*, London.
2014 *Tomb Treasures of the Middle Kingdom: The Archaeology of Female Burials*, Philadelphia.
- Hayes, W.C.
1953 *The Scepter of Egypt I: From the Earliest Times to the End of the Middle Kingdom*, New York.
- Kamal, A.B.
1901 "Report sur les fouilles exécutées à Deïe-el-Bershé." *ASAE* 2, pp. 206-22.
- Lacau, P.
1906 *Sarcophages antérieurs au Nouvel Empire vol.II*, Cairo.
- Lansing, A. and W.C. Hayes
1934 "The Egyptian Expedition: The Excavations at Lisht", *The Metropolitan Museum of Art Bulletin*, Vol. 29, No. 11, Part 2: *The Egyptian Expedition 1933-1934*, pp. 4-41.

- Mace, A.C. and H.E. Winlock
1916 *The Tomb of Senebtisi at Lisht*, New York.
- Miniaci, G.
2011 *Rishi Coffins and the Funerary Culture of Second Intermediate Period Egypt*, London.
- de Morgan, J.
1895 *Fouilles a Dahchour, Mars-Juin 1894*, Vienna.
1903 *Fouilles a Dahchour 1895*, Vienna.
- Patch, D.C.
1995 “A “Lower Egyptian” Costume: Its Origin, Development, and Meaning”, *Journal of the American Research Center in Egypt* 32, pp.93-116.
- Peet, T.E.
1914 *Cemeteries of Abydos Part II.1911-1912*, London.
- Peet, T.E. and W.L.S.Loat,
1914 *Cemeteries of Abydos Part III.1912-1913*, London.
- Petrie, W.M.F.
1901 *Diopolis Parva: The Cemeteries of Abadiyeh and Hu, 1898-9*, London.
1907 *Gizeh and Rifeh*, London.
1914 *Amulets*, London.
- Petrie, F., G.Brunton and M.A.Murray
1923 *Lahun II*, London.
- Richards, J.
2005 *Society and Death in Ancient Egypt: Mortuary Landscapes of the Middle Kingdom*, Cambridge.
- Roehrig, C.
2003 “The Middle Kingdom Tomb of Wah at Thebes”, in Strudwick, N. and J.H.Taylor (eds.), *The Theban Necropolis: Past, Present and Future*, London, pp.11-13.
- Wegner, J.
2010 “Tradition and Innovation: The Middle Kingdom”, in Wendrich, W. (ed.), *Egyptian Archaeology*, West Sussex, pp.119-142.
- Winlock, H.E.
1934 *The Treasure of El Lahun*, New York.
- メトロポリタン美術館ホームページ <http://www.metmuseum.org/>

本論の分析で用いた墓のリストを下に載せる（表5）。色・素材、個数の表記方法は以下の通りである。

色 : bl: blue/ bla: black/ bro: brown/ gr: green/ gre: grey/ pi: pink/ re: red/ wh: white/ ye: yellow

素材 : ag: agate/ al: alabaster/ am: amethyst/ ba: basalt/ be: beryl/ bo: bone/ br: bronze/ bre: breccia/ ca: carnelian/ ch: chert/ cl: clay/ co: copper/ cr: crystal/ di: diorite/ el: electrum/ Eg.bl: Egyptian blue/ eg: egg/ em: emerald/ fa: faience/ fe: feldspar/ fl: flint/ ga: garnet/ gl: glazed (gl.st.: glazed steatite)/ gla: glass/ gi: gilt (gi.co: gilt copper), (gi.wo: gilt wood)/ go: gold (gold foil を含む)/ gra: granite/ he: hematite/ hi.tu: hippopotamus tusk/ iv: ivory/ ja: jasper/ la: lapis lazuli/ li: limestone/ linen: linen/ ma: marble/ me: metal/ mu: mud/ ob: obsidian/ on: onyx/ po: pottery/ por: porphyry/ qu: quartz/ se: serpentine/ semiprecious stones: semiprecious stones/ sh: shell/ si: silver/ sl: slate/ st: steatite (bl.gl.st: blue glazed steatite)/ steaschist: steaschist/ sto: stone/ tu: turquoise/ wo: wood

表記例 : 遺物名称+点数+ (色, 素材) 例1. 襟飾り 1(bl.fa) (=「青色ファイアンス製襟飾りが1点出土」)、例2. ハヤブサ形ペンダント 2(go) (si) (=「ハヤブサ形ペンダントが2点出土。うち1点は金製、もう1点は銀製」)

表 5-1 分析対象墓リスト
PL1-1 List of tombs

出土地・被葬者	時代	出土した装身具	参考文献
サッカラ ティピラミッド墓地 HMK6墓	中王国前半	髪飾り(fa, si, sto), 襟飾り 1(fa), 球形ビーズ首飾り 2(ef) (ca, go, gr, fa), 多様な形のビーズ首飾り(ca, gl, st), 管状ビーズ腕輪(gr, fa), 小ビーズ腕輪(ca, la), 管状ビーズ足輪(gl)	Firth and Gunn 1926
サッカラ ティピラミッド墓地 HMK26墓、木棺・Ipi'nhw	中王国前半	襟飾り 2(gi, wo, gr, st), セウエレットビーズ 1(ca), bs形ペンダント 1(gi, wo), 幅広腕輪(bl, fa) 2, 金属製腕輪(co, gi, co) 2, 幅狭足輪 2(bl, fa)	Firth and Gunn 1926
サッカラ ティピラミッド墓地 HMK30墓・Gemmehat	中王国前半 (アメンエムハト1世治世)	襟飾り 1(ca, gi, wo, gr, st), セウエレットビーズ 1(ca), 球形ビーズ首飾り 1(gi, wo), 管状・樽形ビーズ首飾り 1(ca, gr, st), bs形ペンダント 1(gi, wo), 幅狭腕輪(gr, st) 4	Firth and Gunn 1926
サッカラ ティピラミッド墓地 HMK69墓・Iphersesenbef	中王国前半	襟飾り 1(bl, fa, bla, fa), bs形ペンダント 1(gi, wo), 幅狭腕輪 2(bl, fa, bla, fa)	Firth and Gunn 1926
サッカラ ティピラミッド墓地 41墓・Hetepet (htpt)	中王国後半	貝形ペンダント(go) (si), 球形ビーズ首飾り 3(am) (ca) (go), 球形ビーズとライオン形ビーズ腕輪 1 or 2(go, gr, fe, la), 子安貝形ビーズ腰飾り (si)	Firth and Gunn 1926
サッカラ ティピラミッド墓地 129B墓	中王国後半	襟飾り 1(bla, sto, fa, go)	Firth and Gunn 1926
サッカラ ティピラミッド墓地 129C墓	中王国後半	襟飾り 1(gl)	Firth and Gunn 1926
サッカラ ティピラミッド墓地 206墓	中王国後半	貝形ペンダント首飾り(go), hnt形ビーズ首飾り, 樽形・小ビーズ首飾り (ca, go)	Firth and Gunn 1926
サッカラ ティピラミッド墓地 30墓	中王国後半?	球形ビーズ首飾り 1(go), セウエレットビーズ 1(ca)	Firth and Gunn 1926
サッカラ ティピラミッド墓地 118墓	中王国後半?	襟飾り 1(bl, fa, gr, fa), 球形ビーズ首飾り 2(go) (si), 幅狭足輪(fa)	Firth and Gunn 1926
ダハシュール北 シャフト 54	中王国後半(第12王朝末~第13王朝)	ビーズ腕輪 1(fa), スカラベ付き指輪 1(fa)	Baba and Yoshimura 2011
ダハシュール アメンエムハト2世ピラミッド複合体・Ita(王女)	中王国後半(アメンエムハト3世治世)	襟飾り 1(ターミナル: si, ビーズ: ca, la, tu, na)など, 幅広腕輪 2(go), 金属製腕輪 2(go), ビーズ腕輪 2, ビーズ腰飾り (ca, gr, gl), ツバメ形ペンダント(ca), ビーズエブロン	de Morgan 1903
ダハシュール アメンエムハト2世ピラミッド複合体・Khenmet(王女)	中王国後半(アメンエムハト3世治世)	環状頭飾り 2(ca, go, la, tu) (ca, go, la, ob, tu), 襟飾り 1(go, la), 幅広首飾り, 3w ib形ペンダント 1, s'nh bs nb形ペンダント 2, ms形ペンダント 1, sn形ペンダント 2(ca, em, la), ロータス付きsn形ペンダント 1, 外国製ペンダント付き首飾り複数(ga, go), 幅広腕輪 2(ca, em, la), 金属製腕輪 複数(go), 腕輪用留め金 8(go), ビーズ腕輪, 一連足輪に付かき爪形ペンダント 2(かき爪: ca, go, la)	de Morgan 1903
ダハシュール アメンエムハト3世ピラミッド複合体・Itweret(王女)	中王国後半(アメンエムハト3世治世)	ビーズ頭飾り(環状?), 襟飾り 1, 襟飾り用重り 1, 幅広腕輪(ca, go, bl), 幅広足輪(ca, go, bl)	de Morgan 1903
ダハシュール センウセレット3世ピラミッド複合体・Sathathor(王女)	中王国後半(アメンエムハト3世治世)	胸飾り(ベクトラル) 1(ca, go, la, tu), ntr, ib, htp形ペンダント, パピルス・ハトホル形ペンダント, 護符ケースに類似したペンダント 2(内1つはgo), 幅広腕輪 2(ca, go, la, tu), 金属製腕輪 2(go), スカラベ付き指輪(スカラベ: am, ring: go), 子安貝形ビーズ腰飾り 1(go), 貝形ビーズ腰飾り 1(go), 結び目形ビーズ腰飾り 1(go), 足輪に付かき爪形ペンダント 2(go)	de Morgan 1895
ダハシュール センウセレット3世ピラミッド複合体・Mereret(王女)	中王国後半(センウセレット3世~アメンエムハト3世治世)	胸飾り(ベクトラル) 2, 貝形ペンダント(go), 象嵌された貝形ペンダント 2(ca, go, la, tu), 貝形ペンダント・小ビーズ首飾り 1(貝形: go 26個, 小: go), sn形ペンダント 1(ca, go), 3w ib形ペンダント 3(ca, go), ntr ib htp形ペンダント 1(ca, goなど), s'nh nb形ペンダント 1(goなど), 金で縁取られた複数ペンダント付き首飾り(go), 管状ビーズ首飾り, 幅広腕輪用留め金 2, 金属製腕輪 2(go), 腕輪 2, 腕輪に付くライオン形ビーズ 4, 結び目形留め金 12(go), スカラベ付き指輪(ring: go), 外国製指輪 2(go), 子安貝形ビーズ腰飾り(go), doubleヒョウ頭形ビーズ腰飾り 1(go), 足輪に付かき爪形ペンダント 2(go)	de Morgan 1895
ダハシュール アメンエムハト3世ピラミッド複合体・Nubhetepi(王女)	中王国後半(第13王朝初期)	環状頭飾り 1(re, sto, si), 襟飾り 1, 襟飾り用重り 1, 幅広腕輪 2(ca, go), 幅広足輪 2(gr, fe, go), ツバメ形ペンダント 1(ca), ビーズエブロン	de Morgan 1895
ダハシュール アメンエムハト3世ピラミッド複合体・3w ib r' hr(王)	中王国後半(第13王朝初期)	環状頭飾りに付いていたとされる花形象嵌(gi, wo), 襟飾り 2(ca) (go, wo), 襟飾り用重り 1(go, wo), ビーズ首飾り, 幅広腕輪(gi, woなど), 幅広足輪(gi, woなど), ツバメ形ビーズ, ビーズエブロン	de Morgan 1895
リシエト センウセレット1世ピラミッド複合体 シャフト7/12・Ankhty	中王国前半(センウセレット1世)	ビーズ首飾り (bl, gl, ca, wh, gl)	Arnold 1992
リシエト南 mastaba west of Senwosretankh, Pit 3・Hepty	中王国前半(センウセレット1世)	大ききの異なる樽形ビーズ首飾り 1(la), 球形ビーズ首飾り 1(go, ca), アカシアの種形ビーズ首飾り 1(go), 幅広腕輪 1?(go, la), 子安貝形ビーズ腰飾り 1(貝: go, 小樽: la), 幅広足輪 1(go, ?)	Lansing and Hayes 1934
リシエト センウセレット1世ピラミッド複合体 5004墓・おそらく Minhotep	中王国後半(第13王朝初期)	いくつかの円盤形ビーズ(ca) (gr, bl, gl) (gi, sh)	Arnold 1992
リシエト セネブティシの墓・Senebtisi	中王国後半(第12王朝~第13王朝初期)	環状頭飾り 1(go), 髪飾り 98(go), セウエレットビーズ 1(ca), 貝形ペンダント・小ビーズ首飾り 1(貝形: go 25個, 小: ca, fa, go, tu), 幅広首飾り 1(s形: ca, fe, iv, si, tu 21個, 小円盤: tu), sn形ペンダント・bs形ビーズ首飾り 1(sn形: ca, go 1個, bs形: ca, fa, go, tu 約64個), 首飾り用留め金(go), 襟飾り 3(co, go) (ca, fa, go, tu) (fa, go, tu), 幅広腕輪 2(gr, fa, go), アカシアのさや形・小ビーズ腰飾り 1(ca, go, la, おそらく iv, tu), 幅広足輪 2(gr, fa, go), ビーズエブロン 1(bl, fa, bla, fa, light gr, fa, dark gr, fa), 尻尾 1(fa, go, wa,), ツバメ形ペンダント 1(ca)	Mace and Winlock 1916
リシエト センウセレット1世ピラミッド複合体 7/26墓	中王国(第12王朝?)	襟飾り (gr, fa, wh, fa)	Arnold 1992
リシエト センウセレット1世ピラミッド複合体 19/41 [pit 207]墓	中王国(第12王朝?)	襟飾り用ビーズ 4(bl, fa)	Arnold 1992
リシエト センウセレット1世ピラミッド複合体 シャフト19/41 [pit 207]	中王国(第12王朝?)	襟飾り (bl, gl, wh, gl, bla ビーズ), 幅狭足輪 2(bl, bla, ca)	Arnold 1992
リッカ Cemetery A 124墓	中王国後半	襟飾りを構成する大量の管状ビーズ, 胸飾り (ベクトラル), 貝形ペンダント (go), 2つのロタスがモチーフのペンダント	Engelbach 1915
リッカ Cemetery A 27墓	中王国(センウセレット1世~センウセレット3世)	セウエレットビーズ 1(ca)	Engelbach 1915
リッカ Cemetery A, 7墓	中王国(センウセレット1世~センウセレット3世)	球形ビーズ 12(2: am) (10: ca) おそらく首飾り	Engelbach 1915
リッカ Cemetery A, 9墓・Hotep	中王国(センウセレット1世~センウセレット3世)	円錐形ビーズ首飾り (bl, po)	Engelbach 1915
リッカ Cemetery A, 73墓	中王国(センウセレット1世~センウセレット3世)	貝形ペンダント (go)	Engelbach 1915
リッカ Cemetery A, 135墓	中王国(センウセレット1世~センウセレット3世)	セウエレットビーズ (ca)	Engelbach 1915
リッカ Cemetery A, 156墓	中王国(センウセレット1世~センウセレット3世)	ハヤブサ頭形ターミナル, 足輪(sh)	Engelbach 1915
リッカ Cemetery A, 189墓	中王国(センウセレット1世~センウセレット3世)	襟飾り用ビーズ	Engelbach 1915
リッカ Cemetery A, 192墓	中王国(センウセレット1世~センウセレット3世)	襟飾り用ビーズ	Engelbach 1915
リッカ Cemetery B, 210墓	中王国(センウセレット1世~センウセレット3世)	ビーズ首飾り (ca)	Engelbach 1915
リッカ Cemetery A, 516墓	中王国(センウセレット1世~センウセレット3世)	襟飾り用ビーズ (gl)	Engelbach 1915
リッカ Cemetery A, 518墓	中王国(センウセレット1世~センウセレット3世)	ハヤブサ頭形ターミナル (la)	Engelbach 1915
ハラワ ネフェルウプタハの墓・Nefertubah(王女)	中王国後半(第13王朝)	襟飾り 1(ca, gr, fe, go), 襟飾り用重り 1(ca, gr, fe, go), 樽形・管状ビーズ首飾り 2(樽: ca, gr, go), セウエレットビーズ 1(ca), 幅広腕輪 2(ca, go, fe), 幅広足輪 2(ca, go), ツバメ形ペンダント 1(ca), ビーズエブロン 1(bl, gl, go, gr, fa, wh), 尻尾	Farag and Iskander 1971
ハラガ Cemetery B, 284墓	中王国おそらく後半(第12王朝)	襟飾り用ビーズ(light bl, gl), 半円形ターミナル (gr, gl)	Engelbach 1923
ハラガ Cemetery B, 308墓・Semnu	中王国おそらく後半(第12王朝)	貝形ペンダント (go), おそらく護符ケース (co, go, qu)	Engelbach 1923
ハラガ Cemetery S, 311墓	中王国おそらく後半(第12王朝)	貝形ペンダント (go)	Engelbach 1923
ハラガ Cemetery S, 312墓	中王国後半(アメンエムハト3世治世あるいはそれ以降)	貝形ペンダント (go)	Engelbach 1923

表 5-2 分析対象墓リスト
Pl.5-2 List of tombs

出土地・被葬者	時代	出土した装身具	参考文献
ハラガ Cemetery B, 320 墓	中王国おそらく後半 (第12王朝)	襟飾り用ビーズ(light bl.gl) (gr. gl), 半円形ターミナル(bl.gl)	Engelbach 1923
ハラガ Cemetery B, 336 墓	中王国おそらく後半 (第12王朝)	貝形ペンダント(go)	Engelbach 1923
ハラガ Cemetery B, 339 墓	中王国おそらく後半 (第12王朝)	襟飾り用ビーズ(light bl.gl)	Engelbach 1923
ハラガ Cemetery B, 341 墓	中王国おそらく後半 (第12王朝)	襟飾り用ビーズ(light bl.gl), 円形ターミナル(bl.gl)	Engelbach 1923
ハラガ Cemetery B, 345 墓	中王国おそらく後半 (第12王朝)	小貝形ペンダント (go)	Engelbach 1923
ハラガ Cemetery B, 348 墓	中王国おそらく後半 (第12王朝)	半円形ターミナル(light bl.gl)	Engelbach 1923
ハラガ Cemetery B, 357 墓	中王国おそらく後半 (第12王朝)	襟飾り用ビーズ(light bl.gl), 半円形ターミナル(light bl.gl)	Engelbach 1923
ハラガ Cemetery B, 377 墓	中王国おそらく後半 (第12王朝)	襟飾り用ビーズ(bl.gl), 円形ターミナル(light bl.gl)	Engelbach 1923
ハラガ Cemetery B, 380 墓	中王国おそらく後半 (第12王朝)	襟飾り用ビーズ(gr.gl)	Engelbach 1923
ハラガ Cemetery S, 391 墓	中王国おそらく後半 (第12王朝)	貝形ペンダント(ca)	Engelbach 1923
ハラガ Cemetery S, 620 墓	中王国後半 (アメンエムハト3世治世あるいはそれ以降)	貝形ペンダント(light bl.gl)	Engelbach 1923
ハラガ Cemetery A, 124 墓・Iytenhab	中王国 (センウセレット2世あるいはそれ以降)	おそらく胸飾り (ペクトラル) 22(si), 銀製の枠がつけられたペンダント 11*(sh, si), 子安貝ビーズ腰飾り	Engelbach 1923
ハラガ Cemetery Wady1, 515 墓	中王国 (センウセレット2世～第2中間期)	貝形ペンダント(ca)	Engelbach 1923
ハラガ Cemetery Wady1, 520 墓	中王国 (センウセレット2世～第2中間期)	貝形ペンダント(sh)	Engelbach 1923
ハラガ Cemetery Wady1, 524 墓	中王国 (センウセレット2世～第2中間期)	貝形ペンダント(light bl.gl)	Engelbach 1923
ハラガ Cemetery Wady1, 534 墓	中王国 (センウセレット2世～第2中間期)	貝形ペンダント(go)	Engelbach 1923
ハラガ Cemetery A, 3 墓・Bastet Htep	中王国 (センウセレット2世～アメンエムハト3世)	襟飾り用ビーズ(gr.gl), 半円形ターミナル (gr. gl)	Engelbach 1923
ハラガ Cemetery A, 17 墓	中王国 (センウセレット2世～アメンエムハト3世)	襟飾り用ビーズ(gr.gl), セウエレットビーズ(ca)	Engelbach 1923
ハラガ Cemetery A, 58 墓	中王国 (センウセレット2世～アメンエムハト3世)	襟飾り用ビーズ(gr.gl)	Engelbach 1923
ハラガ Cemetery A, 59 墓	中王国 (センウセレット2世～アメンエムハト3世)	襟飾り用ビーズ	Engelbach 1923
ハラガ Cemetery A, 64 墓	中王国 (センウセレット2世～アメンエムハト3世)	襟飾り用ビーズ(gr.gl)	Engelbach 1923
ハラガ Cemetery A, 66 墓	中王国 (センウセレット2世～アメンエムハト3世)	襟飾り用ビーズ(gr.gl)	Engelbach 1923
ハラガ Cemetery A, 70 墓	中王国 (センウセレット2世～アメンエムハト3世)	襟飾り用ビーズ(gr.gl), 半円形ターミナル (light bl.gl)	Engelbach 1923
ハラガ Cemetery A, 72 墓	中王国 (センウセレット2世～アメンエムハト3世)	畝模様の装飾がされた樽形ビーズ (おそらく首飾り) (ca) (go) (la) (tu), 大きさの異なる球形ビーズ (おそらく首飾り) (am) (gr. fe) (la)	Engelbach 1923
ハラガ Cemetery A, 81 墓	中王国 (センウセレット2世～アメンエムハト3世)	襟飾り用ビーズ(light bl.gl)	Engelbach 1923
ハラガ Cemetery A, 90 墓	中王国 (センウセレット2世～アメンエムハト3世)	貝形ペンダント(ca) (gr. fe)	Engelbach 1923
ハラガ Cemetery A, 96 墓	中王国 (センウセレット2世～アメンエムハト3世)	ハヤブサ頭形ターミナル	Engelbach 1923
ハラガ Cemetery A, 104 墓	中王国 (センウセレット2世～アメンエムハト3世)	半円形ターミナル	Engelbach 1923
ハラガ Cemetery A, 109 墓	中王国 (センウセレット2世～アメンエムハト3世)	半円形ターミナル(light bl.gl)	Engelbach 1923
ハラガ Cemetery A, 110 墓	中王国 (センウセレット2世～アメンエムハト3世)	襟飾り用ビーズ, 貝形ペンダント (gr.gl)	Engelbach 1923
ハラガ Cemetery A, 118 墓	中王国 (センウセレット2世～アメンエムハト3世)	襟飾り用ビーズ(gr.gl), 半円形ターミナル 2 種類 (gr.gl)	Engelbach 1923

出土地・被葬者	時代	出土した装身具	参考文献
ハラガ Cemetery A, 133 墓・Renf Senb	中王国 (センウセレット2世～アメンエムハト3世)	襟飾り用ビーズ (gr.gl)	Engelbach 1923
ハラガ Cemetery A, 143 墓	中王国 (センウセレット2世～アメンエムハト3世)	襟飾り用ビーズ (gr.gl), 半円形ターミナル (gr.gl)	Engelbach 1923
ハラガ Cemetery A, 154 墓	中王国 (センウセレット2世～アメンエムハト3世)	球形ビーズ首飾り, 貝形ペンダント 複数 (go)	Engelbach 1923
ハラガ Cemetery A, 159 墓	中王国 (センウセレット2世～アメンエムハト3世)	半円形ターミナル(light bl.gl)	Engelbach 1923
ハラガ Cemetery A, 161 墓	中王国 (センウセレット2世～アメンエムハト3世)	襟飾り用ビーズ (gr.gl)	Engelbach 1923
ハラガ Cemetery F, 67 墓	中王国 (第12王朝)	襟飾り用ビーズ (gr.gl) (gr.gl), 半円形ターミナル(light bl.gl)	Engelbach 1923
ハラガ Cemetery -, 265 墓	中王国	襟飾り用ビーズ(bl.gl)	Engelbach 1923
ハラガ Cemetery NZ?, 322 墓	中王国 (第12王朝)	襟飾り用ビーズ (gr.gl)	Engelbach 1923
ハラガ Cemetery E, 600 墓	中王国	襟飾り用ビーズ (gr.gl)	Engelbach 1923
ハラガ Cemetery E, 605 墓	中王国	半円形ターミナル(light bl.gl)	Engelbach 1923
ハラガ Cemetery E, 614 墓	中王国	襟飾り用ビーズ (gr.gl), 半円形ターミナル (bl.gl)	Engelbach 1923
ラフン 8墓・Sathorurinet (王女)	中王国後半 (アメンエムハト3世治世)	環状頭飾り 1(ca, go, la), 胸飾り (ペクトラル) 2(ca, go, la, tu) (am, ca, gr. fa, go, la), 球形ビーズ 74(ca) (go) (fe) (la), sn形ペンダント 2(go, semiprecious stones), 3w ib形ペンダント 1(go, semiprecious stones), 8, *nh nb形ペンダント 1(go, semiprecious stones), ib ntr htp 形ペンダント 1(go, semiprecious stones), 幅広い腕輪 2(go, semiprecious stones), ライオン形・球形ビーズ腕輪 2(ライオン: go), スカラベ付き指輪 2(スカラベ: ca, go, la, リング: go), 子安貝形・アカシアのさや形ビーズ腰飾り 1(子安貝: go, アカシアのさや: ca, fe, go), double ヒョウ頭形ビーズ腰飾り 1(go), かぎ爪形ペンダント・球形ビーズ足輪 2(かぎ爪: go, 球形: am, go)	Brunton 1920; Petrie, Brunton and Murray 1923; Winlock 1934
セドメント 1512 墓	第1中間期または中王国初頭	襟飾り 1 (gr.gl, fa), 足輪 2	Grajczki 2005
ベニ・ハサン 575 墓・Khty-a	中王国前半 (模型あり)	襟飾り用の大量ビーズ	Garstang 1907
ベニ・ハサン 186 墓・Nefwa	中王国前半 (11王朝末～アメンエムハト1世治世)	襟飾り (bl, bla, gl)	Garstang 1907
ベニ・ハサン 269 墓・Zaay	中王国前半 (模型あり)	襟飾り用ペンダント (bl, gl)	Garstang 1907
ベニ・ハサン 720 墓	中王国前半 (模型あり)	ハヤブサ頭形ターミナル 2	Garstang 1907
ベニ・ハサン 487 墓・Seneb	中王国後半	球形ビーズ首飾り (ca) (ja), 護符ケースに類似したペンダント 3 (ca, gr. gl, bla, gl, go), 金属製腕輪 2 (si), スカラベ付き指輪 1 (リング: go)	Garstang 1907
ベニ・ハサン 761 墓	中王国後半	半円形ターミナル 2 (gl)	Garstang 1907
ベニ・ハサン 39 墓・rdt *nh	中王国 (前半?)	小ビーズ・ハヤブサ形ペンダント首飾り (小: bl, gl, gr. gl, ca, ハヤブサ: si 2個), 球形ビーズ首飾り (gr. gl)	Garstang 1907
ベニ・ハサン 65 墓・Senu-Atef, Red-Hetep, Meru	中王国 (前半?)	球形ビーズ首飾り 3 (am) (gr. fa) (gl)	Garstang 1907
ベニ・ハサン 73 墓	中王国 (前半?)	半円形ターミナル 2 (bl, gl), bar-beads (bl, gl), ビーズ (wo)	Garstang 1907
ベニ・ハサン 94 墓・Khenemu	中王国 (前半?)	半円形ターミナル 2 (bl, gl)	Garstang 1907
ベニ・ハサン 662 墓・hty	中王国 (前半?)	ハヤブサ頭形ターミナル 2 (gr. gl)	Garstang 1907
ベルシヤ Djehuty-nakht・Djehuty-nakht (dhwty-nht)	中王国前半 (おそらくアメンエムハト2世治世)	ビーズエブロン (ca, go), 尻尾	Kamal 1901
ベルシヤ tomb 10A・Djehuty-nakht	中王国前半 (第11王朝)	襟飾り 3 (bl, fa) (bla, fa, gr. fa) (bl, fa), 貝ビーズ首飾り (sh), ビーズ首飾り, ビーズ腕輪, 金属製腕輪 (go), ビーズ足輪	D'Auria, Lacovara and Roehrig 1988
メイル Tomb of Hapiankhifi	中王国 (第12王朝) おそらく後半	髪飾り (wo), 襟飾り 2 (bl, bla, gr. fa) (wo, gold leaf), セウエレットビーズ 1 (ca, fa), 球形ビーズ首飾り 2 (bl, fa) (ob, si), ペンダント付き首飾り 1 (ca, go, tu, am, ga, si)	http://www.mtmuseum.org/
リファ tomb of Khnum-hotep, (332)・Khnum-hotep	中王国後半	小ビーズ首飾り 1 (bl), スカラベ付きおそらく指輪 1	Petrie 1907

表 5-3 分析対象墓リスト
PL.5-1 List of tombs

出土地・被葬者	時代	出土した装身具	参考文献
リファ tomb of Khnum-hotep. (333)	中王国後半	スカラベ付き指輪 1、ビーズ 2(ca)	Petrie 1907
リファ tomb of Khnum-hotep. (334)・Ankhet	中王国後半	首飾りを構成する小球形ビーズ 1(am)、首飾りを構成する小ビーズ 2(si)	Petrie 1907
リファ Khnum-hotepの墓の南	中王国後半	貝形ペンダント 1(go)	Petrie 1907
バダリ 5311墓	第11王朝	首飾りを構成する管状ビーズ 1(bl.gl.st)、小ビーズ首飾り(bl.gl)、小石ビーズ 1	Brunton 1927
カウ 670墓	第11王朝	首飾りを構成する球形ビーズ(bl.gl)、小ビーズ首飾り(bl.gl)	Brunton 1927
カウ 4944墓	第11王朝	小ビーズ首飾り 2(gr.gl) (bl.gl)	Brunton 1927
カウ 4980墓	第11王朝	首飾りを構成する管状ビーズ(bl.gl.st)、小ビーズ首飾り(bl.gl)	Brunton 1927
カウ 南墓地 665墓	第11王朝	首飾りを構成する管状ビーズ 1(bl.gl.st)、小ビーズ首飾り(bl.gl)	Brunton 1927
ナガ・エッデイル N453b墓	第11王朝	樽形・管状ビーズ首飾り 2(樽:bl-gr.fa 35個、管:brownsh bla.fa 3個) (樽:ca 32個、管:ca 1個)、樽形ビーズ首飾り 1(am)、円盤形ペンダント 1(si)、ウラエウス(ユブラ)形ペンダント 1(si)、球形ビーズ腕輪 1(bl.fa)、小・球形ビーズ腕輪 2(am, ca, gr.sto) (am, ca, ga)、小・球形・腕形ビーズ腕輪 1(am, ca, gr.sto, si)、小・樽形ビーズ腕輪 1(am, ca)、小・管状・ウジャットの眼形ビーズ腕輪 1(ca, bl or gr.fa)、スカラベ 1(ca)、スカラベ付きおそろく指輪 1(am, linen)、円盤形・球形・管状ビーズ腰飾り 1(sh 約 585個、ca 29個、gr.fa 5個)、かぎ爪形ペンダント付き足輪 2(am, bo, ca, si)	Eaton 1941
アビュドスラメセス2世神殿の北 1008墓	中王国前半?	トルク 1(si)	Frankfort 1930
アビュドス(El-Arabah) E30墓、古王国時代のマスタバ墓に隣接	中王国(第12王朝~第13王朝)	大ききの異なる球形ビーズ首飾り 1(am)、二重冠付きハヤブサ形ペンダント 2(go) (si)、魚形ペンダント 2(go)、向かい合った2羽の鳥形ペンダント 2(go) (si)、ハヤブサ形ペンダント 2(go)、スカラベ・ペンダント・球形ビーズ腕輪 1(ga, gl)、球形ビーズ腕輪 2(ca) (ga)	Garstang 1902
アビュドス(El-Arabah) E45墓(2)	中王国後半(第12王朝末)	球形ビーズ首飾り 1(gr.gl)	Garstang 1902
アビュドス(El-Arabah) E45墓(3)	中王国後半(第12王朝末)	ビーズとペンダント首飾り 1(ca)、ビーズ腕輪 1(ga)	Garstang 1902
アビュドス(El-Arabah) E45墓(4)	中王国後半(第12王朝末)	ビーズ首飾り 1(am, ca, ga, gr.gl)	Garstang 1902
アビュドス(El-Arabah) E45墓	中王国後半(第12王朝末)	足輪に付くかぎ爪形ペンダント 2(el)	Garstang 1902
アビュドス(El-Arabah) E108墓・Hor(?)	中王国後半(第12王朝~第13王朝)	貝形ペンダント 1(el)、球形ビーズおそろく首飾り 2(bl.gl) (am)、小ビーズおそろく首飾り 1(ga)、金属製腕輪 2(go)、スカラベ付き指輪 1(スカラベ: la、リング: go)、子安貝形ビーズ腰飾り(el)	Garstang 1902
アビュドス D104墓	中王国後半?	円盤形・異なるサイズの球形ビーズ首飾り 1(円盤形: si 1個、球形: ca 72個)	Peet and Loat 1914
アビュドス D105墓	中王国後半?	貝・円盤形・その他ビーズ首飾り 1(貝: sh 5個、円盤形: wh)	Peet and Loat 1914
アビュドス D152墓、lower S.ch.	中王国後半?	大球形・小球形・管状ビーズ首飾り 1(bl.gl)	Peet and Loat 1914
アビュドス D161墓、lower S.ch.	中王国後半?	円盤形・球形ビーズ首飾り(円盤: si 1個、球形: ca, he 多数)	Peet and Loat 1914
アビュドス D162墓、N.ch.	中王国後半?	首飾りを構成する球形ビーズ(bl.gl)、首飾りを構成する管状ビーズ(bl.gl)、首飾りを構成する円盤形ビーズ(bl.gl)	Peet and Loat 1914
アビュドス D166墓、shaft	中王国後半?	球形・樽形ビーズ首飾り 1(am)、首飾りを構成するビーズ(ca) (gl.sto)、首飾りの中心に位置するペンダント(go)	Peet and Loat 1914
アビュドス D166墓、N.ch.	中王国後半?	貝形ペンダント 1(go)、スカラベ付き指輪 1(スカラベ: bl.gl、リング: si)	Peet and Loat 1914
アビュドス D167墓、lower S.ch.	中王国後半?	おそろくトルク(si)、球形・円盤形ビーズ首飾り(球形: am, bl.gl、円盤形: bl.gl)	Peet and Loat 1914
アビュドス D176墓	中王国後半?	球形・管状ビーズ首飾り 1(球形: am, ca, ga 多数、管状: bl.gl 1個)、首飾りを構成する小樽形ビーズ 多数(bl.gl)	Peet and Loat 1914
アビュドス D203墓	中王国後半?	管状・円盤形ビーズ首飾り(管状: 1個、円盤形: dark bl.gl)	Peet and Loat 1914
アビュドス D234墓、lower in shaft	中王国後半?	首飾りを構成するビーズ大量(am) (bl.gl) (ca) (ga)、貝形ペンダント 1(go)	Peet and Loat 1914
アビュドス D234墓、N.ch	中王国後半?	首飾りを構成する球形ビーズ(bl.gl)、首飾りを構成する管状ビーズ(bl.gl)	Peet and Loat 1914
アビュドス D241墓	中王国後半?	貝形ペンダント(go)	Peet and Loat 1914

出土地・被葬者	時代	出土した装身具	参考文献
アビュドス D243墓	中王国後半?	ビーズ首飾り 1(ca, gl, go, fe)	Peet and Loat 1914
アビュドス D303墓、S.chs.	中王国後半?	首飾りを構成する球形ビーズ大量(am) (ca) (gr)、貝形ペンダント 2?(go or si)、スカラベ付き指輪 1(スカラベ: bl.gl、リング: si)	Peet and Loat 1914
アビュドス(El-Arabah) E105墓・Nekht	中王国	球形ビーズ首飾り(gr.gl, go)、8形ペンダント 1(ca, go)	Garstang 1902
アビュドス 1607墓	中王国	球形・樽形ビーズ首飾り 1(am)、ハヤブサ形ビーズ首飾り 1(gl)、二重冠付きハヤブサ形ペンダント 1(si)	Frankfort 1930
アビュドス S25墓、upper N.ch.	中王国(第12王朝)	小円盤形ビーズ首飾り(bl.gl)	Peet 1914
アビュドス S25墓、upper S.ch.	中王国(第12王朝)	カハ頭形ペンダント(ca)	Peet 1914
アビュドス S25墓、lower S.ch.	中王国(第12王朝)	小ビーズ首飾り(bl.gl)	Peet 1914
アビュドス S27墓	中王国(第12王朝)	小円盤形ビーズ首飾り 2(bl.gl)、小ビーズ腕輪 3(bl.gl) (ca)	Peet 1914
アビュドス S39墓、lower S.ch.	中王国(第12王朝)	首飾りを構成する管状ビーズ(gl.st)、首飾りを構成する小ビーズ(go)、首飾りを構成する樽形ビーズ 2(ca)、スカラベ 1(ca)	Peet 1914
アビュドス S173b墓	中王国(第12王朝)	小円盤形ビーズ首飾り(bl.gl)	Peet 1914
アビュドス S175墓、N.ch.	中王国(第12王朝)	円盤形ビーズ首飾り	Peet 1914
アビュドス S194墓	中王国(第12王朝)	小ビーズ足輪 3(bl.gl)、足輪に付く足形ビーズ(ペンダント?) 1(ca)	Peet 1914
アビュドス S260墓	中王国(第12王朝)	円盤形ビーズ首飾り(bl.gl)	Peet 1914
アビュドス S340墓、lower S.	中王国(第12王朝)	首飾り 1(ca)、球形・円盤形・管状ビーズ首飾り 1(bl.gl)	Peet 1914
アビュドス S500墓	中王国(第12王朝)	小ビーズの足輪(gl)	Peet 1914
アビュドス S627墓、S.ch.	中王国(第12王朝)	金属製腕輪 2(si)	Peet 1914
アビュドス S12墓	中王国(第12王朝)	円盤形・球形ビーズ首飾り(円盤: si 1個、球形: bl.gl 約94個)、首飾りを構成する管状ビーズ 4(ca 2個)(gl.st 2個)、小ビーズ腕輪 2(ca, bl.gl)	Peet 1914
アビュドス S20墓	中王国(第12王朝)	円盤形ビーズ首飾り 2(bl.gl)	Peet 1914
アビュドス S44墓	中王国(第12王朝)	傘形ビーズ首飾り 1(bl.gl)、首飾りを構成する渦巻き模様のある傘形ビーズ 1(bl.gl, bla)、首飾りを構成するひし形ビーズ 1(ca)、球形ビーズ腕輪 1(he)、ビーズ腕輪 1、スカラベ 3(am) (bl.gl) (bla.sto)	Peet 1914
アビュドス S51墓	中王国(第12王朝)	小円盤形・管状・砕けた巻貝ビーズ首飾り 1(小円盤: dark bl.gl 多数、管状: gl.st 2個、巻貝: sh 数個)	Peet 1914
アビュドス D9墓、the lowest ch.	中王国	球形ビーズ首飾り 1(ca)	Peet 1914
アビュドス D75墓	中王国	腕輪を構成する球形ビーズ(bl.gl)、腕輪を構成する管状ビーズ(light and dark bl.gl)、腕輪を構成する小円盤形ビーズ(bl.gl, ca)	Peet 1914
アビュドス G6墓	中王国	ビーズ首飾り 1(ca)、nb形の上に下エジプトの王冠が表現されたペンダント 1(go)、円盤形ビーズ首飾り 2(bl.gl) (sh)	Peet 1914
フク W 32墓	中王国おそろく後半(第12王朝)	ハヤブサ形ビーズ首飾り(am, ca, si)	Petrie 1901
フク W 72墓	中王国後半?(第12王朝)	ビーズ首飾り(he)	Petrie 1901
フク Y 15墓、東の部屋・Abnu	中王国後半?(第12王朝)	球形・管状ビーズ首飾り(gl)、小球形ビーズ首飾り(gl)	Petrie 1901
フク G 6墓	中王国後半?(第12王朝)	ビーズ腕輪 4(gr.gl) (ca, he, wh.fe) (am, ca, he) (ca, he, wh.fe)	Petrie 1901
デーベ・メンチュヘテプ2世葬祭殿ピット 18、MMA 1921・Myt(王女カ)	第11王朝(メンチュヘテプ2世治世初期)	球形ビーズ首飾り 2(ca) (go)、小・樽形・ウジャットの眼形・スカラベ形ビーズ 4連首飾り 1(ca, cr, si, gla, fe, am, ja)、小・樽形・ウジャットの眼形 2連首飾り 1(ca, gla, si, cr)、トルク 1(go)	Hayes 1953
デーベウアの墓(MMA 1102)・wh	中王国前半(第12王朝初め)	樽形 1(bl.fa)、球形ビーズ首飾り 2(bl.fa)、球形・小管状ビーズ首飾り 2(go) (si)、管状・樽形ビーズ首飾り 1(管状: ca 5個、por 2個、bl 3個、qu 3個、樽: ca 9個、qu 4個、ag 2個)、幅狭腕輪 4(bl.fa)、スカラベ・樽形・管状ビーズ腕輪 3(スカラベ: go, si 1個、樽: wh.gl, bl.gl 1個、管状: bl.gl 1個)(スカラベ: la 1個、樽: ca 1個、管状: ca 1個)、スカラベ付き指輪 1(スカラベ: bl.gl、リング: linen)、セウレットビーズ 1(ca, linen)、幅狭足輪 4(bl.fa)	Roehrig 2003
デーベ MMA Cemetery 800, Tomb MMA 840, MMA 1912-1913	中王国時代後半(第12王朝~第2中間期)	大ききの異なる球形ビーズ首飾り 1(am)、貝形ペンダント 1(si)、二重冠付きハヤブサ形ペンダント 1(el)、金属製腕輪 複数(si)、幅広腕輪 複数(ca, la, tu, si)、子安貝・アカシアの種形ビーズ腰飾り 1(si, am, ca)	Hayes 1953

エジプト先王朝時代における石製品研究 —その生産と流通からみた地域統合過程の変遷を中心に—

竹野内 恵太*

1. はじめに

エジプト先王朝時代では、ナイル川下流域と東西砂漠地帯から産出する種々の石材を用いて、石製容器や泥岩製パレット、石製歯牙形製品を典型例として様々な石製品が製作された。しかし、その生産や流通について具体的な像は提示されていない。よって修士論文の目的は、石製品の分類や編年、分布論といった基礎研究の更新を最新の土器編年体系によって図るとともに、その生産体制および流通システムの変遷過程について諸分析を通じて捉える点にあった。また、各種石製品は、土器や石器のように各遺跡における在地生産ではなく、大規模遺跡における集約的な生産が想定されている。且つ素材である岩石は産地が局在することもあり、石製品の分布状況は地域間の物資の分配と供給という観点から考察でき、当該期の地域間交流を明らかにできると考える。そのため、各種石製品を個別に焦点を当てるといよりも、素材を共有する製品を総体的に分析することで、先王朝社会における地域間の石材の利用形態と流通をより具体的に理解できると考えた。

さらに、石製品の生産と流通の時期的変化は、その背景にある地域統合という社会変化と併せて考えるべきである。エジプト先王朝時代に関する考古学的諸研究は、初期国家の形成過程に沿った物質文化の変容を主たる関心として進められてきた。この物質文化の変

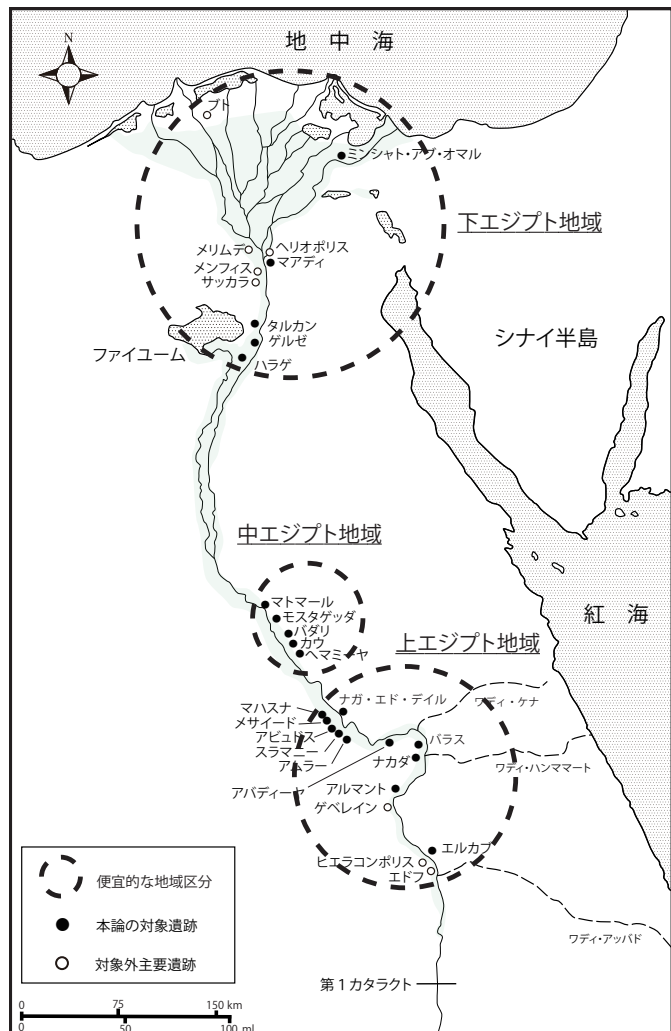


図1 本論の対象遺跡と地域区分

* 早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程

容は、土器や石器の地域色が徐々に薄らいでいく地域統合過程に代表される。他方で、このような地域性消失の背景には、人間集団の移動・交流を介した物資や情報の流入と受容が各地域間において必然的に存在した。地域統合過程の研究は、こうした動的な視点から捉え直し、議論する余地が大いにある。

よって、修士論文では、①石製品の生産体制と流通形態の変遷を素描し、②先王朝時代における地域統合過程について再考することを目的とした。研究手順としては、A. 最新の土器編年を採用し、各種石製品の分類と編年を再構築する。そのうえで、B. 各種石製品の分布状況を把握し、遺跡・地域間の生産体制とその経時性について言及する。その際、出土点数が安定している石製容器と泥岩製パレット、石製符形製品に分析対象は限定した。さらに、C. 産地が限定され、且つ全遺跡で一定量出土する泥岩製パレットを対象として、考古学における一般的な交換分析を援用する。また、東部砂漠産の石材を用いたメイスヘッドや球形製品、棒状製品といった石製品の分布状況も加味し、石製品の流通形態について分析を行った。そして、D. これまでの分析結果を総合させて、石製品の生産と流通の変遷について考察し、地域統合過程との並行関係を論じた。

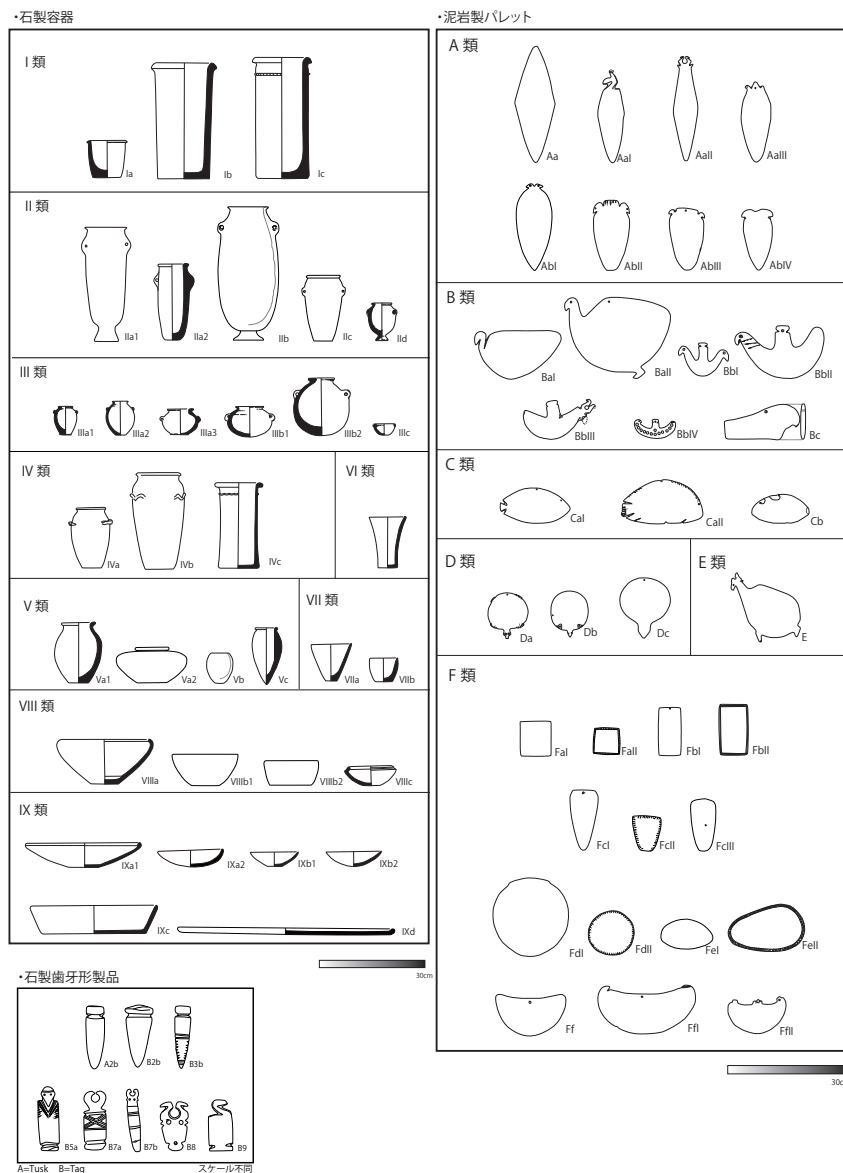


図2 各石製品の器形・形態分類

2. 各種石製品の分類と編年

本論で主として取り扱う石製品は、全遺跡から一定量の出土が確認される石製容器、泥岩製パレット、石製歯牙形製品である(図2)。先王朝時代の編年研究では、副葬品のアセンブリッジ内で共伴する土器との対応によって、他遺物の編年が組まれている。本論では最新の土器編年であるヘンドリックス編年(Hendricks 1996, 2006)に基づき、IA-B期、IIA期、IIB期、IIC器、IID期、IIIA期、IIIB期の7時期に設定し、各種石製品の編年を設定した。その際、ヘンドリックス編年を適用できる全個体を各遺跡(図1)から集成し、新たに体系的な器形・形態分類を構築した。石製歯牙形製品については、ヘンドリックスらによる包括的な集成研究に沿って分類した(Hendricks and Eyckerman 2011)。さらに、石材構成という点からも編年を組んだ。その結果、概ね各種石製品は、IA-B期、IC期、IIA-B期、IIC-D期、IIIA-B期の5時期に区分可能であることがわかった。この5時期区分に基づき、それぞれの石製品の分布状況を分析する。

3. 各種石製品の分布状況

3-1. 石製容器

まず、IC期では、Ia類とIII類を主体とし、器形から見ると遺跡間での差異は認められない。全器種構成がナカダ遺跡で出土している一方で、他遺跡では散発的である。続くIIA-B期でも、遺跡間で器形における差異は明確でない。しかし、ナカダ遺跡やアムラ遺跡、バダリ遺跡、マトマール遺跡では、それぞれ出土個体数は1点ながらも、それぞれの遺跡でしか出土しない器形が現れる。

続くIIC-D期になると、上下エジプト間における器形の差異が現れる。上エジプト地域内においてはIII類の管状把手付き壺を中心とした様相であるが、下エジプト地域の2遺跡では、それに加え、鉢あるいは杯の出土が目立つ。すなわち、当該期の分布状況は上下エジプト地域間で二極構造的な様相を呈する。

IIIA-B期では、上エジプト地域では、円筒形壺と管状把手付き壺が主体を占めるが、下エジプト地域では後者についてはほぼ出土せず、円筒形壺と杯・鉢・皿であるVI類・VIII類・IX類を中心とする。一方で、上エジプト地域内部では、III類の管状把手壺を未だ堅持しており、IIA-B期以来の上エジプト地域の伝統性が窺われる。一方で、中エジプト地域におけるヘマミーヤ遺跡やバダリ遺跡、モスタゲッタ遺跡の3遺跡では、III類の管状把手付き壺に加えて、杯・鉢・皿の指向性が強い。つまりIIIA-B期では、上エジプト地域内のナカダ地域からアビュドス地域とバダリ地域、下エジプト地域の3極化した構造をなし、地理的なグラデーションを示す。バダリ地域は2地域間の中間的様相を呈すると言える。

3-2. 泥岩製パレット

IC期ではナカダ遺跡のF類の排他性、アムラ遺跡のBbI類とBbIII類の排他性から、これら2遺跡間で地域的差異がある。一方で、バダリ地域であるバダリ遺跡やマトマール遺跡、カウ遺跡では、ナカダ遺跡と形態が類似する。しかし、IIA-B期になると、アムラ遺跡において固有であったBbI類・BbIII類がバダリ地域でのみ認められるようになる。翻って、アムラ遺跡では、ナカダ遺跡との類似を示すようになる。IIC-D期には、上エジプト地域内で大きな差異はなくなる一方で、ナカダ遺跡におけるF類の排他性はIIC-D期まで継続する様相が窺える。IIIA-B期には、出土の中心が下エジプト地域に移り、タルカン遺跡とミンシャト遺跡で大量に出土するようになる。当該期になると、タルカン遺跡で出土している形態の組成がほぼ全ての遺跡をカバーし、それに伴って地域間で差異は消失する。

3-3. 石製歯牙形製品

まず、IC期の段階では、3遺跡間で形態と石材ともに明確な差異が認められた。IIA-B期でも、全体の出土個体数が増加するに伴い、形態の構成において4遺跡間の差異がより広がる傾向にある。石材構成も、ナカダ遺跡が泥岩製の歯牙形製品を排他的に保有する様相は変わらず、IC期に見られた遺跡間の差異をより強調していた結果となっている。しかし、IIC-D期になると、アムラ遺跡で排他的であった形態がナカダ遺跡でも認められるようになる。

3-4. 小結

以上の石製品の地域性をまとめると、石製容器の分布からはIIA-B期まで上エジプト内で明確な地域区分はできない。しかし、IIC-D期に入ると、石製容器と泥岩製パレットともに上下エジプト地域間で大きな差異が導き出された。当該期になると、上エジプト地域ではすでに地域差はほぼ消失している。これは石製歯牙形製品のAb2類がナカダ遺跡から出土するようになることからわかる。一方、上下エジプト間については、石製容器と泥岩製パレットともに排他的な出土の様相にある。国家の形成段階であるIIIA-B期に入っても、石製容器からは上エジプト地域のみIII類が出土するように、上下エジプト地域間で差異は消失しない。

また、泥岩製パレットと石製歯牙形製品間には地域的な視点に立脚しても共通項がある。泥岩製パレットや泥岩製の歯牙形製品の分布域は、アビュドス地域とナカダ地域にほぼ固まる。特に、泥岩製パレットのAaII類やBbII類、E類に付属する幾何学状の意匠と共通する属性をもつ泥岩製歯牙形製品のB8類およびB9類は、ナカダ地域圏内のみ見られる。

以上、石製品の地域分布について分析を行ってきた。本論の分析結果からは、バダリ地域という小規模遺跡からなる地域では出土量が圧倒的に少なく、且つ石材供給地に地理的に近い遺跡から多数の石製容器が出土することを再確認した。この結果は、ナカダ遺跡やアムラ遺跡といった大規模遺跡において集約的な生産にあり、各小規模遺跡へ分配・流通していたことが確実に想定できる。しかし、IIC-D期では、下エジプト地域という一部の石材の供給地から遠隔にある地域で多量の石製品が出土する。続くIIIA-B期では、その下エジプト地域を中心とした大量生産化を認めることができる。このことに関しては、何らかの流通システムの変化を考えざるを得ない。そのため、次項では、本項で得られた石製品の地域分布の結果と、産地が特定されている泥岩製パレットを対象として考古学において一般的な交換研究の手法を用い、流通に関して諸分析を行う。

4. 石製品の流通に関する分析

続いて、泥岩製品を対象資料として、一般的な交換分析（原産地近郊遺跡からの距離と点数の相関性）を行った。考古学において交換や流通形態を分析する場合、素材の産地が判明している製品をその対象とすべきである。中でもパレットの石材である泥岩は、東部砂漠に位置するワディ・ハンマートにおいてのみ確認されており、化学分析の結果からも追証されている。且つ、泥岩製パレットは、全遺跡から安定して出土するということもあり、交換分析における統計的手法を援用しやすい。また、東部砂漠に位置する紅海丘陵やワディ・ハンマートに産地をもつ石材を用いた石製容器や石製腕輪、棍棒頭、球形製品、棒状製品といった石製品の分布状況も加味し、石製品の流通形態について分析を行った。

その結果、泥岩製パレットの分析からは、上エジプト地域内で見ると、それぞれの地域圏内のセンターを中心とする点数の多寡がIIA-B期に見られ、いわば遺跡階層（遺跡規模）に則した流通にあり、泥岩製品はナカダ・アビュドス両地域間で排他性を保持していた。上下エジプト地域間で見ると、IIC-D期にアビュド

ス地域を交易の中心地とした下エジプト指向型の流通への変容を読み取ることができた。下エジプト地域から極端に泥岩製パレットが出土するようになり、斑岩や蛇紋岩、泥岩を素材とした他の製品も同様であった。一方で、バダリ地域では、それらを素材とする製品が一貫して希薄であり、歯牙形製品もナカダ・アピュドス両地域間でほぼ固まる。IIIA-B 期になると、下エジプト地域のタルカン遺跡へ出土の中心が移行するため、原材自体が下エジプト地域へ大量に搬入された状況が窺える。また、当該期では、泥岩製品はナカダ地域からの出土は皆無であり、上エジプト地域ではアピュドス地域からしか出土が見られない。

5. 石製品の生産体制と流通システムの変遷

これまでの分析結果に基づき、本節では、石製品の生産と流通のあり方を総合的に検討し、時期ごとの変遷を考察する(図3)。

IC 期 石製容器は Ia 類と III 類を主体とする。III 類は、大半が硬質な石材である玄武岩を素材として製作された。先王朝時代を通じて石製容器の素材となった玄武岩は、化学分析によってファイユーム北部と周辺に位置する産地から採掘されたことがわかっている(Mallory-Greenough 1999)。近郊のマアディ遺跡で製作され II 類に属する石製容器は、おそらくマアディから上エジプトへの搬入によってもたらされたことが想定でき(Mallory-Greenough 2002)、グイヨーは当該期上エジプト出土の玄武岩製容器を下エジプトからの交換財として位置づけている(Guyot 2008)。翻って I 類は、エジプト・アラバスターまたは石灰岩といった軟質の石材に限定され、おそらくは遺跡の近郊、少なくとも上エジプト地域内で獲得可能な石材を用いていた。

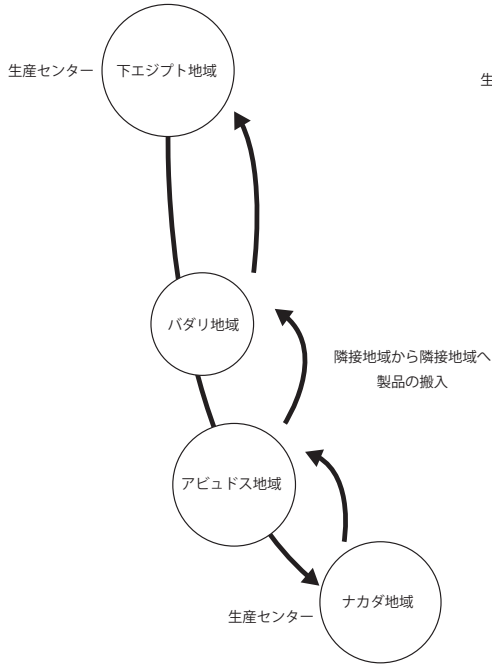
Ia 類については、先行する新石器文化期の象牙製容器にその器形の系譜を求めることができるだろう(Arkekk and Ucko 1965: 152, Adams 1988: 33)。なお、当該期の Ia 類の素材は石灰岩およびエジプト・アラバスターが独占的であり、色調・硬度ともに象牙のそれに求めた可能性が高い。このような石材選択と器形は、象牙製容器の製作技術をもって加工したことを示唆しているかもしれない。そのため、これらの器形や Ia 類については、在地生産品であると考えた方が妥当である。つまり、上下エジプト間で石製容器の生産センターは二極構造にあっただろう。ナカダ遺跡からバダリ地域にかけて Ia 類の出土量の多寡が地理的勾配を呈するため、上エジプト地域内では、ナカダ遺跡で集約的な生産とそこからの分配であった可能性にある。泥岩製品も地理的勾配に沿って

IIA-B 期 IC 期の器種構成とほぼ変動ない当該期についても、生産体制の二極構造的様相と 2 系統の石製容器を主体とする器種構成は継続する。一方で、ナカダ遺跡では III 類が出現する。この III 類は、明らかに上エジプト内部で生成された器形である。マアディで独占的に生産されていた II 類もこの時期からナカダ遺跡でトラバーチンを素材として在地生産化された。これらのことから、ナカダ地域において石製容器の生産はより活発になったと考えられる。また、流通システムは、ナカダ～アピュドス地域間で階層的な様相を呈する。それとともに、おそらく原材自体がアピュドス地域へ搬入されていた可能性が高い。これは、石製容器の Ic 類や泥岩製腕輪といった他地域では一切出土しない石製品類が認められることが傍証となる。おそらく、アピュドス地域内部でも、石製品を独立して生産する体制が整備され始めたと考えられる。

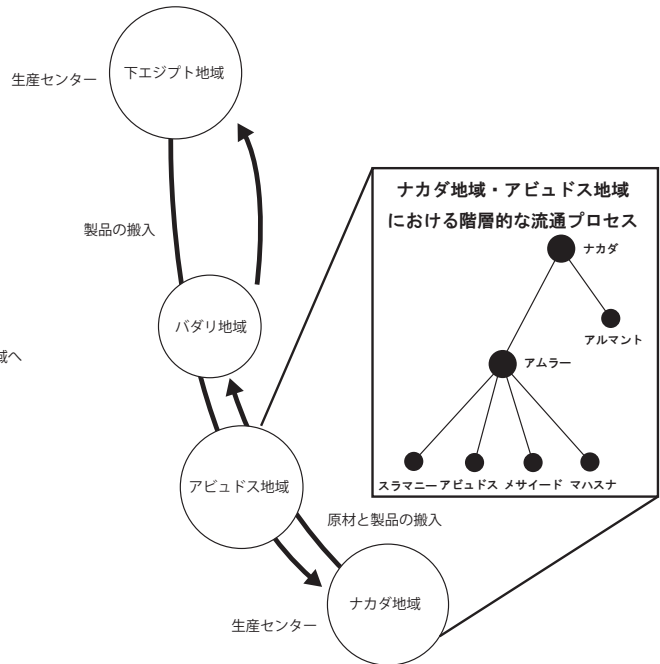
IIC-D 期 石製容器は、II 類から III 類へ器形は大きく変化する。この時期にマアディ遺跡は廃絶され、II 類を中心とした石製容器の生産拠点は消失する。上述したように III 類は上エジプト地域で発現した器形であるため、この時期から上エジプト地域における石製容器の生産規模は拡大し、マアディ遺跡の生産拠点の廃絶と並行して、独自の生産体制が確立したと言える。当該期から II 類の石材は、玄武岩からトラバーチンや石灰岩、角礫岩を主体とする石材構成に移行する。この II 類における石材選択の解体から上エジプト

地域内部でII類が在地生産化された可能性にあることが指摘でき、本地域で石製容器生産が中心化したと言えるだろう。また、III類はII類とは異なる系統であり、このようなIII類が主体となる様相は、IIA-B期よりもさらに発展した在地生産が行われていたことを示すだろう。III類の石材は角礫岩や斑岩といった東部砂漠の硬質な岩石を用いている。最も近郊のナカダ遺跡が、これらの石材の獲得および製品の生産の核地

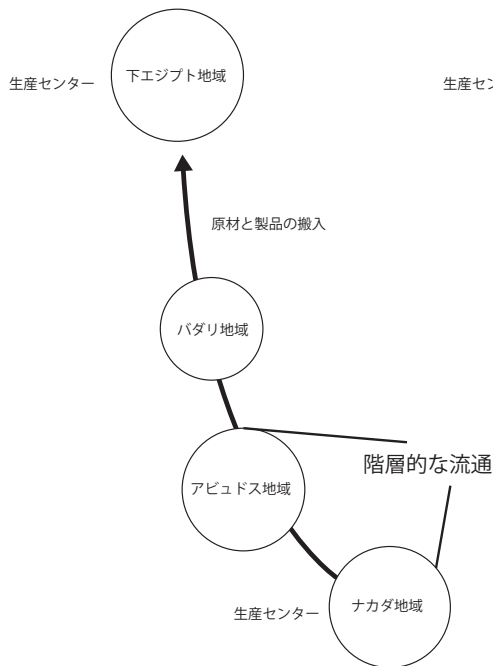
IC期



IIA-B期



IIC-D期



IIIA-B期

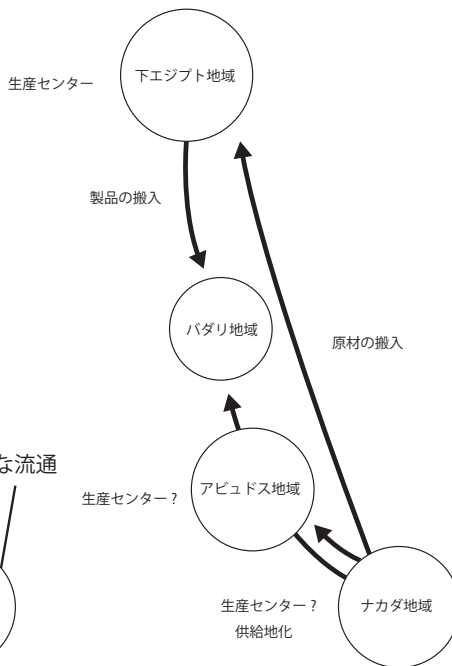


図3 石製品の生産と流通形態の変遷に関する概念図

域であったことは、本遺跡でこの時期を中心として棒状製品や球形製品が排他的に出土することが傍証となる。また、下エジプトでは、全体的な器種構成も明らかに III 類を主体とする上エジプト地域と共通する。一方で、斑岩製や泥岩製の VII 類や VIII 類、IX 類も器種構成に組み込まれる。おそらく、斑岩や泥岩については、原礫自体が下エジプト地域へ流通していたことが指摘できる。この下エジプト地域への石製容器の原材搬入は、泥岩製パレットの流通が下エジプト指向型のシステムへ移行することと機を同じくする。つまり、石製品や原材が上下エジプト地域間で流動化する様相を捉えられる。

IIIA-B 期 当該期になると、石製容器の生産拠点の様相はさらに複雑化し、下エジプト地域と中エジプト地域、上エジプト地域の三極的な構造が形成される。それとともに、石製容器および泥岩製パレットは大量生産され、とくに下エジプト地域において石製容器の需要は高まる。こうした石製品の大量生産と、上エジプト特有の石製歯牙形製品生産の消失は、密接に関連しているだろう。上エジプト地域では、生産と流通の縮小化とともに、下エジプト地域指向型の流通は加速化する。

下エジプト地域では、III 類がほぼ出土せず、VI 類・VIII 類・IX 類が中心的に出土しており、IIC-D 期以来の石製容器生産を引き続き確認できる。一方で、上エジプト地域では、III 類の伝統性を保持した石製容器生産が小規模ながら継続していたのだろう。ここで注視すべきことは、中エジプト地域が上下エジプト地域の中間的な器種構成となっていることである。つまり、中エジプト地域では独立して石製容器生産は行っておらず、上エジプト地域と下エジプト地域という生産拠点の両極から搬入された石製容器に依存していたと解釈できる。このことは、泥岩製パレットの分布状況からも推測することができる。つまり、大量の泥岩の原礫がおそらく下エジプトへ搬入されることから、流通経路上その中間地点であるバダリ地域を經由するため、必然的に当該地域には両極から情報あるいは物資の交錯があったと考えられる。上エジプト地域、とくにナカダ遺跡では泥岩製品の生産は小規模であり、原礫自体を搬出したのか、あるいは成品や未成品を搬出目的で加工して流通させたことが推測される。どちらにせよ、上エジプト地域は、IIC-D 期までの生産体制ではなく、供給地としての役割が中心的であったことが指摘できるだろう。

6. 石製品の動態と地域統合過程

では、以上のような石製品から見られた地域性は、土器や石器における地域性の既往研究とどのような対応関係にあるのだろうか。土器や石器は、各地域集団による自立的な生産体制にあり、ナカダ II 中期以降、上下エジプト地域間において土器や石器の地域的な多様性は収斂していくが、そのような変遷に沿わない。むしろ、石製品、とくに石製容器の地域差は上下エジプト間で広がる様相を捉えることができる。この地域差の広がり、石製品における集約的な生産体制と複雑な流通システムの発展に起因すると言ってよい。IIA-B 期のナカダ・アビュドス地域間の階層性に則した組織的流通の確立は、土器・石器分析で一般的に述べられているナカダ文化の核地域形成と並行する。そして、IIC-D 期になると、下エジプト地域も含め、ナイル川下流域全域の物質文化は均質的になる。文化的統合はこの時期の間に果たされ、石製品が地域間で流動化し、下エジプト地域指向の流通システムが形成される時期と合致する。つまり、ナイル川下流域全域で組織的な物流が確立されたことは、文化的な地域統合を刺激した要因の一つとして考えられる。

7. おわりに

修士論文では、広範囲にわたる分析結果を横断して結論づけようとしたため、細かなレベルにおいては精彩を欠いた考察になってしまった。しかしながら、石製品の分類と編年、そして分布状況といった基礎研究を更新できたことは一つの成果と言えよう。

生産地の欠落した当該期では、石製品の生産と流通の具体像を遺構からは求め得ない。遺物自体から生産と流通を考古学的に論じる際には、製作技術がいかに関地域間で共有され、あるいは排他的な選択にあったかを検討する必要性がある。今回得られた知見をよりミクロなレベルで反復検証することが今後の課題となろう。

引用文献

Adams, B. and Cialowicz, K. M.

1997 *Protodynastic Egypt*, London.

Arkell, A. J and Ucko, P. J.

1965 “Review of Predynastic Development in the Nile Valley”, *Current Anthropology* 6, pp. 145-166.

Guyot, F.

2008 “The Origins of Naqadan Expansion and the Interregional Exchange Mechanisms between Lower Nubia, Upper and Lower Egypt, the South Levant and North Syria during the First Half of the 4th Millennium”, in B. Midant-Reynes and Y. Tristant(eds.), *Egypt at Its Origins 2*, pp. 707-740, Belgium.

Hendrickx, S.

1996 “The Relative Chronology of the Naqada Culture: Problems and Possibilities”, in J. Spencer(ed.), *Aspects of Early Egypt*, pp. 36-69, London.

2006 “Predynastic-Early Dynastic Chronology”, in E. Hornang, R. Krauss, and D. A. Warburton(eds.), *Ancient Egyptian Chronology*, Leiden and Boston.

Hendricks, S. and Eyckerman, M

2011 “Tusks and Tags: Between the Hippopotamus and the Naqada Plant”, in B. Midant-Reynes and Y. Tristant(eds.), *Egypt at Its Origins 3*, pp. 497-570, Belgium.

Mallory-Greenough, L. M.

1999 “The Stone Source of Predynastic Basalt Vessels: Mineralogical Evidence for Quarries in Northern Egypt”, *The Journal of Archaeological science* 26, pp. 1261-1272.

2002 “The Geographical, Spatial, and Temporal Distribution of Predynastic and First Dynasty Basalt Vessels”, *The Journal of Egyptian Archaeology* 88, pp. 67-93.

「古代テーベとそのネクロポリス (The Ancient Thebes and its Necropolis)」における遺跡の保存と活用

福田 莉紗*

1. はじめに

本稿では、エジプトを代表する観光地で、古代王朝時代にはメンフィスと並ぶ二大中心拠点として繁栄したテーベ、現在のルクソールにあたる地域の遺跡の保存と活用を研究対象とする。この地域の遺跡は「古代テーベとそのネクロポリス (The Ancient Thebes and its Necropolis)」として、1979年の第3回世界遺産委員会（ルクソール会議）において87番目の世界文化遺産に登録された。しかしながら、世界遺産には必携であるバッファ・ゾーンの欠如しており、加えて、これまで指摘した本遺産の統一的な保存、管理の方針が立てられていない。また地元住民をないがしろにした政策も本遺産における大きな問題となっている。

本稿ではこれらの問題を解決するため、本遺産の現状調査を行い、問題点の指摘、改善策の提示を行い、その上で適切なバッファ・ゾーンの設置案を提示する。更に、文化財を保護する上で最も重要な存在である地元住民が、観光利益を優先する政策の下で、どのような現状に置かれているのか、実態調査を行う。そして、地元住民と観光産業の道具として利用される文化財との共存・共生の在り方を探る。

2. 「古代テーベとそのネクロポリス」の概要

締約国 : エジプト・アラブ共和国

世界遺産名 : 古代テーベとそのネクロポリス (Ancient Thebes with its Necropolis)

構成資産 : ①カルナク神殿 ②ルクソール神殿 ③古代テーベのネクロポリス

登録年月日 : 1979年10月26日

地理的座標 : 緯度 北緯 25' 43" 59.988、経度 東経 32' 26" 00

面積 : コア・ゾーン 7,390ヘクタール、バッファ・ゾーン 444ヘクタール

登録基準 : (i) 人間の創造的才能を表す傑作である。

(iii) 現存するか、消滅しているかにかかわらず、ある文化的伝統又は文明の存在を伝承する物証として無二の存在（少なくとも稀有な存在）である。

(vi) 顕著な普遍的価値を有する出来事（行事）、生きた伝統、思想、信仰、芸術的作品、あるいは文学的作品と直接または実質的関連がある（この基準は他の基準と組み合わせて用いるのが望ましい）。

本稿で取り扱う研究対象地域は、「古代テーベとそのネクロポリス」として世界文化遺産に登録された地

* 早稲田大学大学院文学研究科修士課程

域を基本に設定した (World Heritage Centre 1979) (図1)。よって、世界遺産プロジェクトの主体である United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization とその諮問機関である International Council of Monuments and Sites が定める国際水準、『世界遺産条約履行のための作業指針 (The Operational Guidelines for the Implementation of the World Heritage Convention)』(World Heritage Centre 2012a) に合致した遺跡保存整備計画の問題点の提示と改善策の提案を行う。また、世界文化遺産としての古代テーベとそのネクロポリスの構成資産ではないその他の遺跡についても、世界文化遺産の周辺地域に存在し、空間を共有している以上、構成資産となっている遺跡の価値や、世界遺産の基本理念、保存管理方法を尊重した遺跡保存整備計画を考案しなければならない。特に、本遺産の登録テーマに関連する遺跡は、本遺産の重要性と価値をより高め、より確かなものとする要素があるため、これらを含むルクソーラー帯に存在する遺跡の包括的な保存・管理を徹底する必要がある。

2013年までに世界遺産委員会とエジプト政府の間で10回の諮問と答申が行われてきたが、今後も改善を要請されると思われる問題点は次の通りである (World Heritage Centre 1979, 1998a, 1998b, 2000, 2006, 2007, 2008a, 2008b, 2009, 2010, 2012b, 2013)。

- a. 西岸のネクロポリスのバッファ・ゾーンの設置
- b. 断崖の道
- c. 西岸のクルージングボートの接岸場所
- d. スフィンクス参道
- e. クルナ村の移転
- f. 「古代テーベとそのネクロポリス」における遺産の統一的な保存・管理方針の考案

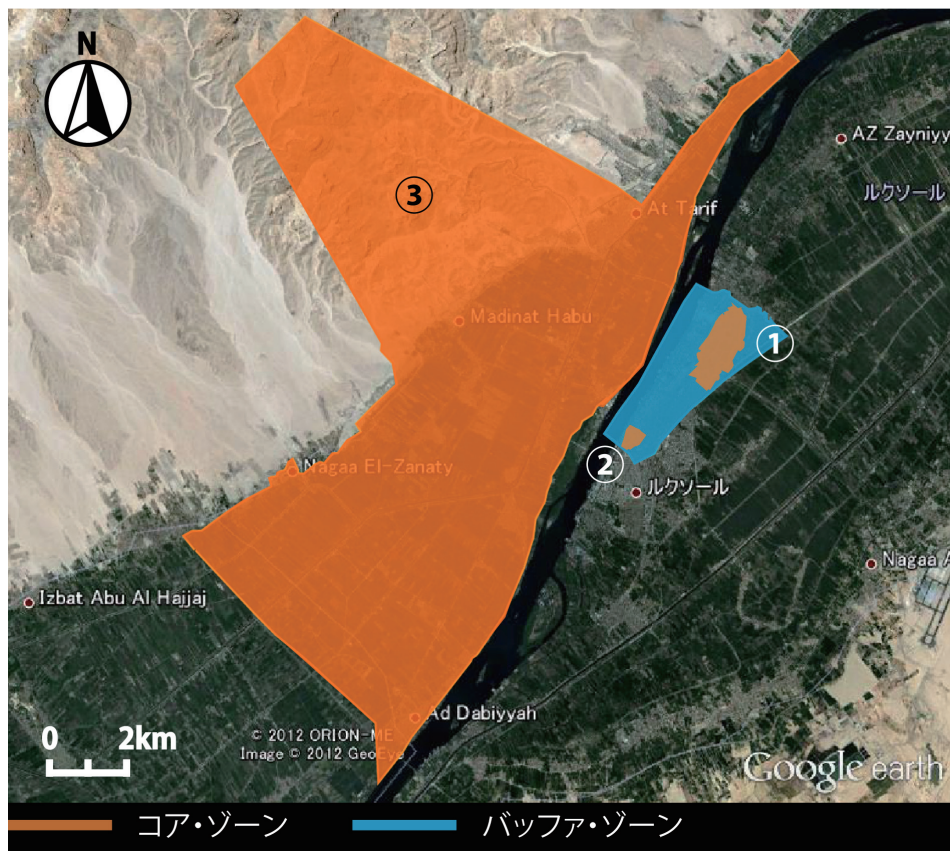


図1 古代テーベとそのネクロポリス

3. 本研究の意義と目的

2008年、エジプト学者国際会議で遺跡の管理と保存の問題が大きく取り扱われて以来、遺跡の整備計画や劣化要素の研究等がエジプト国内の研究機関のみならず、各国の研究者によっても積極的に進められている。

しかし、現状のサイトマネジメントは個々の遺跡、遺構に対してなされているものであり、テーベ全体の包括的な保存・管理に関する計画や研究はあまりされていない。それを如実に表しているのが世界文化遺産としての価値の保護対策を講じる際に大前提となる、世界遺産の必携であるバッファ・ゾーンの未設置である。

また、観光立国であるエジプトの産業を支えている観光資源、文化資源としての遺跡の在り方の問題も深刻である。エジプト政府による観光産業による利益向上を重視した政策によって、遺跡の真正性が欠如したり、地元住民の生活が脅かされたりしている。

各遺跡の現状を把握し、世界遺産としての体裁を整えることは、テーベにおける遺跡の価値の保護と包括的な保存・管理計画を考案するためには必要不可欠である。そして観光資源、文化資源としての遺跡の地元住民との共存・共生のされ方を調査し、今後のマネジメントを考案することは、文化遺産を後世に引き継ぎ、エジプトの更なる発展に貢献するものとなる。

以上のことを踏まえて、本研究では「古代テーベとそのネクロポリス」における遺跡の現状、「西岸のコア・ゾーンの見直し、及びバッファ・ゾーンの設置の提案」、「文化財の活用としての観光と地元住民との共存・共生」の3点について論述する。

4. 「古代テーベとそのネクロポリス」における遺跡の現状

各遺跡は、「公開」されている遺跡と、「非公開」の遺跡の2つの状態に大きく分類することができる。「公開」されている遺跡は「世界文化遺産構成資産」としてコア・ゾーンが設置されているものが一つ。バッファ・ゾーン内、或いはその周辺に位置する世界文化遺産構成資産以外の「観光地」と、二分される。

コア・ゾーンでは、遺跡の真正性、完全性を維持するために現状を改変する活動が厳しく制限されている。しかしながら、カルナク神殿を代表とするこれらの遺跡では観光産業の利益向上を目的とした大きな改変が行われており、世界遺産委員会の要請に反した行為が押し進められているのが現状だ。

一方、世界文化遺産構成資産以外で公開されている「観光地」は、集客率に差がある。その差は同時に保存、管理のレベルに比例している。中には危機的状況に陥っているものもある。全ての遺跡が一定基準以上の保存・管理がされるためにも、世界遺産委員会からは本遺産における包括的な保存・管理方針の策定が求められる。

エジプトの遺跡は観光資源として活用されているが、観光産業の利益のために遺跡自体も地元住民の生活も、多くが犠牲になっている。この現状を何より先に把握しておかなければならない。地元住民あつての保護であり、真正性あつての価値と重要性であることを踏まえて遺跡の保存と活用、そして活用の一環としての観光政策がなされなければならない。

観光地である遺跡は、文化財の価値や重要性を人々に伝え、保護の必要性を理解してもらう場所である。文化財保護の立場にあり、学術的研究を行う人にとっては当たり前のことでも、そうではない人々にとっては当たり前ではないことは多々ある。一般の人々に対して如何に重要性や価値を伝えるのか、如何に相手の身になって考えられるか、客観的に物事を考えることが観光地として、そして文化財の活用、保存の成功の

鍵であると考え。

以上を念頭に、以下に4つの改善点を提示する。

- ①保存・修復作業等の必要性の理解を得るために、保存、修復等作業中であることを明示
- ②遺跡と遺物のつながりを強化と臨場感を演出するために各遺跡でのサイトミュージアムの開設、または原位置展示
- ③立て看板に代わって、際限なく情報を提供し、更新できるQRコードの設置と更なる活用
- ④遺跡内を効率的に巡回し、見所を抑えるための動線の提示、または誘導

「非公開」の遺跡は3つに分類される。「非観光地」、「観光地化予定地」、「調査、保存・修復作業等実施中」である。「非公開」の理由としては、観光地として集客が見込めないもの、保存状態が悪いもの、又は劣化を防ぐため、或いは地元住民の平穏な生活を保護するため等、理由は様々である。観光地化する際には、保存状態や地元住民の生活との兼ね合いがあるため、公開、または非公開の判断には慎重な姿勢が求められる。非公開の遺跡は重要性やその存在自体の認識が低いものが多いからこそ、以下に提示した対応が早急に求められる。

- ①モニタリングによる管理と定期的なメンテナンス
- ②遺跡の存在を周知する案内板の設置

5. 西岸のコア・ゾーンの見直し、及びバッファ・ゾーンの設置の提案

(1) コア・ゾーン

『世界遺産条約履行のための作業指針』には、「遺産の顕著で普遍的な価値を直接表現する有形物であるもの、そして将来的に遺産の価値を高める一因となる見込みがあるもの」がコア・ゾーンの範囲に含まれるものだと記されている (World Heritage Centre 2012a)。

しかし、本遺産の西岸のコア・ゾーンは農耕地や一般道路等の遺跡の価値には直接寄与しないものまでもが含まれている。将来的にコア・ゾーンが完備された場合、農耕地や一般道路といった地元住民の日常生活に欠かせない場所までもが厳しい制限を課せられ、日常生活に大きな支障を来すことが懸念される。これらの問題点を未然に防ぐためにも、コア・ゾーンの再考が不可欠である。

世界遺産委員会に提出された推薦書や報告書の文面には、「西岸のネクロポリス」の特定の遺跡名を目にすることもあるが、推薦書と報告書に挙げられた遺跡名は一致しておらず、記載されている遺跡が構成資産と同格のものと考えられていると見なすことはできない (World Heritage Centre 1979)。よって、まずは構成資産の選定から取り組むことになる。

複数の構成資産が存在する場合、申請時のテーマと構成資産の合致性、そして構成資産同士の相関性が重要視される。既存の構成資産であるカルナク神殿とルクソール神殿との相関性を重視し、本遺産の登録時のテーマに沿ったものにすることを目標とする。

推薦書に記載された本遺産の価値は、新王国時代に宗教的中心拠点として繁栄したことが最も強調されている。しかし同時に、テーベが中心拠点となる基盤が築かれた中王国時代と、古代エジプトの文化が完全に衰退するローマ時代までの遺跡も重要であるとされている (World Heritage Centre 1979)。ローマ時代については、王朝時代に築かれた遺跡がローマ時代にどのように扱われ、変化していったのかを知ることができる痕跡が残っている遺跡が構成資産にふさわしいと考える。

以上を踏まえて、新たな構成資産を計9つ、コア・ゾーンは計7つを提案する (図2)。

- ①ネブヘトラー・メンチュヘテプの葬祭殿
- ②ハトシェプスト女王の葬祭殿

- ③王家の谷
- ④西谷
- ⑤王妃の谷
- ⑥アメンヘテプ 3 世の葬祭殿
- ⑦マディーナト・ハーブ
- ⑧ラメセウム
- ⑨ディール・アル＝マディーナ

(2) バッファ・ゾーン

バッファ・ゾーンは必要に応じて設けるものであり、絶対条件ではない。しかし、不要と判断した場合はその旨を報告する必要がある (World Heritage Centre 2012)。本遺産の場合、エジプト政府側からバッファ・ゾーンは不要だと報告したことはなく、且つ世界遺産委員会からは設置を要請されているため、設置案を提示する (World Heritage Centre 2006)。

バッファ・ゾーンは遺産の景観と構成資産以外の遺跡を保護するために重要な機能を有する地域であり、コア・ゾーンを補強する役割にある。また、バッファ・ゾーンの範囲内では現状の改変を行う場合、世界遺産委員会の承認を得ることが義務付けられている (World Heritage Centre 2012)。

構成資産の景観と地元住民の現状の生活維持のためにコア・ゾーンを設置することができなかった部分の補強、構成資産の周辺の重要な遺跡の保護を目的として、現在設定されているコア・ゾーンを基本に考案した。また、アル＝ターリフとディール・アル＝シャルウィート以南の地域は世界文化遺産としては不適當であると判断し除外した (図 2)。

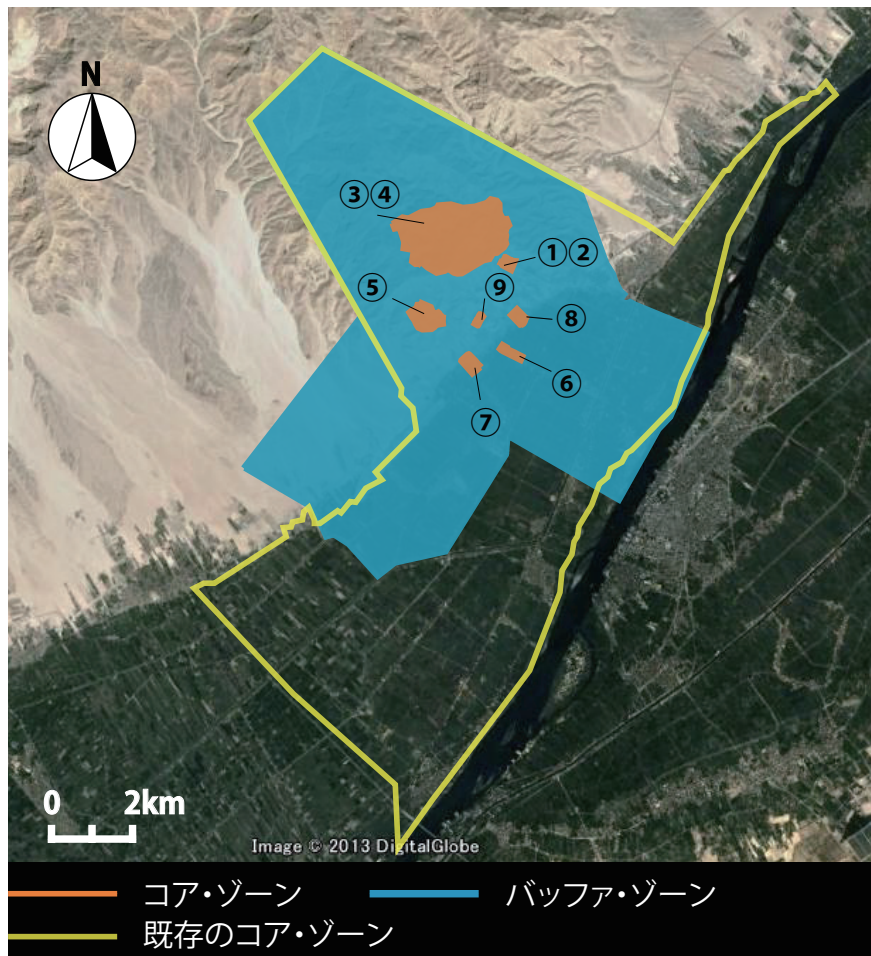


図 2 西岸のコア・ゾーンとバッファ・ゾーンの提案

6. 文化財の活用としての観光と地元住民との共存・共生

コア・ゾーン内では勿論のこと、構成資産の景観や保護に悪影響をもたらす土地改変はあってはならない。ところが本遺産では、世界遺産委員会からの度重なる指摘があったにも関わらず、観光産業の利益向上を目的とした土地改変が繰り返し行われている。これに伴って住居の撤去等も行われており、地元住民の生活を脅かしている。日本でも東日本大震災の復興にあたって、文化財保護法に規定されている埋蔵文化財の調査が足枷となっていると問題視された。文化財の存在が地元住民に悪影響を及ぼしている例が少なくないこの時世に、この問題は易々と見過ごすことはできない。本章では、文化財を活用するにあたって生じる地元住民との共存・共生の問題を「スフィンクス参道」と「クルナ村の移転」の2つ例に論述する。この2つのプロジェクトはコア・ゾーン、或いはバッファ・ゾーン内における活動のため、現状維持、または世界遺産委員会の承認が必要である。しかし、世界遺産委員会の決議と再三の要請に反し、エジプト政府によって強行された。

(1) スフィンクス参道

スフィンクス参道の復元は、1970年から住宅・都市開発省が主導で、古代の遺跡の保存、市街地の管理、そして持続可能な経済発展を目的としたルクソール市総合発展計画（Comprehensive Development Plan for the City of Luxor）の一環として実施されている。

本計画は2006年に詳細な計画内容が提示され、翌2007年1月にムバラク前大統領の下、着手された。スフィンクス参道とは、ネクタネボ1世によって敷設されたカルナク神殿とルクソール神殿を結ぶ参道である。道の両脇には1200以上のスフィンクス像が列をなしている。本計画は古代の景観を復原するという観光政策で、観光客が参道を歩き、両神殿を行き来できるようになる予定である。神殿付近の参道は過去の発掘調査によって既に露出していたが、2.4kmにも及ぶ長距離の参道の大部分は埋没している状態だった。発掘に際して、参道上に位置する住居、商業施設、行政・宗教施設を含め、全ての建造物の移転、取り壊しが計画され、実行された。今後は、スフィンクス像と景観の修復、そして最終段階としてスフィンクス参道に隣接する市街地を参道の景観に見合う形に修正することが本計画の実施項目として上がった（Abraham, G. & Bakr, A. 1999, 2000, CNRS 2011）。

スフィンクス参道を検出した結果、スフィンクス像、台座、参道の敷石の多くが失われており、残存しているものも保存状態が良くないことがわかった（図3）。現在は既に多くの住居等が強制的に立ち退きさせられていた。現時点で検出できていないのは、道路とコプト教教会の周辺である。



図3 スフィンクス像の残存状況



図4 スフィンクス参道とコプト教会

エジプト国民の1割という少数であるコプト教徒は、1970年代中頃以降のイスラーム主義運動が行われて以来、常に窮屈な生活を強いられている（オスマーン 2011）。スフィンクス参道の上に立地するコプト教会も他の住居と同様に立ち退きを命じられているはずだが、折り合いのついていない状態が続いているようである（図4）。立ち退いた場合、教会と周辺に住むコプト教徒もまた新たな用地を求めなければならないが、少数派で生活が圧迫されているコプト教にとっては非常に困難なことである。

修復、復原に加え、長期的なものとしてメンテナンス、モニタリング調査、警備にかかる費用は膨大である。出土したスフィンクス像の破片は現地に放置されており、それが持ち出される危険は十分にある。地元の子どもたちにとっては格好の遊び場になっているのもまた現状で、遺構の劣化は進む一方である。しかし、神殿から離れた場所では警備員の姿を見かけることはなかった。

理想としては、スフィンクス参道は発掘せずに住居や町並みはこれまで通りであるべきだったと考える。開通したとしても、現在のエジプトの情勢下で2.4kmもの長距離を、そして町中を歩く観光客は少ない。現地の日本人観光客のガイドをしている人に聞けば、個人で外を歩いている観光客は少なく、団体のツアー旅行でバスを使用して観光地間を移動しているという。スフィンクス参道を訪れたとしても、多くはルクソール神殿から続く参道を少し歩いて満足してしまうだろう。費用対効果は全く見込めない。

今後の方針としては、コプト教の教会の用地はそのまま残しておくべきだと考える。既に全て新材で復元されたスフィンクス像も目にしたが、まずはオリジナルである遺構の修復を行い、その場に放置されている破片は取り上げて保管、復原をし、適切な保存処理がなされなければならない。また、遺物が放置され、遺構が遊具と化すという人災による劣化を阻止するためにも適切な間隔で警備員を配置しなければならない。今、遺物と遺構が置かれている環境は非常に劣悪である。このままでは古代の景観の復原とは有名無実で、真正性に欠けた現代における古代の模倣になるだけである。

(2) クルナ村の移転

クルナ村はドラ・アブ・アル＝ナーガ (Dra Abu el-Naga) からクルナト・ムラーイ (Qurnet Murrai) にかけて、多くの遺跡が密集する広大な地域を指している。

クルナ村では、1800年代から岩窟墓を住居とするようになり、地元住民による盗掘と生活水の使用を原因とする遺跡の破壊が続いてきた (Sympson 2003)。以前から地元住民と遺跡の共存・共生の困難性が指摘されており、1970年代終わりには村の移転が計画されたが、住民の反対が強く、失敗に終わった (Hawass 2009)。

1994年11月、上エジプト一帯を豪雨が襲い、この地域が壊滅的な被害にあったのに乗じてクルナ村の移転が再び計画された (Sympson 2008)。本計画は学術論文等で論議され、世界遺産委員会も再三にわたって再検討を要請した。しかし2008年のケベック会議で村の返還を要請したのを最後に、世界遺産委員会で本件が問題として上がることはなく、本計画は断行された (World Heritage Centre 2008) (図5)。

現在、クルナト・ムラーイと道路に面した住居や店舗以外は全て撤去され、アル＝ターリフ (el-Tarif) 北部に建設されたニュー・クルナ村に移転した。規格の統一された団地のような住宅に居を構えている。住宅の周辺にはモスクや商店街等の生活環境が整備されており、明るい町並みの印象を受けた。

クルナ村の住民は、200年以上、調査隊の作業員としてエジプト学の発展を根底で支えてきた。遠く離れた場所に遺跡と現代の人々を隔離してしまえば、遺跡の保存問題が軽減されるのは確かである。しかし、クルナ村もまた過去から連続と積み上げてきた歴史があり、テーベ西岸の文化的景観を構成する重要な一要素である。文化財に最も近く、一番影響力のある地元住民を尊重し、官民一体となって取り組む姿勢が何より

も重要である。



図5 撤去された住居の残骸

7. おわりに

本研究では「古代テーベとそのネクロポリス」における遺跡の保存と活用を広く概観し、全体像を把握した。今後は、2008年の移転以降、調査・研究が減少しているクルナ村に研究対象を絞って、クルナ村の歴史と遺跡との関わりを明らかにしていく。テーベ西岸の遺跡整備計画を考案する際の一助となることを目指したい。

外国調査隊がエジプトの情勢を大きく変えることはできない。しかし混迷を極めていく今現在でも、遺跡の整備を進め、人々の文化財に対する認識を変革していくことに努めることで、今後のエジプトのために、遺跡と現代の人々が共存・共生、そして共栄する社会を準備していくことはできる。エジプト政府、エジプト国民、地元住民、学者、観光客、様々な視点に立ち、現代の人々が文化財と共存し、共生し、そして共栄する日が訪れることを願い、もエジプトにおける文化資源論の在り方を論考していく。

主要参考文献

Abraham, G. & Bakr, A.

1999 *Comprehensive Development Plan for the City of Luxor, Egypt: Investment Project#1, Investment Portfolio for Proposed Grant of US \$40 million to the Arab Republic of Egypt for the Restroration of the Avenue of the Sphinxes, Executive Summary*, Abt Association Inc., Cambridge.

Abraham, G., Bakr, A. & Lane, J.

2000 *Comprehensive Development Plan for the City of Luxor, Egypt: Final Structure Plan, Volume I – Technical Report, Executive Summary*, Abt Association Inc., Cambridge.

CNRS

2011 *French-Egyptian Center for the Study of the Temples of Karnak, CSA-CNRS USR 3172, Activity Report 2010*.

Hawass, Z.

2009 *The Lost Tombs of Thebes Life in Paradise*, C&C Offser Printing Co. Ltd., China.

Sympson, C.

2003 “Modern Qurna: Pieces of an Historical Jigsaw”, in Strudwick, N. and Taylor, J.H. (eds.), *The Theban Necropolis: Past, Present and Future*, The British Museum, pp.244-249.

Sympson, C.

2008 *The West Bank Since “antiquity”*, Paper given at the Egypt Exploration Society Conference, (<http://www.qurna.org/>)

article8.htm).

World Heritage Centre

- 1979 *Report of the 3rd Session of Committee*, (http://whc.unesco.org/archive/advisory_body_evaluation/087.pdf)
- 1998a *Decisions of the twenty-second extraordinary session of the Bureau of the World Heritage Committee (Kyoto, 28-29 November 1998) with regard to the state of conservation of properties inscribed on the World Heritage List, noted by the Committee*, (<http://whc.unesco.org/archive/repcom98a4.htm#sc87>).
- 1998b *World Heritage Committee, twenty-second session, Kyoto, Japan 30 November- 5 December 1998(WHC-98/CONF.203/5)*, (<http://whc.unesco.org/archive/1998/whc-98-conf203-5e.pdf>).
- 2000 *Periodic Reporting, (Cycle 1) Session II*, (<http://whc.unesco.org/archive/periodicreporting/ARB/cycle01/section2/87.pdf>).
- 2006 *World Heritage Committee, Thirtieth Session, Vilnius, Lithuania 8-16 July 2006(WHC-06/30.COM/7B.Add)*, (<http://whc.unesco.org/archive/2006/whc06-30com-7b.addE.pdf>).
- 2007 *World Heritage Committee, Thirty-first Session, Christchurch, New Zealand 23 June-2 July 2007(WHC-07/31.COM/24)*, (<http://whc.unesco.org/archive/2007/whc07-31com-24e.pdf>).
- 2008a *World Heritage Committee, Thirty-Second Session, Quebec City, Canada 2-10 July 2008(WHC-08/32.COM/7B.Add.2)*, (<http://whc.unesco.org/archive/2008/whc08-32com-7B.Add.2e.pdf>).
- 2008b *World Heritage Committee, Thirty-Second Session, Quebec City, Canada 2-10 July 2008(WHC-08/32.COM/8D)*, (<http://whc.unesco.org/archive/2008/whc08-32com-8De.pdf>).
- 2009 *Thirty-third Session, Seville, Spain 22-30 June 2009(WHC-09/33.COM/20)*, (<http://whc.unesco.org/archive/2009/whc09-33com-20e.pdf>).
- 2010 *World Heritage Committee, Thirty-fourth Session, Brasilia, Brazil 25 July- 3 August 2010(WHC-10/34.COM/7B)*, (<http://whc.unesco.org/archive/2010/whc10-34com-7Be.pdf>).
- 2012a *Operational Guidelines for the Implementation of the World Heritage Convention*, (<http://whc.unesco.org/archive/opguide12-en.pdf>).
- 2012b *World Heritage Committee, Thirty-sixth Session, Saint-Petersburg, Russia 24 June- 6 July 2012(WHC-12/36.COM/7B.Add)*, (<http://whc.unesco.org/archive/2012/whc12-36com-7BAdd-en.pdf>).
- 2013 *World Heritage Committee, Thirty-seventh Session, Phnom Penh, Cambodia 16-27 June 2013(WHC-13/37.COM/7B)*, (<http://whc.unesco.org/archive/2013/whc13-37com-7B-en.pdf>).

オスマーン・ターレク

- 2011 『エジプト 岐路に立つ大国：ナセルからアラブ革命まで』(久保儀明訳)、青土社。

卒業論文概要

古代エジプト古王国時代から第一中間期における王権観

松永 修平*

1. はじめに

古代エジプトにおいて王権は非常に重要な役割を果たしてきたが、古王国時代から第一中間期にかけてどのように地方の州侯と関わっていたのだろうか。古代エジプトの王権観については内田杉彦が研究史をまとめている（内田 1978）。これまでの通説はフランクフォート（Frankfort, H.）に代表されるものであり、王は神と人間の両者を互いに結びつける役割を担う現人神と考えられ、また神々と対等な関係にある存在であり神性を備えた存在でもあるというものであった（Frankfort 1948）。さらに屋形禎亮は「王は創造神である太陽神ラーの化身として、この世においてラーの役割を演じ、マアトを維持する。役割を演じうる資格として、王は神性を有し、王である限りにおいて神とみなされ、しばしば「良き神」と呼びかけられた」としているように、王を人間とは別の存在であるとしている（屋形 1997）。また内田も同様に神王理念は古王国時代に成立したと述べている（内田 2003）。王は神と人間の仲介を行うために神としての性格を持つ必要があったのである。

一方で「王は神とは異なる存在である」という説から、現在では「王権は神性を持つ制度ではあるものの王自身は普通の人間であるために人間的な弱さを持つ存在であった」という説が有力になっている。木下理恵も王を神と同一視している史料は古王国時代のものではないとしている（木下 2003）。これは古王国後半に限定される結論ではあるが、少なくとも官僚階級にとって王は神とは考えられていなかったのである。第一中間期に入り王権は弱体化したとされてきた。この点について本卒業論文では後者の説を前提とし王権は古王国から第一中間期にかけてどのような存在であったのかに注目し考察した。そのためにこの時期に活躍した州侯が保持していた称号や彼らが残した碑文などから、彼らの王権に対する立ち位置がどのようなものであったのかについて注目した。また王権と神殿との関係についても、この時期に地方神殿に対してなされた免税や夫役免除の特権に着目し、そうした免除が王権に対して与えた影響についての考察を行った。

また古代エジプトにおいて宗教も切り離して考えることはできないため、第一中間期におこった宗教観の変化が王のあり方に及ぼした影響にも注目した。さらに王の理想像も当時の教訓文学である「メリカラー王への教訓」や「シヌへの物語」から見ていった。こうした教訓文学は当時の社会の状況を反映しており、加えて当時の人々が持っていた王権観などもうかがうことができるからである。

本卒業論文では古王国時代から第一中間期にかけての王権観を1つの側面からではなく、3つの側面から見ていき、同時に時代の変遷の中で起こった理想の王のあり方の変化についても考察した。

* 早稲田大学大学院文学研究科修士課程

2. 州侯と王権

古代エジプトにおいて王権とは国家の中心の機能を果たしており、神王理念がその思想の根本であった。王の神性は、実際には王は自らの責務である「マアトの維持」を果たしている間は保たれていると考えられていた。そして王の王としての活動はすべてマアトの維持、そしてその実行という思想に基づいていた。王が完全に神性を獲得できるのは死んだ時であり、生きている間に王は神と同一視されることはなく、死ぬことで初めて神々の一員となることができたのである。そしてその神となった王の葬祭を行うことで王権は次の王へと渡されるのである。人々が生きている王を崇拜するときは王自身ではなくオシリス、アメン・ラー、ラー・ホルアクティなどの神々を崇拜していた。

地方では王権はどのように捉えられていたのか。これまでは古王国の末期から王権の弱体化が次第に進行し、そしてほぼ同時に地方の州侯らの権力が伸長し始め、地方分権化がはっきりと現れてくるようになると考えられてきた。しかし、カナワティ(Kanawati, N.)は古王国末期にはエジプト全土で経済的な衰退が見られ、テーベが新しく王朝を開くまでは地方分権化を進めた州侯は存在しなかった、つまり州侯は王権から経済的な側面において独立してはいなかったと考えている(Kanawati 1977)。

古王国時代が終わり第一中間期になると、革命が起こり王権によって保たれていた秩序は無くなる。貧乏人と裕福な者の立場は逆転し、掠奪や殺戮があらゆるところで発生したことが、この時代の教訓文学である「イプエルの訓戒」に多く描写されている。そしてこの第一中間期に非常に重要な役割を果たしたのがこの州侯であり、彼らについて知るための手掛かりの一つが保持していた称号である。

まず州侯の成立から見ていく。第5王朝半ば以来、中央から地方に派遣された州知事が任地に土着するようになっていった。王はその家系の中から次の州知事を任命するようになり、州知事職の世襲化が起こる。そして王の任命権が有名無実化し、この段階で州侯が成立したとすることができる。また王は王権の安定のために州侯を利用し、彼らに権力を与えていった。

第4、5王朝において、州の行政の役割を担ったのは「大地所の管理者」の称号を持つ者であった。また同時に「大地所の管理者」の他にも「王の人民の長官」、「新しい村々の長官」、「要塞の長官」、「王の諸事の長官」、「土地のリーダー」、「使節の長官」が同時に用いられていた。しかし第6王朝に入ると彼らが保持する称号に変化が見られる。その中でも「大首長」という称号はすべての州にその保持者がいるわけではなかった。「大首長」の多くがその任地に土着したようだが、その地位が世襲化したわけではなく、またこの称号の変化は王朝の変化とは関係がなく、王都の近くでは古い称号が他の地域と比べ長く残っていた。

第一中間期には称号「某州の大首長」が上エジプト全土で用いられるようになった。この称号とともに「世襲貴族」、「伯」、「神官長」等の称号を持っていたものは州侯とみなすことができる。特に「神官長」称号を持つということは、州の行政に加えて神殿の行政についてもその人物が掌握していたとすることができる。ただし、この役職は「神官長」と兼任された例は非常に少ないことは考慮に入れる必要がある。つまり州侯がすべての権利を掌握しているとは言えない。

「上エジプト長官」の称号は第5王朝末期から見られるようになり、位階称号としても用いられていたとされる(吉成 1982)。彼らの役割は上エジプトからの徴税、王宮との連絡であり、王の支配の強化のために作られた役職だと考えられている。しかし「上エジプト長官」職が州長官たちの位階称号と考えられるのは第6王朝の中の短期間で、それ以外では他にも多くの貴族がこの称号を保持していたため彼らを州侯と呼ぶことはできない。またこうした称号の保持者は行政上において重要な役割を担っていた州や、オシリス神やハトホル神などの国家神の信仰地のある州に見られるだけであった。

第3州の「大首長」の称号をもつアネクティフィも第一中間期の州侯として有名である。モアラにある彼

の墓に残された自伝から、彼は第2州のホルスに導かれ、そこに平和をもたらしたとされる。またここでいうホルスとは王ではなく、隼神ホルスのことであることから、彼は自らの判断で行動したと考えられている(吉成 1982)。さらに彼は第4州に対して軍事遠征を行っているのだが、これもこの州の将軍ヘルモンティスによる要請を受けての行動であるため王の命令ではない。この時に戦った相手は第5州の「大首長」ウセルである(吉成 1982)。彼は「王の肉体の長男」を自称しており、第8王朝または第9王朝の王族だと考えられている。しかし西村洋子はアネクティフィが戦った相手はウセルではなく、第4・5州の市侯連合とし、ウセルが第9王朝の時代の人間だと仮定すれば、アネクティフィの時代には第4州には州長官はいないと考えている(西村 1985)。またいくら彼が強い独立心をもっていたとしても王族を相手に戦うとは考えにくいだろう。

以上見てきたことを考えると、州侯は各地で権力をそれぞれ伸ばしてはいるものの、称号が王から与えられていることや、全土での経済的衰退の影響のため王から経済的に独立できていないことなどを考えると、王権が力を失ったとは考えにくい。州侯たちが王の命令以外で動いていたのも、王の統治がエジプト全土まで及んでおらず自力で自らの管轄地を管理しなければならず、この時期の彼らによる群雄割拠は独立心のためではなく、あくまで王の役割の補助的なものだったと考えるのが適当であると結論付けた。

3. 神殿と王権

王権の弱体化の一つの理由とされるのが経済的な衰退、つまり国庫の窮乏化である。この国庫の窮乏を引き起こした理由として考えられるのが地方神殿への免税や夫役免除の特権の付与である。この説の是非について、地方神殿に対する免税が王権にどれほど影響を与えたのかという点から考察した。

まず免税特権や夫役の免除の目的を見ていく。この免除がどういった目的で行われたのかについては二つの説が出されている。一つは地方勢力への王権の譲歩とみなすウィルソン(Wilson, J. A.)やゲーディッケ(Goedicke, H.)の説、もう一つはより有効な支配のための積極的政策とするマーティン＝パーディ(Martin-Pardey, E.)の説である。

ゲーディッケの説では弱体化を始めていた王権が神官の支持や忠誠を得るために免税特権の付与を行ったとしている(Goedicke 1979)。しかし畑守泰子はゲーディッケが第6王朝の免除特権付与の動機として地方での緊張が高まったことと、神殿が経済の中心として重視されるまでは指摘しているが、神殿や神官と役人の関係については曖昧なままだと述べている(畑守 1986)。

一方マーティン＝パーディは、地方神殿はもともと地方行政からは独立した存在であることと、またこうした免税などの勅令は行政と地方神殿の関係の再確認のためのものであるとしている。そして免除の目的は神殿に保護を与えることで地方勢力の台頭を防ぐことにあった。つまり王権による「勢力均衡」政策だったのである(Martin-Pardey 1976)。

免除が行われたことによる経済的影響は国家の衰退を招いた「自滅的制度」と考えられてきたが、カナワティはこの説を否定している。それはその免除が全ての項目に対して行われたのか、またその免除が行われた神殿の規模については不明であることから免除による国庫収入の減少の程度を正確に知ることができないためである(Kanawati 1977)。

上エジプトのコプトスにあるミン神殿の様子をコプトス勅令から詳しく知ることができる。ミン神はこのコプトスの神であるのと同時に東部砂漠地帯の守護神でもあり、そして豊穡神としても信仰されていた。この神殿に対する免除の項目については州内における労役、王宮などでの労役、夫役、軍事遠征または交易などのための遠征の徴発、さらに第6王朝期に入ると貢納物の納入の免除も加えられる。州内での労役は第5

王朝期、王宮などにおける労役は第6王朝期の勅令によるものであり、このことから免除の項目は時代ごとに変化をしていたことがわかる。その変化は王からの寄進によって領地を得ることで経済的基盤を固めてきた地方神殿と関わりがある。つまり第6王朝から王宮での労役や貢納物の納入が免除項目に含まれたということは、免除の目的が神殿を地方勢力から守ることにあるのだとすれば、経済的自立ができるようになったこの時期から項目に追加されたことも理解できる。

また、こうした免除勅令は基本的に「永遠に」と規定されているが、実際は王が自由にその取り消しを行えたことがコプトス B、C 勅令から確認できる¹⁾。これはミン神殿に免除特権を与えるための勅令であり、またこのようにある場所に免除特権が付与された場合、他の場所では免除特権を失う可能性があることを示していることから、免除特権は同時にあらゆる場所に対してなされた措置ではないことがわかる。さらに免除を行うことはその徴税分の税収がなくなるということであり、また免除の取り消しが自由であるということを見ると、この免除自体は王権の経済状況に大きな影響を与えたとは言えないのである。

次に地方行政と神殿行政の関係について見ていく。前章で述べたように、上エジプト長官の役割は徴税を含んでいたことから、神殿に対する徴税も当然彼らの仕事の一つであった。しかしこの徴税が免税特権を持つ神殿に対しても行われていたことが、違反者に対する懲罰の規定が設けられていたことから推測できる。

また、コプトス D 勅令には免除と保護のためならば神殿への介入が許されていることが示されており、またこの権利は中央政府の役人が所持していたと考えられている。このことから神殿は王権からの独立ができていたわけではないことがわかる。

以上のことから地方神殿に対する貢納や夫役免除は、地方の役人が神殿に干渉することを禁止し、そうした介入から神殿を守るといった目的も含んでいないことがわかる。この神殿に対する介入の阻止は彼らの勢力の拡大の進行を促したとは言えない。さらにこの免除も王権が自由に行使しており、王権の経済基盤を揺るがすような「自滅的制度」ではないのである。

4. 宗教観の変化と王の理想像

古代エジプトにおいて王権と宗教とは切っても切り離せない関係である。この世の秩序は神が定めているのと同じように、王権もまた神が定めている。しかし王権は神が定めたものであるという前提のもとで、王の在り方は古王国時代から第一中間期にかけて姿を変えていった。また古王国の終わりにかけて古代エジプト人の宗教観も変化をしていく。

まず宗教観の変化から見ていくと、古王国時代において死後の永生は王だけに許された特権であった。そして王の家臣や官僚階級の人々は王に仕えることで恩寵を受け、王と同様に死後の永生の権利を得ることができていた。つまり王は不死を享受するだけでなく、不死の源とも考えられていたのである。また不死のための努力には公平性は存在しなかった。つまり古代エジプトの宗教は来世での生活に希望を与えるために登場したものの、庶民階級はただ穴に埋められるだけでそれを享受することはできず、富裕層だけが不死の獲得への儀式であるそれ相応の埋葬をできるだけ余裕があったのである。

しかし第一中間期になるとその特権は一般民衆にも広まり、普遍的なものへと変化していった。王や貴族でなくても棺に呪文を刻めば誰もが永生を獲得でき、死後オシリス神となることができた。また古王国時代の終焉とほぼ同時に人間平等の思想が広まり始め、人間が平等であることは王が実現すべき責務となった。このような「正義」の価値の発見が第一中間期の最も注目すべき点の一つであり、正義が永遠の価値を持つものと考えられるようになった。このようなことにより、誰もが永生を獲得できるようになったといえる。こうした王の特権が民衆に広まったことは、王権の弱体化を示しているように見えるかもしれないが、王の

責務が人間平等の実現であることを考えると、死後の特権の普遍化も王の責務の一つだと考えられるため、そのようには考えにくい。反対に王権が力のほとんどを失っているのならば、万人の平等は達成できないであろう。

これまで古代エジプト人の宗教観は古王国時代において死後の永生は王にだけ許されていたものが、第一中間期に入るとその特権は民衆にも広まり、所謂「来世の民主化」の思想が登場し始めたことを確認した。このような「来世の民主化」思想は一見王権の弱体化を反映しているようにも見えるが、これは人びとに平等を実現するためには王権の力がなければ成し遂げられない。そのため宗教観の変化からも王権の力が失われたとは言えないのである。

次に王の在り方の変化について見ていく。ホルヌクはエジプト人の歴史を祝祭の際に演じられる祭祀劇に例えている。王は即位することで初めてホルスの役を演じることができたのである。そして王はこの役割を演じる限り神とみなされるのである(内田 1978)。あくまで「神とみなされる」のであり、「神となる」わけではない。

第一中間期には古王国時代から広く取り入れられてきた王権観も見直されていくこととなる。王の神性は失われ、一人の人間的な弱みをもつ人間として考えられるようになった。古王国時代までは、王に要求されていた資質は「権威」と「悟性」であった。しかし第一中間期に入るとさらにマアト、所謂「正義」も必要と考えられるようになった。

「メリカラー王への教訓」もまた第一中間期における王の理想像について言及している。この作品は第一中間期末期に成立したと言われ、第10王朝最後の王メリカラーに対し父が記した教訓である。ここでも「正義」の遂行こそが、神の定める秩序にふさわしい行いであり、それが王であるための義務であったとされている。以下のように記述されている。

地上における限り正義を遂行すべし。涙流すものを宥め、未亡人を虐げず、誰もその父の財産から押し
のけず、いかなる役人もその地位から退けるな。不正に罰することのないよう心せよ。殺してはならぬ。
汝に何も益するところがないからだ。(中略)。かくしてこの国は固まろう。

人は死後も生き続け、その行為はかたわらに山と積みあげられる。(中略)。悪事を犯さずしてそこに
至るものは、神のごとくにそこで(生き)つづけ、永遠の主のごとくに自由に歩めよう。

(屋形・杉 1978 より引用)

ここから古王国時代のように王が神王であることで永生を保証するのではなく、こうした「正義」を遂行することが永生を獲得するための条件だということがわかる。

「シヌへの物語」においても、エジプト人にとっての理想の人間像、秩序、本質が描かれており、この作品からも「正義」の遂行の重要性を確認できる。またこの作品において見られる重要な表現がもう一つある。それは王のもたらず秩序の重要性である。シヌへは、ある事情²⁾で国外に逃亡し、最終的に落ち着いた場所で高い地位を得ているのにもかかわらず再びエジプトへ戻ることを祈る。これはエジプトにおいて何よりも王の秩序の下にあることが重要とされることを示していると考えられる。そしてエジプト人が国内にいることに大きな安心感を感じるほど王が秩序の維持を保っていたこともこの教訓から推測できる。

以上、古王国から第一中間期にかけて王権の在り方においても変化が見られることが確認できた。権威を振りかざすことによる統治から、正義の遂行によって人びとに平等をもたらす統治への変化である。そして

やはりこの正義を成し遂げるためにも王権は力を保持する必要があるのである。

5. 終わりに

以上本卒業論文では、エジプト古王国時代から第一中間期にかけての州侯、神殿、宗教と王権との関わり、そして王の理想像の変化について見てきた。それぞれの視点から考えても、王権は力を失ったというよりもむしろ、王権観の変化、または王の在り方の変化があったのに過ぎなかったと言えるのではないだろうか。また、この卒業論文で扱った資料は主に古王国時代と中王国時代のものが中心であり、第一中間期の王権観を明らかにしたとは言えない。そのため今後この時期の研究をさらに進めていく必要がある。

註

- 1) 「この上エジプトにある免除された村々において、いかなる免除もなしてはならぬ」(畑守 1986 より)
- 2) 「シヌへの物語」(『古代オリエント集』杉勇編、筑摩書房、1978年、403 - 414頁) 参考。アメンヘムハト一世の暗殺を知り、センウセルト一世はリビアへの遠征から急いで王宮へと向かう。その時に軍隊にいた王子も暗殺を利用して即位しようと計画する。これを聞いたシヌへは逃亡を決意する。この逃亡の理由は不明である。おそらくセンウセルト一世の地位が失われることを恐れたのか、王の暗殺計画を黙認したことの責任を恐れたのかであろう。

参考文献

- Brewer, D. J.
2012 *The Archaeology of Ancient Egypt: Beyond Pharaohs*, Cambridge, New York, Cambridge University Press.
- Frankfort, H.
1948 *Kingship and the Gods*, Chicago.
- Goedicke, H.
1979 "Cult-Temple and 'State' during the Old Kingdom in Egypt", in Lipiński, E. (ed.), *State and Temple Economy in the Ancient Near East I*, Belgium, pp.113-131.
- Hayes, W. C.
1993 "The Middle Kingdom in Egypt", in Edwards, I.E.S. et al. (eds.), *Cambridge Ancient History I-2* (3rd Edition), Cambridge, pp.518-523.
- Kanawati, N.
1977 *The Egyptian Administration in the Old Kingdom: Evidence on Its Economic Decline*, Warminster.
- Martin-Pardey, E.
1976 *Untersuchungen zur ägyptischen Provinzialverwaltung bis zum Ende des Alten Reiches*, Hildesheim.
- Okon, E. E.
2012 "Religion and Politics in Ancient Egypt", *American Journal of Social and Management Sciences* 3(3), pp.93-98.
2012 "Archaeological Reflection on Ancient Egyptian Religion and Society", *European Scientific Journal* vol.8 No.26, pp. 107-117.
- Shaw, I.
2000 *The Oxford History of Ancient Egypt*, New York.
- Trigger, B. G., Kemp, B. J., O'Connor, D. and Lloyd, A. B.
1983 *Ancient Egypt: A Social History*, Cambridge.
- Wilson, J. A.,
1956 *The Culture of Ancient Egypt*, Chicago.
- アスマン, J.
1987 『エジプト初期高度文明の神学と信仰心』(吹田浩訳)、関西大学出版.
- イオンズ, V.
1988 『エジプト神話』(酒井傳六訳)、青土社.
- 石上玄一郎
1980 『エジプトの死者の書 宗教思想の根源を探る』、人文書院.
- 内田杉彦
1978 「エジプト — 王権観をめぐる —」『オリエント』21(1)、日本オリエント学会、26-30頁.
2002 「古代エジプトの死後の世界」『明倫歯誌』5(1)、明倫短期大学紀要委員会、58-63頁.

- 2003 「ピラミッドと王権」『明倫歯誌』6(1)、明倫短期大学紀要委員会、55-61頁。
- 2004 「古代エジプト人と神々」『明倫歯誌』7(1)、明倫短期大学紀要委員会、39-44頁。
- 大貫良夫、前川和也、渡辺和子、屋形禎亮
- 2009 『世界の歴史1 人類の起源と古代オリエント』、中公文庫。
- 木下理恵
- 1993 「古代エジプトの式文「ヘテブ - ディ - ネスウ」の王権観」『史泉』(78)、関西大学史学会、1-28頁。
- 2003年『『プタハホテップの教訓』に見る古代エジプト古王国時代のマアト』『史泉』(98)、関西大学史学会、1-18頁。
- ロザリー・デイビッド
- 1986 『古代エジプト人 その神々と生活』(近藤二郎訳)、筑摩書房。
- 西村洋子
- 1985 「古代エジプトの州侯に関する一考察(1)」『史泉』(62)、関西大学史学会、1-16頁。
- 1986 「古代エジプトの州侯に関する一考察(2)」『史泉』(63)、関西大学史学会、17-55頁。
- 1987 「古代エジプト・ヘルモポリス州のハトヌブに残されたネヘリ・グラフィティについて」『史泉』(66)、関西大学史学会、1-11頁。
- 萩生田憲昭
- 1987 「古代エジプト第1中間期のクロノロジーについて」『史泉』(65)、関西大学史学会、1-23頁。
- 畑守泰子
- 1986 「エジプト古王国後半における貢納・夫役免除の意義 — 地方神殿を中心に —」『史学雑誌』95(7)、公益財団法人史学会、39-62頁。
- 1996 「エジプト古王国時代の葬祭領地と神殿」『人文学報』268、人文学報編集委員会、13-41頁。
- 1997 「ピラミッドと古王国の王権」、樺山紘一編『岩波講座 世界歴史2』、岩波書店、211-232頁。
- 三笠宮崇仁
- 1988 『古代エジプトの神々 その誕生と発展』、日本放送出版会。
- 屋形禎亮
- 1965 「イプエルの訓戒」、石母田正等編『古代史学講座11』、学生社、12-45頁。
- 1976 「古代エジプトにおけるマアトについて 伝統と変革の問題をめぐって」『史潮』1、135-139頁。
- 1997 「古代エジプト」、樺山紘一編『岩波講座 世界歴史2』、岩波書店、31-60頁。
- 屋形禎亮、杉勇訳
- 1978 「シヌへの物語」、杉勇編『古代オリエント集』、筑摩書房、403-414頁。
- 1978 「イプエルの訓戒」、杉勇編『古代オリエント集』、筑摩書房、450-462頁。
- 1978 「メリカラー王への教訓」、杉勇編『古代オリエント集』、筑摩書房、518-526頁。
- 吉成薫
- 1982 「古代エジプトの州侯 — 第一中間期の理解の手掛かりとして —」、『史観』107、早稲田大学史学会、308-321頁。

活動報告

2014 年度 早稲田大学エジプト学会活動報告

1. 総会

日時：2014年4月21日（月）

会場：エジプト考古学ビル2階

2. フォーラム、シンポジウム

(1) エジプト・フォーラム 23 『古代エジプトの来世観－新発見！ルクソール貴族の墓－』

日時：2014年10月11日（土）15:00-18:00

会場：早稲田大学大隈記念講堂（大講堂）

プログラム：

・基調講演 (1) 『古代エジプトの来世観』

吉村作治（早稲田大学名誉教授・東日本国際大学副学長・工学博士）

・基調講演 (2) 『ビール醸造長コンスウエムヘブの墓の発見』

近藤二郎（早稲田大学教授・早稲田大学エジプト学研究所所長）

・パネル・トーク『古代エジプトの墓と埋葬』

コーディネーター：吉村作治

パネリスト

「先王朝時代」：馬場匡浩（早稲田大学助教・文学博士）

「古王国時代」：高橋寿光（早稲田大学エジプト学研究所招聘研究員）

「中王国時代」：矢澤 健（早稲田大学エジプト学研究所招聘研究員）

「新王国時代」：河合 望（早稲田大学准教授・Ph. D.）

「第3中間期～末期王朝時代」：和田浩一郎（サイバー大学専任講師・文学博士）

総括：近藤二郎

懇親会会場：早稲田大学大隈会館



吉村先生の基調講演



パネルディスカッション

(2) 第3回太陽の船シンポジウム『太陽の船にこめられた古代エジプト人からのメッセージ』

日時：2014年7月28日（月）18:30-20:30

会場：早稲田大学小野記念講堂

プログラム：

【第1部】

・開会の挨拶

近藤二郎（早稲田大学文学学術院教授・早稲田大学エジプト学研究所所長）

・シンポジウムの趣旨・講演者紹介

吉村作治（早稲田大学名誉教授・工学博士 東日本国際大学副学長）

・基調講演“Maritime Archaeology and Ancient Egypt”『海事考古学と古代エジプト』

ポール・ピアース・クレスマン（アリゾナ大学年輪年代研究所助教・Ph. D）

通訳：河合 望（早稲田大学准教授・Ph. D）

【第2部】

・パネルトーク

コーディネーター：吉村作治

「調査の進捗報告」：黒河内宏昌（太陽の船復原研究所教授）

「ピットの中の作業について」：高橋寿光（早稲田大学エジプト学研究所招聘研究員）

「保存について」：青木繁夫（サイバー大学教授）

司会：河合 望

3. エジプト考古学特別講演会

(1) センウセレット3世ピラミッド発掘調査最新報告

アデラ・オッペンハイム博士（メトロポリタン美術館エジプト美術部）

日時：2014年7月22日（火）18:30-19:30

会場：早稲田大学早稲田キャンパス11号館506教室

(2) メトロポリタン美術館を中心とする合同調査隊による

ルクソール西岸マルカタ王宮の調査：2008～2014年

ダイアナ・クレイグ・パッチ博士（メトロポリタン美術館エジプト美術部長）

日時：2014年10月14日（火）18:30-19:30

会場：早稲田大学国際会議場3階 第2会議室



オッペンハイム博士



クレイグ・パッチ博士

4. 定期研究会

(1) 第21回

日時：2014年4月21日（月）

会場：エジプト考古学ビル2階

発表題目：「古代エジプト的＝アジア的なるものを求めて」

発表者：中川 武（早稲田大学理工学術院教授）

(2) 第22回

日時：2014年6月9日（月）

会場：エジプト考古学ビル2階

発表題目：「グラフィティにみる古王国時代の建築と社会－石材に文字を記す意図を読み解く－」

発表者：山田綾乃（早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程）

(3) 第23回

日時：2014年9月29日（月）

会場：エジプト考古学ビル2階

発表題目：「新王国時代におけるシャブティ・グループの差異と個体特徴の変化

－王のシャブティに見る変化の様相とその影響－」

発表者：熊崎真司（早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程）

(4) 第24回

日時：2014年12月4日（月）

会場：エジプト考古学ビル2階

発表題目：「カエムワセト王子とオペラ・アイダ」

発表者：高宮いづみ（近畿大学文芸学部教授）

5. 定期研究会発表要旨

(1) 「古代エジプト的＝アジア的なるものを求めて」

中川 武

1970年代の後半に、吉村作治先生のミニ・ピラミッド建設実験プロジェクトに参加。私にとっては、はじめてのエジプト、はじめての海外、はじめての建築の原像、はじめての人類の文明史的源流との出会いであった。そのことが、私なりの関心の推移にどのように影響したのか。現時点であらためて振り返ってみた。特に、古代エジプト的なものの中心にあるアジア的なものの、現代的な意味について再考した。

(2) 「グラフィティにみる古王国時代の建築と社会－石材に文字を記す意図を読み解く－」

山田綾乃

本研究会においては、修士論文で扱ったグラフィティと呼ばれる建築作業時の書き付けの集成に基づき、古王国時代全体を通してそのアセンブリッジの変遷を追った。さらに、アセンブリッジの変遷と当時の古王

国時代社会との関係性について考察した。

分析結果では、グラフィティのアセンブリッジが、古王国時代の石造建造物のプランや工法の変化と同調していることを示した。すなわち、建設労働者の組織形態は比較的短いスパンで変動しており、労働者の組織化の発展（規模の拡大や体系化）は建設事業の段階的発展と共にあるということが明らかになった。一方で、建築学上の変化を理由とした組織構成の変化とは異なる動きが第5王朝半ば前後に台頭することも判明した。第5王朝半ばに関しては、複数の研究成果によってその社会的・政治的变化が指摘されている時代であり、古王国時代末の一大画期、或いは古王国時代崩壊の初現として位置づけられようとしている。今後本発表の成果もその画期に関する議論の根拠の一部と成っていくであろうという展望を述べた。

(3) 「新王国時代におけるシャブティ・グループの差異と個体特徴の変化

－王のシャブティに見る変化の様相とその影響－

熊崎真司

本発表は、集成した王のシャブティの検討に基づくものである。所有関係、製作の前後関係の特定が比較的容易なこれらのシャブティを所有者別に個別の集合としてとらえ、王のシャブティに見られる個体ごとの変化、また、それら集合の間に見られる傾向の変化について論じた。王のシャブティ群は、新王国時代のシャブティの中でもとりわけ先鋭的な要素を有し、シャブティに見られる様々な変化を先取りしていることが認められた。しかしながら、これまで多くの研究が蓄積されてきた、王のものではないシャブティと比較した時、王のシャブティのみが有する特徴、王のシャブティから欠落していく、あるいは、採用されなかった特徴も多数存在することが分かった。このことから、王のシャブティは、同時代の他の人々のシャブティとは必ずしも同じ枠組みでとらえられるとは限らず、ある種並行関係にある存在としてとらえていく必要があると結論付けた。

(4) 「カエムワセト王子とアイーダ」

高宮いづみ

カエムワセト王子は、古代エジプト第19王朝ラメセス2世の第4王子であり、早稲田大学アブ・シール南遺跡調査隊が王子の石造建造物を発掘したことでなじみ深い。他方、オペラ『アイーダ』は、G. ヴェルディが作曲した古代エジプトを舞台にした壮大なオペラである。

両者の間にどのような関係があるのか、ないのか。それが本日の発表のテーマである。アイーダの原作者であるフランス人エジプト学者 A. マリエットを介して、両者の間につながりがあるかもしれないと推測してみた。

6. 法人会員

早稲田大学エジプト学会の法人会員として、(株) 熊谷組、(株) ポニーキャニオン、RKB 毎日放送 (株)、(株) アケトにご支援をいただきました。ここに記して感謝いたします。

2014年 エジプト調査概要

1. 調査期間および調査参加者（敬称略）

(1) 太陽の船調査

調査期間： 2014年1月1日～12月31日（継続中）

調査参加者： 【日本側参加者】

吉村作治（統括）、黒河内宏昌（現場主任）、高橋寿光、伏屋智美、米山由夏（以上部材の取り上げ）、イザベラ・ウフマン、西坂朗子、リチャード・ジャスキ、吉村佳南、青木繁夫、（以上保存修復）、池内克史、影沢政隆、鎌倉真音（以上三次元測量）、山田綾乃、福田莉紗（以上記録測量）、吉村龍人（現地事務所所長）、ユーセフ・カーリッド（現地事務所技師）、岩出まゆみ（広報）、佐々木愛（事務局）

【エジプト側主要参加者】

アフフィ・ローハイエム（エジプト側プロジェクトリーダー）、アイーサ・ジダン（エジプト側チーフコンサバーター）、ディア・エルディン（インスペクター）、エザト・フセイン（チーフワーカー）

(2) ルクソール西岸・アル＝コーカ地区調査

調査期間： 第7次調査 2013年12月19日～2014年1月12日

調査参加者： 近藤二郎、菊地敬夫、柏木裕之、河合 望、竹野内恵太、福田莉紗

(3) アブシール南丘陵遺跡調査

調査期間： 第23次調査 2014年8月3日～2014年9月13日

調査参加者： 吉村作治（隊長）、河合 望（現場主任）、近藤二郎、高宮いづみ、柏木裕之、高橋寿光、竹野内恵太、山崎美奈子、福田莉紗、荻谷浩子、馬場悠男、坂上和弘、阿部善也、大越 彩、内沼美弥、扇谷依李

2. 調査概要

(1) 太陽の船プロジェクト

①現場施設の建設

- a) 保存処理場；部材収納棚を設置、空調機器を追加し、保存処理場を完成。
- b) GEMCC 部材収納スペース；GEMCC の収蔵庫内に収納スペースを確保し、合計 482 段の収納棚を設置。
- c) 新しい蓋石用シェルター；春期の砂嵐で倒壊した木造シェルターに替え、鉄骨による新しいシェルターを建設。（施工は SAMA CONSTRUCTION CO.）

②部材の取り上げ

2014年1月～12月の間に、部材番号69番から304番までの取り上げを行った（部材番号202、215、

231、290、297、298を除く)。

③保存修復

パラロイド B72 (5%～15%) による部材の強化、パラロイド B72 (25%) を用いた変形の矯正、パラロイド B72 (50%～) を用いた分離部分の接合、およびグラスマイクロバルーンによる欠損個所の充填を保存修復の基本プランとして定めた。そして8月より本格的な保存修復を開始し、合計93点の部材の処理を終えた。

一方で、パラロイド B72 では強化しきれない部材のために、ナノ・セルロースおよびその他の物質のテストを、青木繁夫教授の指導のもと、(独) 東京都産業技術総合研究センターにて行った。

④三次元測量

池内克史教授および東京大学生産技術研究所池内研究室のメンバーにより、レーザースキャナーを用いてピット内の部材配置、および取り上げた部材の三次元測量を開始した。

⑤ GEMCC への部材の移送

保存修復を終えた部材のうち68点を、3回に分けて、GEMCC に設けた収蔵スペースに移送した。

⑥広報活動

a) シンポジウム；第3回太陽の船シンポジウム 太陽の船にこめられた古代エジプト人からのメッセージ、2014年7月28日(月)、18:30～20:30、於早稲田大学小野記念講堂

b) TV 放映；吉村作治監修、RKB 毎日放送制作のTV特番「古代エジプトミステリー紀行」が、12月14日(日) 15:30～17:00、TBS 系列全国ネットにて放映された。



保存修復作業の本格化した現場にて

(2) ルクソール西岸・アル＝コーカ地区調査

ルクソール西岸（ネクロポリス・テーベ）のアル＝コーカ地区での調査は、2007年12月から開始され、2013年12月19日～2014年1月12日にかけて第7次調査が実施された。この調査の目的はアル＝コーカ地区に位置する新王国時代第18王朝アメンヘテプ3世治世末期の高官ウセルハトの墓(TT47)を再調査することにより、この墓の正確な平面プランおよび墓内装飾・碑文を明らかにしようとするものである。第7次調査では、第6次調査で第47号墓の前庭部の南に土砂の崩落を防ぐための擁壁を設けたことを受けて、前庭部内南側の発掘調査を実施した。また、天井が部分的に崩落した前室の状況を確認するため、特に前室北側のクリーニングと測量を実施した。前庭部の東側の砂礫の堆積の除去も同時に実施した。特筆すべきは、前庭部内南側の砂礫の除去を行ったところ、南壁のほぼ中央から開口部が検出され、未登録の新たな墓が2基発見された。開口部は前庭部の南側に位置する無装飾の岩窟墓の入口であることが確認され、この墓はKHT01と名付けられた。さらにKHT01の前室の奥には別の墓の前室の一部が貫通しており、内部が壁画で装飾された墓(KHT02)が発見された。このKHT02は、内部の壁画の様式から新王国時代第19王朝末に年代付けられ、銘文からコンスウエムヘブという人物の墓であることが明らかになった。コンスウエムヘブは、「ムウトの工房の長」「ムウト神殿の醸造長」の称号を持ち、妻は「ムウト女神の歌い手」の称号を持つムウトエムヘブである。息子および娘もムウト神殿に関係する役職を持つことから、コンスウエムヘブとその家族はムウト神殿に関わる役人の家族であったことが判明した。壁画は葬送の場面、神々への礼拝の場面、被葬者の家族による被葬者への礼拝の場面、心臓の計量の場面、「太陽神への讃歌」などで構成され、古代エジプト新王国時代ラメセス朝時代の来世観に関する貴重な資料である。この発見は、考古省のムハンマド・イブラヒーム大臣が、2015年1月4日に公式に発表し、世界中のマスコミで報道され、世界的に注目されることとなった。帰国後は1月20日に早稲田大学で記者会見を行った。



コンスウエムヘブ墓発見時の様子

コンスウエムヘブ墓などを発見したことで、保護用の鉄扉の設置を目指したが、開口部の周囲から階段付きのプラットフォームなどの日乾煉瓦の構造物が検出されたこともあり、第7次調査終了時には鉄扉の設置はおこなわず、開口部は切石・焼成煉瓦・日乾煉瓦などで塞ぎ、セメントで完全に封鎖した。

なお、なお、本研究は早稲田大学特定課題研究(2013B-033)「古代エジプト、テーベ岩窟墓第47号(ウセルハト墓)の調査」(研究代表者:近藤二郎)、科学研究費基盤研究(B)(22404020)「古代エジプト、岩窟墓の掘削技術に関する調査研究」(研究代表者:柏木裕之)、早稲田大学特定課題研究(2013A-975)「古代エジプト新王国時代第18王朝史の再構築」(研究代表者:河合 望)などの助成によるものである。



第7次調査終了状況

(3) アブ・シール南丘陵遺跡調査

早稲田大学古代エジプト調査隊は、1991年よりエジプト・アラブ共和国、カイロ近郊のアブ・シール南丘陵遺跡において発掘調査と保存修復・遺跡整備を継続してきた。2011年1月のエジプト革命以来、発掘調査の実施は延期され、2012年には2009年の第19回以来約3年ぶりに第22回調査を実施したが、2013年8月のムルシー前大統領の解任に伴う混乱のために2013年に予定していた第23回調査は延期を余儀なくされ、2014年8月に2年ぶりに調査が再開された。第23回調査の目的は、イシスネフェルトの石棺の修復作業の継続、カエムワセトの石造建造物の未発掘部分の完掘、そしてイシスネフェルト墓のシャフト周辺の堆積を確認するための発掘調査であった。

イシスネフェルトの石棺の修復は、2010年より助成を賜っている住友財団の「海外の文化財維持・修復助成」によるもので、古代に破壊を受けたものの、非常に良質な石棺であるイシスネフェルトの石棺を保存修復し、展示することを目的としている。石棺の表面には青色顔料エジプシャン・ブルーを基調とする彩色レリーフでヒエログリフの銘文と神々の図像が施されたラムセス2世時代の王家の女性の石棺を代表とするものである。第22回調査において、埋葬室から蓋を遺物収蔵庫に移動し、応急的なクリーニング処置等を行っ

たが、今回は将来に埋葬室内部で修復作業を行うための、石棺本体の移動を試みた。石棺全体の保護を行ったのち、油圧ジャッキを使用して石棺の位置を垂直に上げる作業を行ったが、時間的な制約などから石棺移動作業は完了せず、来季調査に継続されることとなった。

カエムワセトの石造建造物南側発掘区の調査では、地山由来の砂礫と石造建造物の造営に由来する石灰岩チップを充填して平坦面を作り出した痕跡が確認され、石造建造物南側外周壁の基礎部とその付近から3箇所ピットが検出された。これらのピットは石造建造物造営以前の活動の痕跡とみられた。イシスネフェルト墓のシャフト周辺の調査では、シャフトの東西軸に合わせるように層位確認のためにトレンチを設定し、石灰岩チップと多孔質石灰岩片が含まれた黄褐色細砂礫層と地山由来の多孔質石灰岩および赤褐色粗砂層の2層に大きく分層された。前者は盗掘時の排土、後者は最初のシャフト掘削時の排土と解釈された。



イシスネフェルト墓シャフト周辺（グリッド 11B, 12B）。中央がシャフト西側トレンチ



カエムワセト石造建造物南側（グリッド 4B, 4C, 4D）完堀後

来季調査では、イシスネフェルトの石棺の保存修復の継続、イシスネフェルトのシャフト周辺の発掘の継続、そして丘陵頂部の未発掘エリアの発掘を実施する予定である。

なお、本研究は文部科学省科学研究費補助金・基盤研究(A)(課題番号:26257010)「葬制から見た古代エジプト文明の変化とその社会的背景に関する学際的研究」(研究代表者:吉村作治)、基盤研究(C)(課題番号:24520869)「エジプト王朝時代の聖地の形成と展開に関する考古学的研究」(研究代表者:河合 望)、住友財団海外の文化財維持・修復助成などの助成によるものである。

3. 謝辞

2014年度も早稲田大学古代エジプト調査隊の活動に対し多くの企業様よりご支援をいただきました。ここに記して感謝いたします。

(株)ニトリホールディングス、(株)ダイドードリンコ、(社)全国優良石材店の会、RKB毎日放送(株)、(株)熊谷組、(株)エアーク、キリンホールディングス(株)、サントリーウエルネス(株)、(株)ポニーキャニオン、(株)ワイズマート、(株)アケト

2015年度も調査・研究、そしてエジプト学の普及に邁進してまいりますので、今後ともご支援、応援のほど宜しくお願い申し上げます。

編集後記

『エジプト学研究第21号』をお届けします。早稲田大学のエジプト調査が開始されてから50年近くの歳月が経過しました。本年から50周年を記念して展示会などいくつかのイベントを計画しています。今年は第二次世界大戦が終了してから70年にあたっています。日本のエジプト学研究とりわけ、エジプトをフィールドとしたエジプト考古学研究的歴史は、まだまだ欧米の研究の歴史の長さと比較すれば短いものです。でも50年間、継続して調査研究をつづけていくことは容易なものではなかったと思います。最近の西アジア・北アフリカの政治情勢は極めて厳しいものがあります。シリアやイラクにおける「イスラーム国(ISIS)」の台頭に象徴されるように、これらの地域におけるフィールド調査は、実質的に不可能なものとなっています。エジプトの現状も予断を許しませんが、それでも2014年度も複数の調査を実施することができました。昨年の20号の編集後記にも記しましたが、エジプトと日本を結ぶエジプト航空の直行便もなくなり、日本からの観光客もほとんどない状態です。しかしながら、南部の有名な観光地であるルクソールでは、世界各国の調査隊が数多く集まり、大規模な発掘調査を実施しています。2014～15年冬のルクソール地域、特に西岸では、これまで外国人観光客に依存していたものが、外国調査隊に肩代わりしたかのような状況でした。今後のことを予測することはできませんが、これからもエジプトで調査が継続できることを切に祈っています。

さて、本号では、調査報告としてギザの大ピラミッド南側のクフ王の第2の船坑で継続して実施している「太陽の船プロジェクト」の活動報告と2007年以来、ルクソール西岸のアル＝コーカ地区で継続調査をしている「第7次ルクソール西岸アル＝コーカ地区調査概報」の2本、そして、特別寄稿として「年輪年代学とエジプト学」がある。この著者のひとりであるピアース・ポール・クリスマン氏は、アリゾナ大学年輪年代学研究所の若き研究者で、現在、アリゾナ大学エジプト調査隊隊長も務めておられ、昨年夏に来日され、第3回太陽の船シンポジウムで“Maritime Archaeology and Ancient Egypt (海事考古学と古代エジプト)”と題して講演していただいた。

また研究ノートとして、本学文学部考古学コース4年生(2015年度から大学院文学研究科修士課程に進学)の山崎世理愛さんの論考を掲載することができた。今後の研究の進展が楽しみです。学部生の研究ノートを掲載できたことは大変に喜ばしいことではあるが、これ以外の若手の論文・研究ノート等を掲載できなかったことは大いに悔いが残る結果となってしまいました。次号には多くの論文・研究ノートの投稿を期待しています。

最後になりましたが、今年も本号の編集には、河合 望・馬場匡浩両氏に大変お世話になりました。明記して感謝します。

2015年3月末日

近藤 二郎

早稲田大学文学学術院教授

早稲田大学エジプト学研究所所長

エジプト学研究 第21号

2015年3月31日発行

発行所 / 早稲田大学エジプト学会

〒169-8050 東京都新宿区戸塚町1-104

早稲田大学エジプト学研究所内

発行人 / 吉村作治

The Journal of Egyptian Studies No.21

Published date: 31 March 2015

Published by The Egyptological Society, Waseda University

1-104, Totsuka-chyo, Shinjyuku-ku, Tokyo, 169-8050, Japan

© The Institute of Egyptology, Waseda University